

『ベルツの日記』について

——その内容と性格——

野口武司

—

エルウィン・ベルツ (Erwin Baelz 一八四九—一九二二) の経歴や実績、人間性や家庭生活、等に関する説明として、例えば『東京日日新聞』(大正二年九月三日付、『大正ニュー』(ス事典)①六九〇頁上段所載) に「日本医学界の恩人、ドイツで死去」なる見出しを以て掲げられた左記の文章などは、簡にして要を得ているといえる。すなわち、

ああベルツ博士 我が医学界の恩人なるベルツ博士は、かねて独逸^{ドイツ}柏林^{ベルリン}附近のスタットガルトに於いて病気に罹り、もっぱら加療中なりしが、薬石効なく、八月三十日朝ついに逝去したり。享年六十有余年。かつて博士の助手たりし榎田医学博士は、愁然として語って曰く、「先生は今を距る四十年前、未だ我が医学界の最も幼稚であった時代に来朝され、医科大学に生理学、内科婦人科学の教鞭を執られて実に三十余年に亘り、先生の薫陶を受けて今日名医として成功して居るものは約三千人にも達している。かの青山、三浦、入沢諸博士なども、いずれも先生の恩顧を受けし人々である。先生はかく後進の指導に努力された一方、また我が邦特有の風土病に関する病理の研究をされ、時々その結果を公にされたが、なかならず脚気病、癩病の学説等に至っては、今日なお斯界に重きをなして居る。これはすべて病理に関するものだが、また临床上に於ける先生も真に神のごとき手腕を有されて居った。往年

今上陛下が東宮殿下の時代御大患の折、橋本國手と共に御加療申し上げた甲斐あり、御平癒ありし事は皆人の知る処であるが、民間でも先生のために起死回生の恵みに浴した人は枚挙に遑いとまのないくらいである。先生の治療法に非凡の才があつた一例を言うと、今まで足腰の起たなかつた患者や音声の少しも出ない患者が、一回の簡易な手術でたちまち腰が起ち自分で歩いて帰ったり、にわかにか声を発し御礼が言えるようになった事さえある。また先生は趣味の多い人で、医学に関する事ばかりでなく東洋人類学にも造詣深く、殊に北海道のアイヌに就いての研究はなかなか熱心であつた。だから先生は、実に日本医学界の基礎を固めた大恩人と推称しても、決して過言ではあるまい。かように先生が外人であるに拘わらず我が邦のために努力されたのは、医師として本分を尽くされたばかりでなく、我が邦を熱愛される誠意があつたからである。従つて夫人も花子さんと称し純粹の日本人で、その間に挙げられた令息は徳之助と呼ばれ、目下共に郷里の独逸に住まって居るが、その家庭も日本式で、会話も日本語を使って居られたのは無論の事、庭園には桜や梅などの日本特有の植物を培養し、常に我が邦を愛慕されて居つた。兎に角今日先生を失つた事は、我が刀圭界の大損失と言わねばならぬ。自分は一日夜、突然先生の訃に接し哀悼の念に堪えず、直ちに弔電を發し、同時に壁間に先生の肖像を飾り靈前に花環を供して、生前の厚恩を謝しかつ永別をしたのである」云々。

ところで、彼の日記、いわゆる『ベルツの日記』(トク・ベルツ編 菅沼竜太郎訳 (岩波文庫) 以下、『日記』と略称する。)は明治九年一月一日より同三十八

年八月二十九日まで、記主ベルツ二十七歳より五十六歳に至るまでの約二十九年半に亘る事蹟についての記録である。

そこには多様の事物が取り上げられ、多種の人物が登載されており、それら諸多の人物中、とくに固有名をもつ者に限つてみても、六九四名(以下、これを「有固有名者合計数」と仮称する。後述する諸種の人名に関する数値は、)の多きを数え、そのうち

『日記』の記主たるベルツに直接面謁ないし面談した者、あるいはそう考えられる者が三九八名(「有固有名者合計数」の約五七%)、人

格・性質などの為人について記されている者が二五九名（「有固有名者合計」の約三七％）、そして医師たるベルツに診察・診療を受けた者が五九名（「計数」の約九％）に上る。また、件の『日記』に登載されている人物中、某かの事柄につき発言・言説して、自らの所信や見解を表明している者が一四六名（「有固有名者合計」の約二二％）を数え、そのうち、それを記主ベルツに対して為している者が八四名（「有固有名者合計」の約一二％、発言・言説者合計一四六名の約五八％）に達する。このように『日記』には、多種多様の人物と事物とに関わる事柄が豊富に収録されており、しかもこれらの事柄がベルツの日々の活動・活躍と緊密な関わり合いの中で精彩ある筆致で記述されているケースが頗る多いのである。いま、『日記』における年次別の記載条数・所用行数・一条当りの平均所用行数、等について精査した結果を分かり易く纏めて示すと次のようになる。

年次	記載条数	所用行数	一条当りの平均所用行数
明治 九年	一九	四二七	二二・五
一〇年	七	九三	一三・三
一一年	六	四一	六・八
一二年	三四	四〇八	一二・〇
一三年	二四	二三八	九・九
一四年	三	三九	一三・〇
一五年	三	二九	九・七
一六年	一	三五	三五・〇
一七年			

～ 闕（一七年、一八年は賜暇帰国）

三七年	三六年	三五年	三四年	三三年	三二年	~ 闕	三〇年	二九年	二八年	二七年	二六年	二五年	二四年	二三年	二二年	二〇年
一八八	六四	三三	一九	五〇				三	七	二	七	一三	七	四	二七	二
四二六三	一〇二八	三八五	二二七	五〇九				一六一	二四	六六	三八	六四	五七	一五	三二二	二六
二二・七	一六・一	一一・七	一一・九	一〇・二				五三・七	三・四	五・五	五・四	四・九	八・一	三・八	一一・六	一三・〇

これにより、記載条数では、明治三十七年が一八八条と最も多く、以下、同三十八年（九二条）↓同三十六年（六四
 条）↓同三十三年（五〇条）<sup>△以上、五〇条
 以上の年次</sup>の順に続き、所用行数では、明治三十七年が四二六三行と最も多く、以下、
 同三十八年（一八八六行）↓同三十六年（二〇二八行）↓同三十三年（五〇九行）↓同九年（四二七行）↓同十二年（四〇
 八行）<sup>△以上、四〇〇行
 以上の年次</sup>の順に続き、そして一条当りの平均所用行数では、明治二十九年が五三・七行と最も多く、以
 下、同十六年（三五・〇行）↓同三十七年（二二・七行）↓同九年（二二・五行）↓同三十八年（二〇・五行）<sup>△
 以上、二〇行
 以上の年次</sup>の順に続くことから、記載条数と所用行数においては、諸多の年次中、明治三十七・同三十八の兩年、と
 りわけ明治三十七年が最も卓越していることが知られる。これに関連して、例えば、明治三十七年一月三日条に【予
 想されたとおりロシアは、少なくとも清国に向かつては、日本の隱忍を恐怖だと示唆している。こうなってはもう、断
 の一字あるのみだ。いつのことだ——いつ、日本は馬山浦を占領するのだ！ 京城駐在のパウロフ露国弁理公使は、折
 もあろうに今この時に、馬山浦の土地を韓国に要求するという、高慢な態度に出た！ 日本に対する歴然たる侮辱だ！
 一般には、日本側から戦端を開くのも間近いことと見ている。『日日新聞』ですら、今では結局戦争を、しかも即時
 の開戦を促がす有様である。おそらく日本も、宣戦を布告することはなからうが、戦端は開くだろう。もしやらなけれ
 ば、真実ばかだとののしられても仕方がないはずだ。】とあり、同月八日条に【ロシア側の回答はすなわち一昨日、
 すでに外務大臣に手交されたわけだ。政府は依然として沈黙を守っている。しかしロシア側の機関紙は、回答が極めて
 妥協的で、新規の提案をなすものである旨発表している。だが日本としては、もはやこんな提案をいれる余地はほとん
 どないはずだ。なぜならば、そんなことをしていると、日本にとってこの戦争は、日本人の多数が考えているよりも、
 はるかに困難なものとなるに相違ないから、もし韓国に関する要求を押し通す意志ならば、即時の開戦こそ日本にとって

絶対に必要なことであるからだ。しかもこの韓国に関する要求貫徹は、事実日本人すべての意志であり、韓国の占有を「死活問題」とみなしているのだ。もっとも、このような見解が「妥当」なりや否やは別の話である。】とあり、同年二月九日条に【今朝、日本側の要求および対ロシア交渉に関する政府の公表があった。それによれば誰でも、日本が我慢し切れなくなって交渉を決裂させたことを、もっともだと思わざるを得ない。もちろん、ロシア政府はこの機会を利用して、日本を平和の破壊者と宣伝している。しかしながら、おそらくなんの役にも立つまい。事實は、ロシアが厳粛な誓約を守らなかったことから、平和が破られたのに相違ないのだ。日本はその立場を簡明に発表し、その忍耐により世人全般の（少くとも公平な人々全部の）同情を確保した。英・米両国へ使節派遣——前内相末松男爵はイギリスを、前法相金子男爵はアメリカを、それぞれ訪問することになった。どちらも金の調達に赴くらしい。だがその成功は、たえそのかんに日本が海戦で一勝を博したとしても、きわめてひどい条件でやったことだろう。】とあり、同月十一日条に【宣戦布告——今日は「紀元節」といって、二五六年（！）の昔、日本最初の君主、神武天皇が即位した日であるとか。この日を利用して天皇は、対露宣戦を布告した。】とあり、翌三十八年一月二日条に【旅順陥落！ 大吉報——旅順開城す。日本にとって、なによりも素晴らしいお年玉である。】とあり、同年三月九日条に【大勝利！ 奉天は陥落した。時に今朝十時。公報にいわく「わが包囲作戦は成功せり。わが軍は奉天を占領し、俘虜・大砲その他の戦利品莫大なり。今朝、なお戦闘継続中」と。】とあり、そして同年五月二十九日条に【対馬沖における日本海軍の稀有の大勝。海戦は二日間続いた。露艦は二十六隻だったが、うち十三隻は撃沈され、五隻は拿捕された。日本側は、一隻として大型艦を失わなかった。三笠は損傷をうけたが、戦闘には差支えない状態だった。】等とあるように、我国が対露戦に踏み切るに至った経緯や当時の我国を廻る国際諸情勢、我国の対露戦における諸状況等を平易、かつ明細に記述している点で、『日記』の伝えるところは、まさに「在留外人の観た日露戦役裏面史」というに相應しい。さてまた、一

条当りの平均所用行数では、明治二十九年が五三・七行と最も多く、以下、同一六年（三五・〇行）↓同三十七年（二二・七行）↓同九年（二二・五行）↓同三十八年（二〇・五行）（以上、二〇・〇行以上の年次）の順に続くので、記載条数と所用行数との双方において共に最も卓越する明治三十七年と、それに次ぐ同三十八年とが、一条当りの平均所用行数では、前者が明治二十九、同十六の両年に次いで第三位を占め、後者が上記の前者に次ぐ同九年よりさらに下の第五位を占めていることも理解される。

ところで、明治二十九年を筆頭にして、同十六年や同九年における一条当りの平均所用行数が諸他の年次におけるそれを遙かに上廻っているのは、一体如何なる所以かというに、明治二十九年の場合、当年には、①二月二十八日（一〇四行）、②三月一日（二六行）、③三月二日（三二行）の僅々三条の記述しか存在せず、しかも、その三条の記述たるや、実は【懐かしい皆さん！ 久しくお便りをしませんでしたところ、いま、悲しい知らせでこの手紙を始めねばならない次第です。かわいいウタがなくなりました。】なる文言を以て起筆し、【こんな長たらしい手紙で、皆さんを悩ましたことをお許し下さい。それかといって、あなた方のほか誰に、わたしの心の中を打明ければよいでしょうか？ この手紙は、同時にまた、姉妹の皆さんにも宛てたものです。しかしこの手紙は、どうか、再びわたしのところへ返して下さい、わたしにとっては、この悲しい日の思い出となるでしょうから。みなさん、どうぞお大切に。くりかえして、愛する母上の誕生日を心からお祝い申し上げます。】なる文辞を以て攔筆する、『日記』の記主ベルツから、その故国に在住する母堂をはじめ姉妹などの身内の人々に宛てて書き送った一六一条に及ぶ一連の長大な書信なのであり、こうした長文の書信は、『日記』にあっては他に全く所見されないからである。

なお、それら三条の記述内容についてみるに、①は、ベルツの愛嬢ウタの死去、令妻ハナ・令息トクおよび身内縁者の悲嘆に暮れる様子、皇室からの弔電・弔文等に関わる事柄、②は、令嬢ウタの葬儀、令妻ハナの嘆息・落胆・失望等に関わる事柄、③は、令妻ハナの愛嬢ウタへの深い愛情、ベルツの悲嘆、等に関わる事柄がそれぞれ記述されている。

つぎに同十六年の場合、当年は一条のみから成り、右大臣岩倉公（具視）の薨去と遺言、その為人、等に関わる事柄が三五行に亘って記述されているからである。そして当年には、月・日記載がみられない。なお、件の条は、ベルツの口述するところを、その令息たる編者トクが書き下ろしたものである。

最後に同九年の場合、当年には一条・四二七行の記述が存すること既述の通りであるが、このうちの①六月九日（七四行）、②同月二十六日（四三行）、③十月二十五日（六一行）の三条は、それぞれ「なつかしい皆さん！」なる文言を以て起筆するベルツの、故丘独国の親類知己へ発送した書信なのであり、これら三通の書牘の孰れもが、所用行数において既に触れた明治二十九年二月二十八日条所見のそれよりも数等劣るものの、それほどの所用行数を有する書信は、『日記』に全く他見されないのである。こうしたかなりの所用行数をもつ書状が明治九年条には三通も収載されており、そしてこうしたことが当年における一条当りの平均所用行数を多からしめている所以である。

なお、それら三通の書信の内容について窺うに、①は、訪日当初の横浜税関での遣り取り、勤務校たる東京医学校における同僚諸氏との初顔合せ、等の報告。②は、赴任地東京での新居、勤務先における同僚諸氏の様子、等の報告。③は、訪日後の諸経過、日本文化に関する認識、教師としての本分・本務についての自覚、等の報告である。

以上のような記載の分量と内容を有する『日記』について、本稿では、とくに固有名をもつ某人物が某かを発言・言説して、その抱懐する所信・見解を表明していることを語り示す記事（以下、これを「発言・言」と、医師としての記主ベルツが固有名をもつ某人物に対して診察・診療を施行していることを表わし示す記事（以下、これを「診察・診」とを精査討究することによって、『日記』の内容と性格とをよりよく理解するための一助と致したく思う。

二

『日記』には、都合三三八条に亘り、一四六名による「発言・言説記事」が所見される。いま、それを登場順、すな

わち年次順に列挙すれば左記のようになる（所在条の数字は年・月・日、列挙番号に○印を付記した事例は、ベルツへの発言・言説（以下、人名の表記については、本稿末尾付載の『ベルツの日記』（岩波文庫本）所載人名索引に準拠する。以上。）がみられるものを各々示す。各ことは以下においても同様。なお、明治十六年条には、月日記載がみられぬこと、既述の通りである。）

列挙
番号 発言・言説者

- | | | |
|----|-------------------|----------|
| 1 | ウェルニツヒ博士 | 所在条 |
| 2 | ヒルゲンドルフ博士 | 9・11・25条 |
| 3 | バイル | 9・11・25条 |
| 3 | バイル | 12・7・27条 |
| 4 | ビスマルク独国宰相 | 12・9・12条 |
| 5 | 橋本男爵（綱常） | 13・6・22条 |
| 6 | 副島内相（種臣） | 14・5・12条 |
| 7 | 岩倉右大臣（具視）令息 | 16年条 |
| 7 | 岩倉右大臣（具視） | 16年条 |
| 8 | 岩倉右大臣（具視） | 16年条 |
| 9 | マルチノ駐日伊国公使 | 22・2・28条 |
| 9 | マルチノ駐日伊国公使 | 22・2・28条 |
| 10 | オルコット師 | 22・3・7条 |
| 11 | 伊藤参議・伯爵・侯爵（博文） | 22・4・15条 |
| 12 | 吉井宮内次官（友実） | 22・8・9条 |
| 13 | 三条子爵（？） | 22・8・12条 |
| 14 | 中村小田原郡長 | 22・8・12条 |
| 15 | 李駐日清国公使・李鴻章養子（徑方） | 24・3・8条 |

⑬	橋本男爵(綱常)	26	・ 11	・ 28	条
⑭	ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)	29	・ 2	・ 28	条
⑮	トク(ベルツ令息)	29	・ 2	・ 28	条
⑯	ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)	29	・ 3	・ 1	条
⑰	ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)	29	・ 3	・ 2	条
⑱	天皇(睦仁)	33	・ 1	・ 20	条
⑲	岡 玄卿博士・侍医	33	・ 1	・ 20	条
⑳	伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)	33	・ 5	・ 9	条
㉑	池田男爵・医学部長(謙齋)	33	・ 5	・ 26	条
㉒	イスヴォルスキー駐日露国公使夫人	33	・ 6	・ 6	条
㉓	ウェーデル伯爵・駐日独国公使	33	・ 6	・ 6	条
㉔	イスヴォルスキー駐日露国公使	33	・ 6	・ 6	条
㉕	サキ(?) 独国公使館通訳	33	・ 7	・ 10	条
㉖	ウイルヘルム二世独国皇帝	33	・ 8	・ 1	条
㉗	伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)	33	・ 8	・ 15	条
㉘	ウイルヘルム二世独国皇帝	33	・ 8	・ 20	条
㉙	戸山教授(正一)	34	・ 9	・ 7	条
㉚	三浦教授(謹之助)	34	・ 9	・ 7	条

34	クラウゼ博士	34	・9	・20	条
35	東宮・皇太子(嘉仁)	34	・10	・4	条
36	メール大尉	36	・1	・2	条
37	グン前緬甸王	36	・1	・2	条
38	クナツペ博士・駐上海独国総領事	36	・1	・22	条
39	メーズウェ北鎮雲山鉾山支配人	36	・6	・10	条
40	雄大佐雲山郡長	36	・6	・10	条
41	高駐日韓国公使(永喜)令息	36	・9	・18	条
42	団十郎(市川——)令尊	36	・9	・20	条
43	ガガルニ駐長崎露国領事	36	・9	・26	条
44	マクドナルド駐日英国公使夫人	36	・11	・13	条
45	ローゼン男爵・駐日露国公使	36	・12	・14	条
46	桂伯爵・首相・將軍(太郎)	36	・12	・24	条
47	伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)	37	・1	・1	条
48	ジャーディン海軍大尉	37	・1	・2	条
49	波斯国前宰相(アタバケ・アザム)	37	・1	・4	条
50	バーレー従軍記者	37	・1	・8	条
51	小村男爵・外相(寿太郎)	37	・1	・8	条

⑤2	伊東巳代治男爵	37	・ 1	・ 19	条
53	ニコラス二世露国皇帝	37	・ 1	・ 19	条
⑤4	マクドナルド駐日英国公使	37	・ 2	・ 5	条
⑤5	ローゼン男爵・駐日露国公使	37	・ 2	・ 10	条
⑤6	ローゼン男爵・駐日露国公使夫人	37	・ 2	・ 10	条
57	アレキシエフ極東総督	37	・ 2	・ 11	条
58	アレキシエフ極東総督	37	・ 2	・ 13	条
59	ウィルヘルム二世独国皇帝	37	・ 2	・ 20	条
⑥0	フレイタス駐日葡国公使	37	・ 3	・ 2	条
⑥1	レーンホルム教授	37	・ 3	・ 2	条
62	コツェ夫人(ビスマルク姪)	37	・ 3	・ 14	条
63	ファীগソン米国公使館書記官	37	・ 3	・ 24	条
⑥4	石本將軍・陸軍次官(新六)	37	・ 3	・ 24	条
65	マクドナルド駐日英国公使	37	・ 3	・ 26	条
66	トロウブリッジ大尉・公使館付海軍武官	37	・ 3	・ 26	条
67	大隈伯爵・外相(重信)	37	・ 4	・ 6	条
68	クロパトキン陸相・総司令官	37	・ 4	・ 6	条
⑥9	寺内陸相(正毅)	37	・ 4	・ 9	条

⑦0	北島男爵（治房）令孫	37	・	4	・	17	）	18	条
⑦1	北島男爵（治房）	37	・	4	・	17	）	18	条
⑦2	北島男爵（治房）夫人	37	・	4	・	17	）	18	条
⑦3	岡部子爵（長職）	37	・	4	・	22		22	条
⑦4	岡部子爵（長職）令母	37	・	4	・	22		22	条
75	東郷提督・海軍大将（平八郎）	37	・	4	・	24		24	条
76	クロパトキン陸相・総司令官	37	・	4	・	28		28	条
⑦7	杉子爵（孫七郎）令息	37	・	5	・	7		7	条
78	東郷提督・海軍大将（平八郎）	37	・	5	・	12		12	条
79	ベーベル独国社会民主党党首	37	・	5	・	12		12	条
80	ウイルヘルム二世独国皇帝	37	・	5	・	12		12	条
81	ルーズヴェルト	37	・	5	・	12		12	条
⑧2	クルーゼン博士・青島判事長	37	・	5	・	21		21	条
83	ニコルソン将軍	37	・	5	・	24		24	条
84	グルリット	37	・	5	・	26		26	条
85	ウイルヘルム二世独国皇帝	37	・	5	・	26		26	条
86	ヤンソン	37	・	5	・	26		26	条
⑧7	橋本男爵（綱常）	37	・	5	・	26		26	条

88	ゴットベルグ通信員	37	・5	・27	条
89	乃木将軍・陸軍大将(希典)	37	・6	・2	条
⑨0	フェルスター中佐	37	・6	・2	条
91	乃木将軍・陸軍大将(希典)	37	・6	・4	条
⑨2	寺内陸相(正毅)	37	・6	・7	条
93	石本将軍・陸軍次官(新六)	37	・6	・7	条
⑨4	コンダー夫人	37	・6	・13	条
95	スクリードロフ旅順司令官	37	・6	・15	条
⑨6	ヴグニー	37	・6	・18	条
97	スクリードロフ旅順司令官	37	・6	・18	条
⑨8	ローベルト(ベルツ舎弟)	37	・6	・18	条
⑨9	福原(丑之助)	37	・6	・20	条
100	スタケルベルク	37	・6	・20	条
101	山本海相(権兵衛)	37	・6	・20	条
⑩2	伊藤勇吉(博文養嗣子・博邦)	37	・6	・27	条
103	ローマ法王(ピウス十世)	37	・6	・30	条
104	ウチトムスキー公爵	37	・7	・3	条
105	クロパトキン陸相・総司令官	37	・7	・3	条

106	東郷提督・海軍大将（平八郎）	37・7・3条
⑩07	コルヴィザール甲騎兵大佐夫人	37・7・3条
108	ウイルヘルム二世独国皇帝	37・7・15条
109	クロパトキン陸相・総司令官	37・7・20条
110	パークレー英国公使館一等書記官	37・7・23条
⑩11	グリスコング駐日米国公使	37・7・29条
112	クロパトキン陸相・総司令官	37・8・4条
113	クロパトキン陸相・総司令官	37・8・8条
⑩14	マクドナルド駐日英国公使	37・8・12条
115	東郷提督・海軍大将（平八郎）	37・8・14条
⑩16	メイシュ中佐・米国公使館付武官	37・8・15条
117	クロパトキン陸相・総司令官	37・8・26条
118	クロパトキン陸相・総司令官	37・9・2条
119	大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥（巖）	37・9・4条
120	クロパトキン陸相・総司令官	37・9・5条
121	デニソン	37・9・12条
⑩22	グンドラッハ大尉・戦時通信員	37・9・14条
123	クロパトキン陸相・総司令官	37・9・19条

141	マハン提督	37 ・ 10 ・ 16 条
140	ドラゴミロフ総司令官	37 ・ 10 ・ 16 条
139	ステッセル中将	37 ・ 10 ・ 16 条
138	クロパトキン陸相・総司令官	37 ・ 10 ・ 16 条
137	ホベレフ	37 ・ 10 ・ 15 条
⑬③⑥	フレイザー元駐日英国公使令息	37 ・ 10 ・ 14 条
135	クロパトキン陸相・総司令官	37 ・ 10 ・ 12 条
134	大隈伯爵・外相(重信)	37 ・ 10 ・ 9 条
133	アントン親王	37 ・ 10 ・ 9 条
132	ハーン間門ホテル主人	37 ・ 10 ・ 5 条
⑬③①	ヴァレー伯爵・駐日独国公使	37 ・ 10 ・ 1 条
130	アレキシエフ極東総督	37 ・ 9 ・ 29 条
⑬②⑨	ニコルソン將軍	37 ・ 9 ・ 29 条
128	ランズダウン卿	37 ・ 9 ・ 28 条
127	ニコラス二世露国皇帝	37 ・ 9 ・ 28 条
⑬②⑥	伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)	37 ・ 9 ・ 27 条
⑬②⑤	桂伯爵・首相・將軍(太郎)	37 ・ 9 ・ 27 条
⑬②④	青木周蔵子爵・駐独国公使・外務次官・外相	37 ・ 9 ・ 26 条

142	ハミルトン将軍	37	・	10	・	17	条
143	林駐英国公使(董)	37	・	10	・	20	条
144	シンツインゲル	37	・	10	・	20	条
145	カーゾン卿・印度総督	37	・	10	・	23	条
①46	ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)	37	・	10	・	28	条
147	アネタン外交団主席	37	・	10	・	28	条
148	ロゼストウエンスキー中将・バルチック艦隊司令長官	37	・	10	・	30	条
①49	橋本男爵(綱常)	37	・	11	・	12	条
①50	青木周蔵子爵・駐独国公使・外務次官・外相令嬢(ハナ)	37	・	11	・	12	条
151	小村男爵・外相(寿太郎)	37	・	11	・	12	条
152	フォック大佐	37	・	11	・	15	条
153	ヴィンチ伯爵・駐日伊国公使	37	・	11	・	16	条
①54	鍋島侯爵(直大)夫人	37	・	11	・	16	条
155	ヒューム大尉夫人	37	・	11	・	16	条
①56	伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)	37	・	11	・	19	条
①57	ストレート	37	・	11	・	22	条
①58	ハリス博士・元医師(ラザフォード)	37	・	11	・	25	条
159	林駐英国公使(董)	37	・	11	・	29	条

177	ステッセル中将	38	・1	・6	条
176	桂伯爵・首相・将軍(太郎)	38	・1	・5	条
175	天皇(睦仁)	38	・1	・5	条
174	ステッセル中将	38	・1	・2	条
173	中村将軍(覚)	37	・12	・24	条
172	乃木将軍・陸軍大将(希典)	37	・12	・18	条
171	ステッセル中将	37	・12	・18	条
170	サトー駐北京英国公使	37	・12	・17	条
169	フォック大佐	37	・12	・17	条
168	ステッセル中将	37	・12	・17	条
167	志賀重昂代議士	37	・12	・17	条
①66	桂伯爵・首相・将軍(太郎)	37	・12	・15	条
165	ビューロー独国宰相	37	・12	・13	条
164	橋本男爵(綱常)	37	・12	・12	条
①63	グローヴァー	37	・12	・12	条
①62	寺内陸相(正毅)	37	・12	・8	条
161	ビューロー独国宰相	37	・12	・1	条
①60	シンツインゲル	37	・11	・29	条

178	田中子爵・宮相（光顯）	38	・	1	・	11	条
179	ウイルヘルム二世独国皇帝	38	・	1	・	11	条
180	アルマン駐日仏国公使	38	・	1	・	11	条
181	ビュローロ独国宰相	38	・	1	・	11	条
182	ステッセル中将	38	・	1	・	16	条
183	広沢若伯爵（金次郎カ）	38	・	1	・	16	条
184	ビュローロ独国宰相	38	・	1	・	18	条
185	橋本男爵（綱常）	38	・	1	・	22	条
186	伊藤参議・伯爵・侯爵（博文）	38	・	1	・	25	条
187	カタリーナ独国女帝	38	・	1	・	28	条
188	ルーズヴェルト	38	・	1	・	29	条
189	ゲッツェン伯爵・提督	38	・	1	・	31	条
190	シェファー駐日墺国公使	38	・	1	・	31	条
191	デニソン	38	・	2	・	1	条
192	バークレー英国公使館一等書記官	38	・	2	・	1	条
193	伊藤参議・伯爵・侯爵（博文）	38	・	2	・	5	条
194	クロパトキン陸相・総司令官	38	・	2	・	5	条
195	ビスマルク独国宰相	38	・	2	・	8	条

①96	オズーフ大僧正	38	・	2	・	14	条
①97	リニユール師	38	・	2	・	14	条
①98	コルヴィザール甲騎兵大佐夫人	38	・	2	・	16	条
①99	小村男爵・外相(寿太郎)	38	・	2	・	16	条
200	乃木将軍・陸軍大将(希典)	38	・	2	・	28	条
②01	フレイク帝国ホテル支配人	38	・	2	・	28	条
202	ゲエドケ大佐	38	・	3	・	1	条
②03	寺内陸相(正毅)	38	・	3	・	4	条
204	鍋島青年	38	・	3	・	8	条
205	寺内陸相(正毅)	38	・	3	・	9	条
206	フレイク帝国ホテル支配人	38	・	3	・	10	条
207	大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥(巖)	38	・	3	・	12	条
208	桂伯爵・首相・将軍(太郎)	38	・	3	・	12	条
209	ビューロー独国宰相	38	・	3	・	19	条
210	ヴァレー伯爵・駐日独国公使	38	・	3	・	19	条
②11	岩倉公爵(具定)	38	・	3	・	28	条
212	ペルタン前海相	38	・	3	・	28	条
②13	有栖川宮妃(慰子)	38	・	3	・	29	条

214	マクドナルド駐日英国公使	38	・ 3	・ 29	条
215	有栖川宮(威仁)	38	・ 3	・ 29	条
216	フォッサリエール駐神戸仏国領事	38	・ 4	・ 14	条
217	ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)	38	・ 4	・ 15	条
218	皇后(美子)	38	・ 4	・ 15	条
219	坂本竜馬	38	・ 4	・ 15	条
220	イリス	38	・ 4	・ 15	条
221	イリス夫人	38	・ 4	・ 15	条
222	ブーグアン退役陸軍大尉	38	・ 5	・ 10	条
223	岡 玄卿博士・侍医	38	・ 5	・ 28	条
224	ヒューブナー伯爵・元帥	38	・ 5	・ 28	条
225	石黒男爵・軍医官(忠憲)	38	・ 5	・ 30	条
226	ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)	38	・ 6	・ 5	条
227	東宮・皇太子(嘉仁)	38	・ 6	・ 6	条
228	九条姫・東宮妃(節子)	38	・ 6	・ 6	条
229	ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)	38	・ 6	・ 6	条
230	石黒男爵・軍医官(忠憲)	38	・ 6	・ 7	条
231	天皇(睦仁)	38	・ 6	・ 9	条

232 皇后(美子) 38・6・9条

233 伊藤参議・伯爵・侯爵(博文) 38・6・9条

234 ペルニッツ船長 38・6・23条

235 ダンカン『ホンコン・テレグラフ』元主筆次席 38・6・23条

236 タフト將軍・前菲律賓総督 38・6・23条

237 有栖川宮(威仁) 38・7・19条

238 有栖川宮妃(慰子) 38・7・19条

これにより、その内訳を年次別に眺めてみると、明治九年が11・25(月・日、以下同様。)の一条に12の二例、同十二年が7・

27、9・12の二条に34の二例、同十三年が6・22の一条に⑤の一例(○印)、同十四年が5・12の一条に⑥の一例(○印)、同十六年が一条に⑦⑧の二例(○印)、同二十二年が2・28、3・7、4・15、8・9、8・12の五条に⑨⑩11

⑫⑬⑭の六例(○印)、同二十四年が3・8の一条に⑮の一例(○印)、同二十六年が11・28の一条に⑯の一例(○印)、同二十九年が2・28、3・1、3・2の三条に⑰⑱⑲の四例(○印)、同三十三年が1・20、5・9、5・26、6・

6、7・10、8・1、8・15、8・20の八条に212223⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺の一一例(○印)、同三十四年が9・7、9・

20、10・4の三条に㉠㉡㉢㉣の四例(○印)、同三十六年が1・2、1・22、6・10、9・18、9・20、9・26、11・

13、12・14、12・24の九条に3637⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺の一一例(○印)、同三十七年が1・1、1・2、1・4、1・

8、1・19、2・5、2・10、2・11、2・13、2・20、3・2、3・14、3・24、3・26、4・6、4・9、4・17

18、4・22、4・24、4・28、5・7、5・12、5・21、5・24、5・26、5・27、6・2、6・4、6・7、6・

13、6・15、6・18、6・20、6・27、6・30、7・3、7・15、7・20、7・23、7・29、8・4、8・8、8・8、8・12、

13、6・15、6・18、6・20、6・27、6・30、7・3、7・15、7・20、7・23、7・29、8・4、8・8、8・8、8・12、

8・14、8・15、8・26、9・2、9・4、9・5、9・12、9・14、9・19、9・26、9・27、9・28、9・29、10・1、10・5、10・9、10・12、10・14、10・15、10・16、10・17、10・20、10・23、10・28、10・30、11・12、11・15、11・16、11・19、11・22、11・25、11・29、12・1、12・8、12・12、12・13、12・15、12・17、12・18、12・24の八三条に④⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺の八
 97 ⑧⑨ 100 101 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155
 ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺の二七例（〇印）、同三十八年が1・2、1・5、1・6、1・11、1・16、1・18、1・22、1・25、1・28、1・29、1・31、2・1、2・5、2・8、2・14、2・16、2・28、3・1、3・4、3・8、3・9、3・10、3・12、3・19、3・28、3・29、4・14、4・15、5・10、5・28、5・30、6・5、6・6、6・7、6・9、6・23、7・19の三七条に174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204
 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238の六五例（〇印）となり、「日記」記載年たる明治九年から同三十八年までにあつて、八三条に一二七例所見される同三十七年が最も多く、以下、三七条に六五例所見される同三十八年、九条に一一例所見される同三十六年の順に続くこと、記事を闕く年次、すなわち同十七〜同二十年、同三十年〜同三十二年をそれぞれ除き、同十、十一、十五、二十一、二十三、二十五、二十七、二十八、三十五年各年には、件の「発言・言説記事」が所見されないこと、また、「対ベルツ発言・言説記事」の所見条数についても明治三十七年が最も卓越し、これに次ぐのが同三十八年であること、等を指摘しうる。

つぎに発言・言説者として登場する前掲諸人物について、これを五十音順に配列して示せば左記のようになる（傍線付記の所在条には、「対ベルツ発言・言説記事」が所見される。）。

列挙
番号

発言・言説者

所在条

1	青木周蔵子爵・駐独国公使・外務次官・外相			37・9・26条の一例
2	青木周蔵子爵・駐独国公使・外務次官・外相令嬢（ハナ）			37・11・12条の一例
3	アネタン外交団主席			37・10・28条の一例
4	有栖川宮（威仁）		38・3・29条、	38・7・19条の二例
5	有栖川宮妃（慰子）		38・3・29条、	38・7・19条の二例
6	アルマン駐日仏国公使			38・1・11条の一例
7	アレキシエフ極東総督		37・2・11条、	37・9・29条の三例
8	アントン親王			37・10・9条の一例
9	池田男爵・医学部長（謙齋）			33・5・26条の一例
10	石黒男爵・軍医官（忠恵）		38・5・30条、	38・6・7条の二例
11	石本將軍・陸軍次官（新六）		37・3・24条、	37・6・7条の二例
12	イスヴォルスキー駐日露国公使			33・6・6条の一例
13	イスヴォルスキー駐日露国公使夫人			33・6・6条の一例
14	伊藤参議・伯爵・侯爵（博文）	22・4・15条、	33・5・9条、	33・8・15条、
		37・11・19条、	38・1・25条、	37・1・1条、
		38・2・5条、		37・9・27条
15	伊東巳代治男爵			38・6・9条の九例
16	伊藤勇吉（博文養嗣子・博邦）			37・1・19条の一例
17	イリス			37・6・27条の一例
				38・4・15条の一例

18	イリス夫人			38・4・15条の一例
19	岩倉公爵・右大臣(具視)			16年条の一例
20	岩倉公爵・右大臣(具視)令息			16年条の一例
21	岩倉公爵(具定)			38・3・28条の一例
22	ウイルヘルム二世独国皇帝	33・8・1条、 37・5・26条、 37・7・15条、 37・2・20条、 37・5・12条		38・1・11条の七例
23	ウェーデル伯爵・駐日独国公使			33・6・6条の一例
24	ウエルニツヒ博士			9・11・25条の一例
25	ウチトムスキー公爵			37・7・3条の一例
26	大隈伯爵・外相(重信)	37・4・6条、 37・9・4条、 37・1・20条、		37・10・9条の二例
27	大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥(巖)			38・3・12条の二例
28	岡 玄卿博士・侍医			38・5・28条の二例
29	岡部子爵(長職)			37・4・22条の一例
30	岡部子爵(長職)令母			37・4・22条の一例
31	オズーフ大僧正			38・2・14条の一例
32	オルコット師			22・3・7条の一例
33	ガガルニ駐長崎露国領事			36・9・26条の一例
34	カーゾン卿・印度総督			37・10・23条の一例

35	カタリーナ独国女帝			38・1・28条の一例
36	桂伯爵・首相・将軍(太郎)	36・12・24条、	37・9・27条、	37・12・15条、
37	北畠男爵(治房)			38・1・5条、
38	北畠男爵(治房)夫人			37・4・17、
39	北畠男爵(治房)令孫			37・4・17、
40	九条姫・東宮妃(節子)			37・4・17、
41	クナツペ博士・駐上海独国総領事			37・4・17、
42	クラウゼ博士			37・4・17、
43	グリスコング駐日米国公使			37・4・17、
44	クルーゼン博士・青島判事長			37・4・17、
45	グルリット			37・4・17、
46	グローヴァー			37・4・17、
47	クロパトキン陸相・総司令官	37・4・6条、	37・4・28条、	37・7・3条、
		37・8・8条、	37・8・26条、	37・7・20条、
		37・8・8条、	37・9・2条、	37・7・20条、
		37・8・26条、	37・9・2条、	37・7・20条、
		37・10・12条、	37・9・2条、	37・7・20条、
		37・10・16条、	37・9・5条、	37・7・20条、
		38・2・5条の二三例	37・9・19条	
48	グン前緬甸王			37・9・14条の一例
49	グンドラッハ大尉・戦時通信員			36・1・2条の一例
50	ゲエドケ大佐			38・3・1条の一例

51	ゲッツェン伯爵・提督			
52	高駐日韓国公使(永喜)令息			
53	皇后(美子)		38	38
54	コッツェ夫人(ビスマルク姪)		4・15条、	36
55	ゴットベルグ通信員			9・18条の一例
56	小村男爵・外相(寿太郎)	37	1・8条、	38
57	コルヴィザール甲騎兵大佐夫人	37	11・12条、	2
58	コンダー夫人	37	7・3条、	2
59	坂本竜馬			16条の二例
60	サキ(?)独国公使館通訳			13条の一例
61	サトー駐北京英国公使			15条の一例
62	三条子爵(?)			10条の一例
63	シェファー駐日奥国公使			12条の一例
64	志賀重昂代議士			8・12条の一例
65	ジャーディン海軍大尉			1
66	シンツインゲル	37	10・20条、	1
67	杉子爵(孫七郎)令息			29条の二例
68	スクリードロフ旅順司令官	37	6・15条、	5・7条の一例
				6・18条の二例

69	スタケルベルク						37・6・20条の一例
70	ステッセル中将						37・10・16条、37・12・17条、37・12・18条、38・1・2条
71	ストレート						38・1・6条、38・1・16条の六例
72	副島内相(種臣)						37・11・22条の一例
73	田中子爵・宮相(光顕)						14・5・12条の一例
74	タフト將軍・前菲律賓總督						38・1・11条の一例
75	ダンカン『ホンコン・テレグラフ』元主筆次席						38・6・23条の一例
76	団十郎(市川——)令尊						38・6・23条の一例
77	デニソン						36・9・20条の一例
78	寺内陸相(正毅)	37・4・9条、	37・6・7条、	37・12・8条、	38・3・4条、	38・2・1条の二例	38・3・9条の五例
79	天皇(睦仁)			33・1・20条、	38・1・5条、	38・6・9条の三例	
80	東郷提督・海軍大将(平八郎)		37・4・24条、	37・5・12条、	37・7・3条、	37・8・14条の四例	
81	東宮・皇太子(嘉仁)				34・10・4条、	38・6・6条の二例	
82	トク(ベルツ令息)					29・2・28条の一例	
83	戸山教授(正一)					34・9・7条の一例	
84	ドラゴミロフ總司令官					37・10・16条の一例	
85	トロウブリッチ大尉・公使館付海軍武官					37・3・26条の一例	

86	中村小田原郡長			22・8・12条の一例
87	中村將軍(覺)			37・12・24条の一例
88	鍋島侯爵(直大)夫人			37・11・16条の一例
89	鍋島青年			38・3・8条の一例
90	ニコラス二世露国皇帝			37・9・28条の二例
91	ニコルソン將軍			37・9・29条の二例
92	乃木將軍・陸軍大將(希典)	37・6・2条、 37・6・4条、	37・12・18条、	38・2・28条の四例
93	ヴァレー伯爵・駐日独国公使		37・10・1条、	38・3・19条の二例
94	バイル			12・7・27条の一例
95	バークレー英国公使館一等書記官		37・7・23条、	38・2・1条の二例
96	橋本男爵(綱常)	13・6・22条、 26・11・28条、	37・5・26条、 37・11・12条	
97	ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)	29・2・28条、 29・3・1条、 29・3・2条、 37・10・28条	37・12・12条、 38・1・22条の六例	
98	ハミルトン將軍	38・4・15条、 38・6・5条、	38・6・6条の七例	
99	林駐英国公使(董)		37・10・20条、	37・10・17条の一例
100	ハリス博士・元医師(ラザフォード)		37・11・29条の二例	37・11・25条の一例
101	バーレー從軍記者			37・1・8条の一例

102	ハートン間門ホテル主人					37・10・5条の一例
103	ビスマルク独国宰相					38・2・8条の二例
104	ヒューブナー伯爵・元帥					38・5・28条の一例
105	ヒューム大尉夫人					37・11・16条の一例
106	ビューロー独国宰相	37・12・1条、	37・12・13条、	38・1・11条、	38・1・18条、	38・3・19条の五例
107	ヒルゲンドルフ博士					9・11・25条の一例
108	広沢若伯爵(金次郎カ)					38・1・16条の一例
109	ファーガソン米国公使館書記官					37・3・24条の一例
110	ヴィンチ伯爵・駐日伊国公使					37・11・16条の一例
111	ヴグニー					37・6・18条の一例
112	フェルスター中佐					37・6・2条の一例
113	フォック大佐				37・11・15条、	37・12・17条の二例
114	フォッサリエール駐神戸仏国領事					38・4・14条の一例
115	ブーグアン退役陸軍大尉					38・5・10条の一例
116	福原(丑之助)					37・6・20条の一例
117	フレイク帝国ホテル支配人				38・2・28条、	38・3・10条の二例
118	フレイタス駐日葡国公使					37・3・2条の一例
119	フレーザー元駐日英国公使令息					37・10・14条の一例

120	ベール独国社会民主党党首			37・5・12条の一例
121	ペルタン前海相			38・3・28条の一例
122	ペルニッツ船長			38・6・23条の一例
123	波斯国前宰相（アタバケ・アザム）			37・1・4条の一例
124	ホベレフ			37・10・15条の一例
125	マクドナルド駐日英国公使			38・3・29条の四例
126	マクドナルド駐日英国公使夫人			36・11・13条の一例
127	マハン提督			37・10・16条の一例
128	マルチノ駐日伊国公使			22・2・28条の一例
129	三浦教授（謹之助）			34・9・7条の一例
130	メイシュ中佐・米国公使館付武官			37・8・15条の一例
131	メーズウエ北鎮雲山鉦山支配人			36・6・10条の一例
132	メール大尉			36・1・2条の一例
133	山本海相（権兵衛）			37・6・20条の一例
134	ヤンソン			37・5・26条の一例
135	雄大佐雲山郡長			36・6・10条の一例
136	吉井宮内次官（友実）			22・8・9条の一例
137	ランズダウン卿			37・9・28条の一例

37・2・5条、37・3・26条、37・8・12条、

138 李駐日清国公使・李鴻章養子(徑方)

139 リニユール師

24・3・8条の一例
38・2・14条の一例

140 ルーズヴェルト

37・5・12条、
38・1・29条の二例

141 レーンホルム教授

37・3・2条の一例

142 ロゼストウエンスキー中将・バルチック艦隊司令長官

37・10・30条の一例

143 ローゼン男爵・駐日露国公使

36・12・14条、
37・2・10条の二例

144 ローゼン男爵・駐日露国公使夫人

37・2・10条の一例

145 ローベルト(ベルツ舎弟)

37・6・18条の一例

146 ローマ法王(ピウス十世)

37・6・30条の一例

これら一四六名の発言・言説者のうち、三条以上に亘って所見される者について、これを所見条数の多い順に列挙すると、クロパトキン陸相・総司令官の一名(一三条)↓伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)の一名(九条)↓ウィルヘルム二世独国皇帝、ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)の二名(各七条)↓ステッセル中将、橋本男爵(綱常)の二名(各六条)↓桂伯爵・首相・將軍(太郎)、寺内陸相(正毅)、ビューロー独国宰相の三名(各五条)↓東郷提督・海軍大将(平八郎)、乃木將軍・陸軍大将(希典)、マクドナルド駐日英国公使の三名(各四条)↓アレキシェフ極東総督、小村男爵・外相(寿太郎)、天皇(睦仁)の三名(各三条)↓、有栖川宮(威仁)以下二三名が各二条、青木周蔵子爵・駐独国公使・外務次官・外相以下一〇八名が各一条となり、計一四六名が一五五条に亘って所見されることになる。そして、これらの記事、「対ベルツ発言・言説記事」に限って、これの所見条数の多い順に列挙すれば、伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)の一名(七条)↓ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)の一名(六条)↓寺内陸相(正毅)、橋本男爵(綱常)の二名(各四

条▽有栖川宮妃(慰子)、桂伯爵・首相・將軍(太郎)、コルヴィザール甲騎兵大佐夫人、マクドナルド駐日英国公使、ローゼン男爵・駐日露国公使の五名(各一条)▽青木周蔵子爵・駐独国公使・外務次官・外相以下七五名が各一条アネタン外交団主席以下六二名がそれぞれ所見条ナシということになる。これにより、「発言・言説記事」として、より多くの所見条数を有する中で、「対ベルツ発言・言説記事」の所見条数をより多く有するのは、伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)であり、これに次ぐのがハナ(ベルツ令妻・荒井花子)であることが分かる。そしてこの「対ベルツ発言・言説記事」の所見条数において、ハナが卓出するのは、件の人物と記主ベルツとの関係の緊密性からすれば、むしろ極めて自然なあり方でさえあるとみられるので、殊のほか異とするにたらぬが、このハナに比してそれが伊藤により多く——この人の場合、諸多の人々の中にあつて最も卓絶していることが——認められる点をこそ、とくに留意しておかねばならぬであろう。というのは、周知の通り伊藤が、当時(明治期)における政界の中枢部にあつて国家の重鎮として君臨しており、社会的にも広範囲に亘つて相当に強い影響力を保有していた人物に外ならぬからである。それはともかくとして、ここでは、上記の二者、すなわちハナと伊藤の「対ベルツ発言・言説記事」を掲げて、その実際のあり様を具象的に示しておこう。件の記事からは、それら両者の人間性・性格・人柄・為人といった事柄は固よりのこと、記主ベルツ自身のそうしたことをも察知せしめうる所の、その所見・見解、さらには該記事の係年当時における国の内外の諸情勢・諸動向をはじめ、民情や世態・風俗・習慣等といった様々な事柄が、曇りない明鏡に写し出されているかのよう

に、よく窺い知れて実に興味深いものがある。

〔伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)の場合〕

○緊張の一日。ヨーロッパへ休暇帰国の用意万端を整えた。(中略)夜、自分のため伊藤侯の送別会。あれほどいそがしい身の政治家が、自分のためわざわざ一夕をさいてくれたことは、非常な光栄であり、また侯の友情を示すものと思う。うちくつろいで快談。侯

は、ほがらかでくったくのない日頃の調子で、冒険的な生涯のさまざまなでき事を物語った。航海術を学ぶため、井上と一緒にイギリスの船にもぐりこんだことや、それからそこで単に平水夫として取扱われたことを話してくれた。朝、二人がハンモックの中で寝ぼけていると、運転士か水夫がやって来て、綱の切れ端で手荒く背中をどやしつけるのである。「小僧、起きろ——小僧、起きろ！」と。そういつて侯は、当時の思い出にうち笑いながら、そのぶこつな男の動作をなんともいえぬおかしさで、まねて見せるのであった。疑いもなく東アジアの歴史に他のどんな人間よりも大きな影響を与える天職を授かった人物が、かつて——三十六年前——イギリスの荒くれ水夫にぶん殴られたとは、誰が想像しよう！ 特に興味をおぼえたのは、侯の次のような一言だった。来年どちらの経路で日本へ帰るかとたずねられたので、シベリア経由で来たいがおそらくその見込みはあまりないように思うと答えたところ、侯のいわく「うん、来年の夏にはのんびりと来られますよ、それまでに万事がたがっていますからね。」と。

33・8・15条

○政治的にははなはだうとうしい空模様の新年も、自然現象の上では、至極快晴の天気をもって始まった。十時、天皇・皇后の新年引見のため皇居へ。全然洋式である。服装の点でもまた、このような西洋心酔に自分は幾度、口を極めて反対したかしれなかったが、徒勞だった。かつて伊藤侯が、宮中で洋式の服装が採用になる旨、自分に告げた時、見合わせるよう切に勧めていった——何しろ洋服は、日本人の体格を考えて作られたものではないし、衛生上からも婦人には有害である。すなわちコルセットの問題があり、また文化的・美学的見地からは全くお話しにならないと。伊藤侯は笑っていわく「ベルツさん、あんたは高等政治の要求するところを、何もご存じないのだ。もちろん、あんたのいったことは、すべて正しいかも知れない。だが、わが国の婦人連が日本服で姿を見せると、『人間扱い』にはされないで、まるでおもちゃか飾り人形のように見られるんでね」と。伊藤侯が自分の忠告ないしは願望を斥けたのは、これがたった一度きりだった。しかし今日では、侯もおそらく考え直すことだろう。西洋諸国と対等になることは、外面的形式の方面ではなく、内面的資格の方面においてこそ、その目的を達せねばならないのであって、ことにその外面的形式が欠点ですらある場合には、なお更のことだ。今日、黒のピロッド服に白い羽毛の襟飾りをつけた侍女を見た時、再びこの事を考えざるを

得なかった。あの太短い姿では全く論外である。衣裳が服装ではなく仮装になっている。固有の古代日本式衣裳を着ければ、自然で良く似合うものを。

37・1・1条

○夜、ドイツ公使館でカルル・アントン親王のため盛大な宴。皇族方を始め、日本の文武顯官すべて列席。宴後、(中略)伊藤侯とも、しばらく語り合った。ヨーロッパへ立つ前に、ぜひ訪ねて来てほしい、もっとゆっくり、いろいろと話さねばならぬことがある——とか。

37・9・27条

○午後、大磯に赴く。(中略)車中で伊藤侯爵にあった。侯は熱心に『スペクテーター』誌を読んでいた。知名の一英人が、日本との同盟を廃棄して「むしろロシアに乗換えた方がよい」と、自国民に勧告しているが、これに対して編集者は「今度の戦争が、クリミア戦争のように、大した決着なしに終る」ことを期待し、かつまた希望すると述べているのだ。伊藤侯は、平素に比べて無口だった。同盟国の側から、このような意見を発表しているのだから、侯としてもとにかく、考えざるを得ないのだ。ところで、いつもながら驚くのは、六十三歳の高齢にもかかわらず、侯の容姿の若々しいことで、ことに、侯が酒神バックスと女神グイネスの熱烈な信者であり、しかも朝から晩まで、葉巻を口から離さないことを知っている者にとっては、なおさらそうだ。おそらく大磯の良い空気が、侯の若々しさにあずかって力があるのだろう。侯のいわく「東京との差異が、はっきりと感ぜられる」と。自分も同感である。自分は、横浜の山手に住みたいと思っている。そこではいつも、はるかにのびのびとした、すがすがしい心地がするのだ。

37・11・19条

○午後、伊藤侯爵のもと。侯は、いささか気分が勝れないのである。飲酒と喫煙を少し控えて以来、侯は確かに、一段と健康に見える。毎度のことながら驚かざるを得ないのは、侯があんな生活振りであり、かくしゃくたることだ。侯とはもちろん、ロシアの現状についても語った。国内の不穏は、いずれにせよ日本にとって有利であると、自分が述べたのに対して、侯のいわく「なるほど、それとおおりだが、しかし本式の革命はありがたいたくない。そうになると、講和談判の際に、誰を信頼してよいのかわからなくなるからだ。

要は、軍隊が忠誠を守るかどうかにある」と。

38・1・25条

○午後、伊藤侯爵のもと。侯はまたもやあまり気分が勝れない。戦争について、なにか変わったことをご存じですかと、侯に尋ねた。すると侯は、自分が部屋に入ったとき、ちょうど読みかけていた一葉の新聞を取りあげ、終りまで読んでため息をつきながらいった「闘いは続く。全く果しのない大量殺人だ」と。侯の口から出た、意味深長な言葉だ。伊藤侯は以前から、この戦争に反対で、つねに親露的と見なされていた。侯は、イギリスとの同盟よりは、むしろロシアとの同盟を望んでいたのだ。しかしロシアが必要な譲歩に出なかったので、侯は結局その意図を実現することができなかった。侯はおそらく、戦後にロシアと同盟を結ぶ心算なのだろう。

38・2・5条

○多端な一日だった。東京出発の日である。(中略)芝離宮へ。ここで、天皇の名代として、山階宮が別離の宴を催して下さった。宮内省役員一同、他に橋本、岡の両氏列席。伊藤侯は少し遅刻したが、上機嫌で現われて「遅れて済まなかったが、実は外相と大変重要な相談があったので」と、自分にわびた。外交上に重大事が起こっていることは明白だった。自分は内心で、講和問題だろうと思っただ。とにかく、なにか慶ばしいことに違いないのは、侯の機嫌の良いことすぐわかった。

38・6・9条

〔ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)の場合〕

○一昨日の朝、食事の時、まだウタは、生れつきの愛嬌を一杯にふりまいて、わたしの側にすわっていました。お昼に、わたしが大学から帰ると、ハナは、子供が風邪をひいたようだと言いました。夜になって、重い腹膜炎を起こしたのですが、この病気はたいへいは命取りになるのが常です。そして、今から数時間前に、ウタの明るく澄んだ眼は閉じられてしまいました。——永遠に。(中略)ウタは、ハナにとって唯一のものであり、すべてでもあったのです。わたしが読んだり、書いたりしている時、ハナはよくやって来て、いったものです。「まあ、ちよいと、早くいらっしやい。ウタが、すっかりごきげんで、とてもかわいらしく遊んでいるのを見てやって下さい!」と。そしてハナもまた、わたしの友人と全く同じことをいうのです。「まるでうそのようですが、大人でさえ一日中、時のたつのも忘れて、この子と遊んでいられます」と。事実、ハナにとってウタは誇りであり、今からその将来までも、はや夢

みていたような有様でした。世の中に出て、完全に独立独歩でやれるよう、ウタに学問をさせねばならぬとか、あるいは何か役に立つことを習わしておかねばならぬなどと。

29・2・28条

○棺の中で、いまあの子は眠っています——天使、愛くるしい天使です。今しがた、上の部屋へ行ってみると、棺の中のウタは模様のある縞子地しこでできた、三枚重ねの豪華な綿入れの着物でおおわれていましたが、それは下の二枚が真紅で、上の一枚が純白という、美しい日本の花嫁の衣装でした。わたしの不審そうな眼付きをみて、ハナはそのわけを聞かせてくれました——ウタは、この世では嫁入りの晴着をきなくて済んだから、せめて天国の花嫁としてお寺へやるのですと。これらの着物は、あとでお寺に喜捨されるのです。わたしはすっかりハナの自由に任せて、一人娘にふさわしいよう、立派な葬儀を営ませることにしました——ハナの希望どおり、仏式で。

29・3・1条

○昨日、妻むすめと帰京。汽車がひどく延着した。汽車を待ちながら、毎度の如く自分は、この国の旅客の態度を、同じ事情のもとにあるドイツの停車場におけるそれと、比較せざるを得なかった。ドイツでは、このような場合に、誰もが遅延や混乱をのしる。「だらしがないぞ」、「これでも、やってるのか」などの言葉が、常時のことである。日本では——英、米でも同様だが——みな黙って待つか、他のことをしゃべっている。なるほど、時計を見上げて「なんて遅屈だろう」といったり、「まだ汽車は来ないのか？」とため息をつく者はあるが、しかし口ぎたなくのしったり、悪態をつくの聞いたことは決してない。ここで、ある米国の雑誌に載っていた記事を思い出した——「ドイツ人に接して、特に外国人の目に立つのは、かれらドイツ人が感情の自制に欠けている点である。かれらの念頭にうかんだこと、すなわち瞬間の感情を、ことごとく言葉に表わし、しかもそれを、しばしば激越な調子でやるのだ。これは非常な欠点である」と。この文を読んだとき、自分自身は、全く凶星を指されたように感じた。なにしろ自身が、かかるドイツ人の一人であるからだ。そしてあたかも昨夕、汽車を待つおり、自身の不満を激しい言葉で表に出さないよう、特に自制せねばならなかった。妻むすめはもちろん、他の日本人の一行と同様——一組の英人夫妻もそうだったが——しごく穏やかに落着き払っていた。自分が

膨れているのを笑って「怒ったって、いったい、なんの役に立ちます？ それだからといって、汽車は決して早くは参りませんよ。来るまでは、どうしてもお待ちにならねばならないのです。子供なら、どうにもならないことに、腹を立ててもわかりませんが、大人では、どうかと思います」と。なるほど、妻のいうとおりではある。がしかし、自己の顔色や言葉を抑制することを、若いときから教わらないのは、遺憾ながら、われわれの教育の根本的欠陥なのだ。こうしてわれわれは、自己の感情を爆発的に吐露しようとする子供の欲求を、そのまま持ち続けている。もっとも教養のある人間は、修練によって、こんな感情に打勝つことを学ぶものである。このような人間は、自分ならたいていのドイツ人と同様に興奮するような場合にも、全く冷静である。自分も大人である以上、この後れを取りもどすため、今日なお、多大の努力を払うべく余儀なくされている。だが遺憾ながら、往々にして徒労だ。なんでもすぐ顔や口を出す悪い癖が、依然として抜けない。

37・10・28条

○朝早く、食事前に妻と東山にある古い寺「高台寺」へ散歩。(中略) 上り道を行くと、寺の背後の高台に達するが、そこには、維新の前後に京都で勤皇派に属して討死したり、殺されたり、自害を命ぜられたりした人々のため、立派な墓石風の大記念碑が、ミカゲ石の柵に囲まれてたっている。(中略) はるか下方に横たわる市街、緑と黄のしまになったムギと菜種の畑、その向うにそびえる西の山々を樹木の間からながめながら、急な坂道を更に登る。上の方は墓地になっていて、そこには、王政復古に熱中して一命をささげた多数の人々の個別の墓や、維新に功劳をたてて、後に安らかな生涯を終えた少数の人たちの墓、たとえば、あの混乱時代の最も偉大な政治家の一人であった木戸の墓もある。かれらのお蔭で開けたこの洋々たる祖国の前途を、今ではもう見ることもできないで、皆ここに眠っているのだ！ 崇敬の念に打たれて、われわれはその場にたたずんでいたが、この厳かな静寂を破るものはただ、うるわしい春の朝を鳴きとおすおびただしいウグイスの声のみであった。そのとき、妻が驚きの叫び声をあげた——「あら、ここに坂本竜馬の墓がありますわ！」——「どんな人なんだ、それは？」と、自分はたずねた。「ご存じありませんの？ 皇后さまのお夢の話で、なにかでお読みになりませんでした？」——「いや、知らないよ。」——「昨年、戦争の始まったころ、皇后さまが大変不思議な夢を

ご覧になりましたので、これを御付きの方の一人におもらし遊ばされました。それによりますと、お見知りのない一人の男が、お夢に現われて——わたしは坂本竜馬と申す者でございます。今度の戦さは勝利でございますから、ご安心遊ばされますよう、お知らせ申しあげるといいたしました。この坂本竜馬の申し上げることによつて、偽りはございません——と申し述べたそうでございます。皇后さまは、その男の様子、衣服などをお物語りになって、そんな男が居ったかどうか、またどんな人物であったかをおたずねになりました。御付きの人は驚きのあまり、言葉も出ない有様でしたが、そのような男の居ったこと、仰せのとおりの様子をした人物であったこと、朝廷に尽くして死んだこと、京都に葬られていることなどをお答え申しあげました。それ以来、坂本は日本中で有名です。そしてこのお話は、国民を元気づけることにもなりました。」 考へにふけりながら、われわれは公園を通過して引返したが、そこは、あの勇敢な勤皇派の人々が夜陰にしばしば会合して、「將軍」の権力を打破し、大政を奉還させるための方策を協議したところである。

38・4・15条

○一日中、暇乞いの訪問。夜、ドイツ公使がドイツ皇太子成婚祝賀の盛大な晩餐会を催した。日本の皇族三名が臨席された——山階宮、閑院宮と同妃、北白川宮。公使館の食堂は満員の盛況だった。西園寺侯爵（ちなみに侯の家筋からは、中世に五人の皇后が出ている）が妻を食卓に導いた。妻の向い側には、明治二十七年に黄海の海戦で大勝した、伊東提督が席を占めていた。妻は次のように述べたが、当っている。「伊東さんは愛想のよい物腰とカワイイ表情の、優しい殿方ですが、それでいてこの人は、争ったり怒ったりしたときは、こわいだろうという感じをすぐうけます」と。宴は、なごやかな気分のうちに進んだ。会食客六十名のところへ、食事の後で、さらに二百名の来客が加わった。

38・6・5条

○二十九年前の今日、自分は日本へ上陸した。——そして今日は自分のため、東宮が別離の宴を設けて下さった。（中略）宮城と御苑の絵を入れて特に作られた、結構な金蒔絵の手箱二個を、東宮夫妻から戴いた。小さい方はすずり箱で、中に収められた筆、小刀、きり、水差し、墨入れ等の付属品一切も同様に、微細な金漆（細かい点のある日本のナシに似ているので、「ナシジ」と称する）と金銀細工

を施してある。大きい方は、用紙とか手紙を入れるもので、いわゆる「料紙」箱である。箱の表には、花卉の十六枚ある皇室の菊花の紋章のみが現わされ、美しい風景画はふたの裏を飾っている点が、おくゆかしい純日本趣味の特色である。これで思い出したのは、妻が黒表の「ハオリ」の裏に、綾織緞子の強勢なものを付けていることだ。なぜ美しい織物を、誰も見ないところへ使うのかとたずねたところ、妻の答えにいわく「貴重なものは、誰にもかれにも見せるものではありません。なにもかもさらけ出して見せびらかすほど、下品なことはありません」と。

38・6・6条

これらの記事から、伊藤のベルツへの厚く親しい情誼のほどがよく窺い知られ、為政者伊藤として、あるいは人間伊藤としての人柄が偲ばれるのである。また、万事に控え目で、平素は殆ど激しい感情を顕わにすることなく、それでいて芯の強さをもち、しかも感性豊かで、日本の伝統文化を能く理解し、加えて世故にたけていて、人を観る眼もたしかについて、これを、後に触れるところの、ここに取り上げた「対ベルツ発言・言説記事」以外の諸記事によって、なお一層明確に知りうるのである。

ところで、某人物の、所見条数(A)と、為人を示す記述の所見条数(B)との卓越性において、(A)の上位一五者と、(B)の上位六者までをそれぞれ掲記すれば、次のようになる。

(A)

位順 人名

所見条数

一、天皇(睦仁)

四八条

二、クロパトキン陸相・総司令官

四五条

三、ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)

四二条

- 四、東宮・皇太子(嘉仁) 四一条
- 五、伊藤参議・伯爵・侯爵(博文) 三五条
- 六、ヴァレー伯爵・駐日独国公使 三四条
- 七、ウイルヘルム二世独国皇帝 三〇条
- 八、橋本男爵(綱常) 二二条
- 九、トク(ベルツ令息) 二〇条
- 一〇、井上伯爵・大蔵大輔・外務卿(馨) 一八条
- ニコラス二世露国皇帝 一八条
- 一一、ステッセル中将 一七条
- 一二、岡 玄卿博士・侍医 一六条
- 皇后(美子) 一六条
- 一三、黒木陸軍大将(為楨) 一五条
- 東郷提督・海軍大将(平八郎) 一五条
- バイル 一五条
- 一四、アレキシエフ極東総督 一四条
- 一五、大隈伯爵・外相(重信) 一三条
- 桂伯爵・首相・将軍(太郎) 一三条
- 乃木将軍・陸軍大将(希典) 一三条

マクドナルド駐日英国公使

一三条

(B)

位順
人名

一、ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)

一五条

二、伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)

一二条

三、ウイルヘルム二世独国皇帝

六条

東宮・皇太子(嘉仁)

六条

ヴァレー伯爵・駐日独国公使

六条

四、有栖川宮(威仁)

五条

有栖川宮妃(慰子)

五条

ウタ(ベルツ令嬢)

五条

五、イスヴォルスキー駐日露国公使

四条

大隈伯爵・外相(重信)

四条

桂伯爵・首相・將軍(太郎)

四条

九条姫・東宮妃(節子)

四条

トク(ベルツ令息)

四条

バイル

四条

六、淳宮（雍仁）

三条

アントン親王

三条

グローヴァー

三条

デニソン

三条

迪宮（裕仁）

三条

ローゼン男爵・駐日露国公使

三条

李容翊

三条

これら（A）（B）双方に掲記する人物中、ともに合致する者は傍線を付した九名であり、そしてこの中において（A）（B）双方ともに最上位を占めているのはハナ（ベルツ令妻・荒井花子）である。これは、件の人物とベルツとの関係の緊密性を考按すれば、極めて自然なあり様と理解しえよう。また、トク（ベルツ令息）が（A）で九位、（B）で五位というかなりの高位を占めているのも、上述のハナの場合に準じて考えることができよう。他余の七名中、ウィルヘルム二世独国皇帝（A）七位、（B）三位▽、ヴァレー伯爵・駐日独国公使（A）六位、（B）三位▽両者は、ともにベルツと同邦の人士であるが故に、とりわけ日清戦争終決後、著しく対独感情の険悪化してしまった日本に在留するベルツの立場からすれば、好むと好まざるに拘らず、常に件の両者の、履行する対日政策や、言動如何には強い関心を持たざるを得ぬ境涯にあった訳であり、そしてこうしたことがそれら両者のうち、前者を（A）七位、（B）三位▽、後者を（A）六位、（B）三位▽というかなり高いランク付けをなさしめるに至っていると解すべきであろう。また、ベルツの在日期間中、永年に亘って友人関係にあり、「外面的にも内面的にもまれに見る上品」^{『日記』9}（^{6・26}条）な好人物バイルが（A）一三位、（B）五位という、それ相当の地位を得ているのも頷解しうるところである。残余の四名、すなわち東宮・

皇太子(嘉仁)△(A)四位・(B)三位▽の一名と、伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)△(A)五位、(B)二位▽、大隈伯爵・外相(重信)△(A)一五位、(B)五位▽、桂伯爵・首相・將軍(太郎)△(A)一五位、(B)五位▽の三名については、前者が後述するごとくベルツの在日期間中における精力的な診察・診療活動にあつて最も深く関わった人物であること、また、後者がそれぞれ政界の枢機に参画していたが故に、社会の各方面にもかなり強い影響力を有していた人々であることから判じて、そうした人々の各人各様のランク付けも首肯されることである。さらに、それら為政者たちの中にあつて伊藤参議・伯爵・侯爵(博文)の占める地位が一頭地を抜いており、わけでも(B)に関する伊藤のランク付けが、上述したハナのそれに次いで第二位となっているのは、とくに留意されねばならぬことであろう。これを要するに、ベルツは夙に卓抜した為政者伊藤の存在それ自体に注目して、彼を極めて高く評価し、その人間性如何についても詳細に観察していたのであり、こうしたことが勢いその為人に関わる事柄を表わし示す記述をも多からしめるとともに、その内容をも豊潤で精彩あるものとならしめたのであろう。これは、前に指摘した「対ベルツ発言・言説記事」の所見条数において、伊藤が諸他の人士に比して最も卓絶した人物であるとしたことと同じ記載意識に拠るものといえよう。そしてこうした伊藤の人間性・為人を表わし示す記事は、先引の彼に関する「発言・言説記事」中のほか、左掲記事中にもみられるのである。すなわち、

○枢密院議長の伊藤伯は、数日前に辞表を提出している。かれは、実にずるいキツネだ！　かれは以前に条約改正を、今回よりもはるかに日本に不利な条件で締結しようとしていた。ところが今では、大隈を困らせようとかかっている。それというのも、伊藤は当時、この問題でつまずいたからである。

22・10・18条

○一昨日、有栖川宮邸で東宮成婚に関して、またもや会議。その席上、伊藤の大胆な放言には自分も驚かされた。半ば有栖川宮の方を向いて、伊藤のいわく「皇太子に生れるのは、全く不運なことだ。生れるが早いか、到るところで礼式エチケットの鎖にしばられ、大きな

れば、側近者の吹く笛に踊らされねばならない」と。そういうながら伊藤は、操り人形を糸で踊らせるような身振りをして見せたのである。——こんな事情をなんとかしようと思えば、至極簡単なはずだが。皇太子を事実操り人形にしているこの礼式をゆるめればよいのだ。伊藤自身は、これを実行しようと思えばできる唯一の人物ではあるが、現代および次代の天皇に、およそありとあらゆる尊敬を払いながら、なんらの自主性をも与えようとはしない日本の旧思想を、敢然と打破する勇氣はおそらく伊藤にもないらしい。

33・5・9条

○韓国からの報道は容易ならぬものがある。二名の韓国人の処刑について、日本の新聞があまりやかましく書きたたてたので、やむを得ず日本の林公使は韓帝に引見を求めた。しかし、これは拒絶された。すると今度は、それどころか韓国政府の方で強気になり、本件について話し合う意向は全然ないと、東京へ打電してきた。このような勇氣が韓国政府の腹の底から出たものではなく、ロシアの後押しによることは明らかである。問題はただ、日本の自尊心がこれで黙って引きさがれるかどうかである。また清国でも、おもしろくない模様である。ロシアは、暴動を鎮圧するために自国の軍隊を派遣することを、清国政府に申し出たそうである。(中略)こんな情勢なのに、当地では自由党が折も折、この時機を選んで、内閣に提携打切りを通告してきた。結局かれらは、このことをもう一度よく考えてみなければならぬことになるだろう。党の幹部連は伊藤侯を動かして、党の指導を引受けさせようと思った。侯はまだ返事を与えていないが、おそらくは断わるだろう。侯が時局の主人公である点は、疑いをいれる余地のないところだが、他のありとあらゆる日本の政治家を侯がはるかに超越している点も同様である。そして日本は、この侯のように「党派の外にあって、党派の上にいる」立場の人物を今なお必要とするのだ。

33・6・6条

○今朝、伊藤侯の招きに応じて大磯へ。午後おそくまで居った。侯は相変らず丈夫そうだが、さすがに以前と比べてふけてきた。今度、侯は欧米へ出かけようというのだ。他になお、井上の婿にあたる都築と金子前法相がきていた。侯が自身の昔話をするとき、いつもおもしろい。

34・9・8条

○早朝、も一度伊藤侯のところへ。今回は、旅行による休養が侯の健康のためによいということをし、自分の口から証言させるためだ。これは、侯が飲む方を注意して、おとなしく旅行する場合にあてはまることだ。だがしかし、侯はその通り守るかしら？

34・9・15条

○相変わらず同盟で持ちきりだ。しかし、この事がらを極めて冷静に解釈する声も少数ある。帰国の途にある伊藤侯がこの同盟に関係したか、どうか？——大きな問題だ。伊藤はつねに親露派であったから、かれがこの同盟を勧めたということは、おそらくあり得ないだろう。

35・2・17条

◎真相（ベルツがロシアのスパイとの嫌疑を受けたことの真相（引用者補））が判明した。明らかに事の起こりは、ロシア公使館の一使用人の下らぬおしゃべりからだった。すなわちローゼンロシア公使が、その引揚げ前夜のこと、堪え難い耳痛のため、自分の来診を求めたのである。これが「嫌疑」を招いたのだった。その後、間もなく『やまと新聞』が、ロシア人のニコラス僧正をロシアのスパイと称する記事を掲げ、その記事の中に、スパイの疑いある他の外人をも列挙したが、それに自分の名前も載っていたのである。今日、同紙は神妙な謝罪文を発表して、自分の日本に対する功勞を強調し、どうしてこんな手落ちを生じたか、自ら諒解に苦しむところであると弁明した。昨日、自分に關する同様の称賛記事が『二六新聞』に載っていた。伊藤は、橋本からこの一件を聞いたとき、大笑いしたそうだ。そして、そんな馬鹿げたことを気にする必要はない、もっとも、希望なら、適当な機会に、自分の日本に対する功績を公表してもよいとのことだった。

37・3・6条

これら一連の記事を以て、いかにベルツが、伊藤公を偉大な為政者と認識して信頼するとともに、その為人に親しみの情を抱いていたかが知られるのであり、こうした彼の公に対する認識・心情が、後年、故丘独国において公の訃報に接するや、彼をして故国の新聞に「伊藤博文をしのぶ」なる一文を草せしめ、そこに【伊藤博文は普通、その追悼文のなかで、日本の最も偉大な政治家の一人であったと称えられている。しかし、このような見方は、故人にとって正しい

ものではない。最も偉大なうちの一人ではなく、かれこそは、その国で比肩するものがない、最大の政治家なのである。】と記し、【伊藤は、よく「日本のビスマルク」と称せられたが、かれ自身はそう呼ばれるのに、まんざらでもない様子だった。その成果の点では、たしかにそれは当たっているが、その外見や、そのやり方には、両者の間で似通ったところがほとんどない。「鉄血宰相」らしい点は、あまり伊藤に見られなかった。かれは、日本よりも、むしろ韓国でよく見受ける東アジア型の、われわれの感じでは小さくて、ずんぐりとした男であった。猪突猛進的なところはなく、反対に、いつも平静で、親しみのある微笑をうかべていた。内外の政策でも、かれの主義は「スエイツィテルラインモウド 挙止穩やかに」であった。思い切った方針はすべて、かれの好まぬところであった。】と述べ、【かれは天性目立たない、落着いた人柄であった。かれが、高位高官の金ピカ服を身につけるのは、本当に止むを得ない場合だけで、すぐさまそれを、くつろいだ和服か背広に着替えてしまうのであった。事実、かれの幾多の言動から、かれが外見的なもの一切にむとんじゃくであったことは、疑う余地がない。それなればこそ、自国や諸外国から数多く受けた名誉表彰も、かれの人柄にはなんら影響を及ぼさなかった。侯爵としての伊藤も、個人的の交際では、筆者が三十年前に初めて識ったときの平民伊藤と全く同じで、素朴な、いつも機嫌のよい人物であった。しかも、かれはこの幸せな気質、その平静さを、どんな場合にも決して失うことはなかった。】と録して、さらに【かれは酒と、女と、タバコを好んだ。しかもかれは、あえてそれを隠そうとはしなかった。かれはいった——いったい君たちは、わしにどうしろというのだ？ 日々のめんどうな政務をおえた後で、頭ががんがんするとき、しゃちこ張った召使よりも、きれいな「芸者」の手から傾ける晚酌は、わしにとって、はるか
にうまいではないか——と。外見では武人的なところがなかったにもかかわらず、伊藤は、まれに見る豪胆な性質で、これを幾度となく実証した】と故人の偉業とその為人とを衷心より哀惜の情を籠めて綴らしめたのである（

『ベルツの日記』下巻
四一五—四一七頁

。そして、こうしたベルツの伊藤公に対する評論は、先に触れた同公に関わる諸記事の総評ともい

うべきもので、しかも、『伊藤博文傳』(春歌公追 頌會發行) 第六章「内外名流の伊藤公評論」にみる大隈重信、谷干城、井上哲次郎、ブリンクリーの諸氏が各々指摘する諸見解と大同小異、概ね符節を合していることからみて、褒貶を品評するに偏頗なく、ほぼ公正にして妥当なものと判釈しえよう。

最後に、(A)(B)双方ともに合致する人物中、それら双方それぞれの所見条数において最も卓出する人物ハナ(ベルツ令妻・荒井花子)についての(B)記事、すなわち該人物の為人を表わし示す記事を書き添えて本節の末尾としたい。(当該事例は時代順に随って列挙する。但し、「対ベルツ発言・言説記事」として既に引文した事例と重複する条文については除外してある。)

○懐かしい父の命日。こんなことは決して忘れない妻は、黙って父の肖像を花環で飾った。

22・6・24条

○クリスマス・イブ！ だが、楽しいこの日も憂鬱だった！ トクの流行性感冒がすんだかと思うと、今度は、一週間このかた、かわいい盛りのウタが同じ病気で、重い肺炎を併発し、絶えず生死の境をさまよっている。妻の振舞いは悲壮を極め、子供を昼も夜も、ほとんどその腕から離さない。それこそ全くかの女の子供といった形で、むしろトクの方がよけいに自分のことを案じてくれる。自分自身も流行性感冒にかかっているのだ。

26・12・24条

○ハナの態度は、ローマの女のようにでした。ハナだけは、病気のあいだ、泣きませんでしたし、その声は震えてはいませんでした。しかし、その内心はどんなであったか、わたしにはわかるのです。ウタは、ハナにとって唯一のものであり、すべてでもあったのです。(中略)ハナの冷静の裏にどんな感情が潜んでいたかを、わたしはよく知っていました。それだけにわたしは、最後の瞬間が気がかりでならなかったのです。果して、抑えに抑えていたその内部の力も、ついにその瞬間にいたって爆発し、せきを切った奔流となり、あらゆる感情のすさまじいあらしが、かの女をゆすりにゆするのです。それは、悲痛に耐えかねたものではありません。痛憤きわまりない感情をまじえた悲痛なものでした。それは、現世で最愛のものを奪い去った運命への反抗でした——しかもその子たるや、生れてから死ぬまで、ほとんど一夜として、かの女に抱かれないうで眠ったことはなく、まるでその筋の一つ一つが、かの女の奥底に

生えつながつているかのような子であったのです。万事休止、呼吸も心臓もとまってしまった時、ハナはあの子の小さな体をひしと抱きしめ、体温を与えてよみがえらせようとするのでした。それから、子供をゆすぶり、泣き叫ぶのです。「ウタ、そんな振りをしてはいけません。お前は死んではないの。死んでなんかいるはずがないのよ」と。そして、自分の息を、子供の口から肺の中へと吹きこむのでした。「さあ、息をしておくれ！　ほんの一息でいいから、ほんのひと——一息。」

29・2・28条

○ハナは一晚中、ウタのなきがらの側にすわっていました。ウタの体をなで、ウタに話しかけるのです。一度、こう言っているのを聞きました。「あさっては、お前のお祭りだったのよ、そしてまた、おばあさんの誕生日なの。ね——その時は、お前もみたまになつて、みんなのところへ戻って来て、おばあさんがいつまでも、いつまでも達者でお暮らしになるよう、兄さんと一緒にお祈りするんですよ。ああ——おばあさんに、せめて一目でも、お前をお見せしたかった！」朝がた、湯灌したのち、ウタを納棺することになっていました。ところがその時、再びハナに、悲痛の恐ろしい発作が起こったのでした。もしハナの忠実な友達が、その場に居合わせなかったならば、わたしはどうしていたかわかりません。ハナが発狂したのではないかと案じたほどです。すると急に、ハナは気をとりなおしました。「もう、済んでしまった。あの子を、天国へお返ししたのだ。つらい——こと——だった。でも——でも——済んでしまった」と。この瞬間から、ハナはすっかり平静になり、子供に白絹の死装束を着せ、あのかわいいおしゃまさんが、いつもしてほしがっていたように髪を直してやり、子供の髪を一房切りとり、その代りに自身のを一房添えて、なきがらを棺に納めました。

29・3・1条

○数週間まえのこと、ハナの知合いが集った席上で、ある富豪がその夫人に、見事なめずらしいダイヤを贈ったという話が出ました。誰かが、そんな宝石を持っていれば、うれしいでしょうね——と申しました。そのときハナは、ひしとウタを抱きしめて「これがわたしの宝石です。ひとは、かごに一杯でも、ダイヤをお持ちになるがいいでしょう。でも、そんな人たちの身になってみたいなど、決して思いませんから」と。そして今、ハナの宝石は失われてしまったのです。この話は全く、コルネリアの物語りをまねたように

聞えます。しかしハナは一体、グラックス兄弟の母について何を知っているでしょうか！ 要するにこれも、純日本人社会の考え方や気質が多くの点において、古代ローマ人のそれと著しく似ているというわたしの見解を、またもや裏書きするにすぎないのです。

(中略) 明日は母上の誕生日です。わたしたちは、数日前まで考えていたよりも静かに、その日をお祝いすることでしょう。ハナは懐かしい母上の肖像の前に花を飾り、香をたくことでしょうか。わたしたちは、例の通り暗着をつけるでしょう。そしてハナは、今ではわたしたちの唯一の子であるトクの手をひき、肖像の前へ導くことでしょうか。それから、わたしたちはその前に立って、祈ることでしょう。——愛する母上がご健在であるようにと。

29・3・2条

○午後、エルウィン・トクを送って船に乗るため、横浜へ向う。自分たち両親は重苦しい気持で、教育のため息子^{トク}をドイツにやる決心をしたのである。なんといっても、あの子はドイツ人であるし、事実またドイツ人にならねばならないのだから、妻^{ハナ}もそれを唯一の正しい道と思い、結局、泣きごともしわす大きな犠牲を払うことになった。自分たちにとって、せめてもの慰めは、あの子が祖母や叔母たちのもとでこの上ない手厚い保護を受けることである。

33・4・6条

○妻^{ハナ}は多数の知人と共に船まで来た、堀内から家の世話をする人たちも一緒に。これらの善良な人たちは、生れた時から知っている大好きな若旦那に今一度会うため、わざわざやって来たのだ。母親に別れること、そしてまた母親にすれば、このさき何年も手離さねばならぬたった一人の子供に別れることはつらかった。妻はよくがまんした。だが、心の中でどんなに悩んだか、自分にはわかる。九時、ワイマール号は棧橋を離れた。坊やは、胸もはり裂けんばかりに、すすり泣いた。しかし、自分が神戸まで付いて行くので、まだしも今日は父親があるわけだ。それで、間もなく少しおちついた。

33・4・7条

◎今朝、家のギンが突然重病におちいった。お昼には絶望状態だった。夜十時、このかわいそうな、十二歳になる子は死んでしまった。妻は取乱^{ぐず}さなかった。これでその母・娘・養女の三人とも、急性腹膜炎で失ってしまったことになる。妻がギンを育てたのは、一つには同情から出たもので、トクの遊び相手にするためであり、また一つには「他日お墓の世話をしてくれるもの」と思ったか

らでもある。自分には時々、妻の自制ぶりが、ほとんど気味悪いほどになることがある。妻の真実の感情生活と、感動せずにはいられないほど善良なその心中とを知らないものは、おそらく妻を無情な人間と勘違いすることだろう。

33・4・17条

○東京に帰着。(中略) 帰って見ると、妻は相変らずいきいきとして輝くばかり。自分自身で驚いたのだが、往来で日本人、ことに日本の婦人がとても小さく、しかも物めずらしく感じられることである。日本で二十五年も暮した現在、再び自分がこうも完全に西洋化されたとは奇妙だ。

34・9・3条

○奈良滞在は、いよいよ長引くばかりだ。ここには、無限に観るものがある。(中略) 奈良の名残りはつきない。ただ一つの不足をいえば、妻の居らないことだった。妻は自然を解し、これを楽しむばかりか、なによりも美術、古蹟に対して、日本の婦人にはまれに見る、著しい理解をもっている。奈良は妻におあつらえ向きの土地なのだが。軍隊の輸送で、こうも旅行がめんどうでさえなければ、電報で呼び寄せるところだった。ぜひ一度、妻と一週間を当地で過ごそう、今からそれが楽しみだ。

37・4・20条

○妻と、築地東本願寺の生け花の会を訪れる。この会は毎年、真宗開祖の誕生日五月二十一日に行われる。これには日本全国から、少くとも三百の団体から、生け花師が参加する。この生け花とは、西洋のように花を束ねたものではなく、日本において本式の芸術・学問にまで発達せしめられた插花方式に従って、花器中に配置するものなのである。日本は、この芸術をこのように完成した唯一の国である。生け花の教授は、高級な女子教育の重要な一部に属する。(中略) これらの配置では、花や植物自体(花が必要なのではなく、一本の針葉樹やモミジの枝で事足りるのだ)のみではなく、同時にまた花器が大切なのであって、この花器は植物に応じて質、形、色などの異なるものを選ばねばならない。各流派では枝振り、枝の曲り方、花の傾き方の一つ一つが、それぞれ象徴的な秘伝の意義をもっている。もっともこんな場合には、往々にしてわざとらしい不自然さを示すものだが、幸いにも、普通こんな点がない。この芸術が将来、ヨーロッパでも一般に普及することは疑う余地がない。当地の外国婦人連はすべて、その部屋をこのような生け花で飾らしているか、あるいはまた自身で生け花を習っている。妻はこれが素敵に上手だ。

37・5・21条

○今日、自分の所蔵する日本画を鑑定してもらうため、有力な日本の美術評論家である（美術学校の）下条、前田の両氏を自宅へ招いた。両氏の鑑定は、大いに満足すべきもので、所蔵品の中には貴重な絵画があるそうだ。その中の若干を、次年度の「秘蔵美術品展覧会」に出品するよう所望された——元来、自分の骨董品全部の整理や手入れおよびその買入れは、主として妻の功勞に帰すべきものである。妻は、うまずたゆまずこれに従事し、しかも美術のあらゆる部門にわたり、何人をも一驚せしめる鑑識眼を具えている。

37・10・17条

○大みそかに妻と、迷信について語った。妻は、日本の古文書から、これに関する材料をたくさん集めている。どうも不審でならぬのは、妻自身がこのような迷信に、少しもとらわれていないのに、多数のヨーロッパ婦人のあいだには、そんなことが有るとは信じられないような、各種の迷信が存在するのを認めたことである。野蛮人のおとつび極まる觀念にも劣らぬ迷信に関して、新しい証拠の数々を、自分はさまざまの機会に始終見ている。

38・1・1条

○五時三十分の汽車で、われわれは東京の新橋駅を立った。とても大勢の見送りをうけた。厳肅な別離であったが、初めて故国を離れるのであり、しかもいつまた帰れるかわからない妻の身にとっては、自分よりもいっそうこの別れが重苦しく感じられたことだろう。妻は身も心もそのままの「江戸っ児」（つまり江戸または東京の娘）で、京都や神戸に滞留してさえ、すぐいやになって、なつかしい江戸へ帰りがたがるのである。それなのに、故国と別れることについて、妻の口から一言の愚痴も聴かなかったし、その眼に一滴の涙も見なかった。だがしかし、自分は知っている、妻が今にもほとんど泣出さんばかりの気持であったことを。妻は決して、自分に対して打解けないのではない。ただ別離の悲痛は、自身の胸の中だけで耐え忍ばねばならないものと信じているのだ。

38・6・9条

明治九年一月三日、エルウィン・ベルツがベルリンにて駐独国公使青木周蔵に示された契約書には「一、官立東京医学校に生理学兼内科医学教師として雇入れのこと。二、任期二カ年のこと。三、俸給一六、二〇〇マルク、ただし月割に金貨で支払うこと。四、往復の旅費、住居支給のこと。五、診療自由のこと。」の諸項目があり、これをベルツは諒として承引し、署名した（『日記』）。従ってベルツの訪日後における本務が、飽く迄も契約書記載の第一項、すなわち官立東京医学校での生理学兼内科医学教師としての任務遂行にあり、これを忠実に履行する限りにおいて、同契約書記載の第五項、すなわち診療の自由なる権利を行使しえた訳である。

さて、先記第一項に関する事柄については、訪日五日後、すなわち明治九年六月十日より、早々と東京医学校（この東京医学校は、翌明治十年四月五日に法理文三学科を併置する東京開成学校と合併して、始めて東京大学医学部と改組改称された。）において、生理学の講義を始めており、この時の感想を後日

【学生たちの素質はすこぶる良いようです。講義はドイツ語でやりますが、学生自身はよくドイツ語がわかるので、通訳は実際のところ単に助手の役目をするだけです。】（同年六月二十六日条）と手紙に認めて故国の親類知己に報告している。また、上記第五項に関する事柄については、同年十一月二十八日条に【今日、当地で最も名の知れた開業医の一人から、

週に一回その家で患者の診察をしてほしいとの申出があった。】とあり、ここにみる当地東京で「最も名の知れた開業医の一人」とは一体如何なる人物か、はたまた、件の人物からの「申出」を、この時に、あるいはその後、そのままないしは某かの条件をつけてベルツが受け容れたか否か、これらの諸点については、必ずしも明らかにしえないが、この本務以外のいわば副業ともいうべき診療・診察行為それ自体が、実際のところ、明治三十八年に離日するまでの約三十年に垂んとする滞日期間中に、相当活発に施行せられたことは、そのことを語り示す記事、すなわち「診察・診療記事」が『日記』の諸条に随見されることによって諒知されるのである。こうした彼の営みの実態を具象的に示す諸記事

にあって、左掲二記事のうち前者が最初出、後者が最後出の各事例である。すなわち、

○多忙な一日ののち、夜の九時過ぎにもなるのに、ドイツ公使からの手紙で、ベルボラニ伯夫人が重病だというイタリア公使館へ、至急往診を頼まれた。非常に疲れていたにもかかわらず、すぐさま車を飛ばしたところ、着いてみれば、自称患者がびんぴんしているので、少なからず驚いた。夫人は庭園に出ている、ジンチョウゲの香をかいだのだが、あとで鼻の中がいささかむずがゆくなった。そこで思ったらしい、虫が嗅覚器官の中へもぐり込んだのだろうと。これが、夫人の考えでは、脳の中まで侵入するかも知れないというのだ。夫人は、そんなことがあり得ないということを、単に自分の口から聞きたかったにすぎない。自分は、若い女の気まぐれから夜分ここまで駆けつけねばならなかったことに、危うくかっとなるところだった。しかし、わずか二十歳になるかならぬかで、五十歳のイタリア公使の夫人である、このようなあてやかな女性に対して、誰が腹を立てられよう？――

11・3・26条

○昔の患者が、今日、自分に話しかけて来た――ペナンのダンカン氏で、もと香港に居った人だ。氏は多年、東アジアで新聞記者をやっており、いささか黄色紙がかった際物新聞『ホンコン・テレグラフ』の主筆次席を永らく勤めた。二、三年前に氏は、海峡植民地の裕福な数名のシナ人により、その利益と意向に従ってペナンで英字新聞を発行するため招かれた。現在ではこの仕事をやっている。バルチック艦隊がはるばると来航したとき、氏はその後を追ひ、サイゴンやアンナム沿岸を訪れ、いろいろな面白い情報を手に入れた。

38・6・23条

ところで、これら二事例をも含めた当該諸事例中には、対診者、すなわち受診者自身の病状はもとよりのこと、この受診者およびその周辺に連なる人々と往診者ベルツとの対話、そして件の対話を通路として、それらの人々それぞれについて、為人・家庭環境・社会的地位・経歴、さては汎く本邦人・異邦人それぞれに独有の思考性・民族性といった事柄に至るまで言及し、あるいはそれに加えて、それら諸般の事柄に対する記主ベルツ自身の見識なり為人・人柄なりを如実に示す、その所感・感懐を附記しているケースも、かなり多見されるのである。こうしたことから彼は、対診者

に接して、これを多方面から仔細に観察し、以てその対診行為に止まらず、対診者およびそれに関わる人々の、人情の機微に触れるとともに、その背景にある諸々の社会事象や文化現象をも確と感取していたのであり、さらに、それら関係諸事象・諸現象の生起し来たった所以や経緯の如何なるものかを探究して、これを解明せんとする旺盛な意欲を有していたことも十分に窺い知れるのである。しかも記主ベルツは、客観性を要諦とする科学者であるということもあって、物事を認識し判断するに、極端な偏頗は認められぬので、その見解・所見は、概ね公正・公平にして穏当なものと評して誤りない。この意味において、当該記事を以て、まさしく人事・世情・世態・風俗等、諸領域・諸分野万般に亘る事柄を、その境に莅むがごとく映し出している真澄の鏡と称しても、決して溢美の言ではないと思う。ここには、そうした内容を包蔵する当該記事のうち、固有名詞をもつ対診者に限り、これを五十音順に列記するとともに、これら各対診者の所見条と所見条数をも併記しておくこととする。

対診者

1	アイシン家令息	37・4・12、37・4・16の二条	所見条と所見条数
2	赤星(樺山伯爵義兄弟)	37・11・19の一条	
3	有栖川宮(威仁)	38・3・25の一条	
4	板垣元参議・自由党総理(退助)	15・10・12の一条	
5	井上伯爵・大蔵大輔・外務卿(馨)	14・5・19の一条	
6	岩倉公爵・右大臣(具視)	16年の一条	
7	大隈伯爵・外相(重信)	14・6・21、22・10・18、37・4・17、18の三条	
8	大隈伯爵・外相(重信)夫人	22・10・18の一条	

- 9 大谷法主(光尊)
- 10 大谷法主(光尊) 令息
- 11 大谷法主(光尊) 令嬢
- 12 大谷伯爵(光瑞)
- 13 大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥(巖) 夫人
- 14 岡部子爵(長職) 令嬢
- 15 オズーフ大僧正
- 16 桂伯爵・首相・將軍(太郎)
- 17 川村伯爵・海軍中將(純義)
- 18 北白川宮(能久) 王子
- 19 北畠男爵(治房) 令息夫人
- 20 ギン
- 21 小松宮(彰仁)
- 22 コルシエルト
- 23 西郷侯爵・元帥・内相(従道)
- 24 末川夫人
- 25 末川令息
- 26 スクリバ博士

- 25・9・1、33・2・17、33・2・20の二条
- 37・2・12、37・8・12の二条
- 28・9・23の一条
- 38・2・14の一条
- 37・4・22の一条
- 15・8・25の一条
- 38・4・26の一条
- 25・9・1の一条
- 25・9・1の一条
- 38・1・2の二条
- 13・7・13の一条
- 13・7・13の一条
- 35・6・1、35・6・2の二条
- 12・2・22の一条
- 36・2・17の一条
- 33・4・17の一条
- 37・4・17、18の一条
- 21・12・15の一条
- 37・2・12、37・8・12の二条
- 37・12・8、38・1・2の二条

27	ストルーベ駐日露国公使令息	13	・ 2	・ 9	の 1 条
28	ストレート	37	・ 11	・ 22	の 1 条
29	副島内相(種臣)令息	14	・ 5	・ 12	の 1 条
30	伊達侯(慶邦)令息	12	・ 4	・ 2	の 1 条
31	田中子爵・宮相(光顕)夫人	38	・ 1	・ 11	の 1 条
32	タノスケ	13	・ 3	・ 20	の 1 条
33	田村参謀次長(怡与造)	36	・ 9	・ 30	の 1 条
34	ダンカン『ホンコン・テレグラフ』元主筆次席	38	・ 6	・ 23	の 1 条
35	団十郎(市川―)	36	・ 9	・ 20	の 1 条
36	デニソン夫人	13	・ 7	・ 13	の 1 条
37	東宮・皇太子(嘉仁)	28	・ 8	・ 11	の 1 条
		33	・ 1	・ 5	の 1 条
		34	・ 10	・ 5	の 1 条
		37	・ 4	・ 24	の 1 条
		38	・ 3	・ 3	の 1 条
		25	・ 12	・ 10	の 1 条
		38	・ 2	・ 28	の 1 条
		3	・ 38	・ 35	の 1 条
		26	・ 1	・ 11	の 1 条
		38	・ 5	・ 13	の 20 条
38	徳大寺侯爵・内大臣(実則)	37	・ 4	・ 24	の 1 条
39	鍋島侯爵(直大)	12	・ 7	・ 9	の 1 条
40	鍋島侯爵(直大)夫人	12	・ 7	・ 9	の 1 条

41	鍋島侯爵(直大)令息		12・7・9、	13・7・13の二条
42	鍋島侯爵(直大)令弟夫人		12・7・9の一条	
43	二位局(中山慶子)	26・11・28、	33・1・17、	33・1・20、
44	野津將軍・元帥(道貫)		13・6・22、	13・6・23の二条
45	ハリス博士・元医師(ラザフォード)		37・11・25の一条	
46	ハリス博士・元医師(ラザフォード)令息		37・8・22の一条	
47	フェノロサ夫人		13・7・13の一条	
48	ブーグアン退役陸軍大尉		38・5・13の一条	
49	古河(市兵衛)令息		37・9・10の一条	
50	ベルボラニ伯爵・駐日伊国公使夫人		11・3・26の一条	
51	前田侯(利嗣)		33・6・12の一条	
52	松田東京府知事(道之)		15・7・6の一条	
53	陸奥伯爵・外相(宗光)		28・9・23の一条	
54	毛利先公(敬親)未亡人		33・5・26の一条	
55	山形伯爵・首相・元帥(有朋)	24・3・7、	37・2・13の二条	
56	山田伯爵・司法相(顕義)		25・3・25の一条	
57	大和子爵(山尾庸三カ)	37・12・13、	37・12・18の二条	
58	李容翊		36・6・24の一条	

これら五九名の対診者中、東宮・皇太子（嘉仁）の一名が二〇条、二位局（中山慶子）の一名が五条、大隈伯爵・外相（重信）、大谷法主（光尊）の二名が各三条、アイシン家令息、川村伯爵・海軍中将（純義）、西郷侯爵・元帥・内相（従道）、スクリバ博士、鍋島侯爵（直大）令息、野津將軍・元帥（道貫）、山県伯爵・首相・元帥（有朋）、大和子爵（山尾庸三カ）の八名が各二条、他余の四七名が各一条ずつ所見されるので、東宮・皇太子（嘉仁）の所見条数が諸他の人々のそれに比して如何に卓絶しているかが分かるのである。

ところで、このベルツの東宮・皇太子（嘉仁）に対する診察・診療行為は、明治三十五年三月六日条に【皇室から、非常に有利な条件で、東宮の侍医として五カ年の契約が提示された。だが自分は、契約に縛られたくないのだ。】とあり、同年六月十日条に【今日で、東京大学において二十六年の教師生活を終ったことになる。はっきり二十六年前の六月十日にちょうど、自分は就任講義をやったというわけだ。】とあり、そして同年十一月十五日条に【自分は、東宮が病気になるらされた場合は、いつでも奉仕することを約束してあるのだ。】とあることより判じて、明治二十八年八月十一日条より同三十四年十月二十八日条までの一〇条に及ぶ該記事は、東京大学教師としての本務以外の兼務、いわば副業としての活動状況を語るものであるが、明治三十五年十一月十五日条より同三十八年五月十三日条までの一〇条に亘る該記事は、それまでとは立場を変えて、本務たる侍医としての活動状況を示すものを多く含む（これらの中には、懐古談として所見されるものも存するので）とみてよからう。

斯様に件の「診察・診療記事」には、各界で指導的な地位を占めた、あるいは現に占めている名流諸家が数多登場し、また、記主ベルツの係累や友人・知己、その関係者等も多数所見され、そしてそこには、既述のごとく単にこれら多くの人々に対する診察・診療とその所見結果に関する記述のみならず、この診察・診療行為を通路として、それら多くの

人々それぞれに関わる諸種の事柄や諸般の事情を広範、かつ詳細に記載し、尚且つそれについての自らの見解をも附記しているケースが頻見される。こうした当該記事のあり方とその内容から判じて、記主その人の人柄・為人は固よりのこと、それら多くの人々の各人各様のそれをも窺知しうるとともに、汎く国家・社会に関わる幾多の諸事象・諸現象をも具象的に読み取ることも可能である。この意味において当該記事は、記録史料としても頗る有用で価値あるものと認められるのである。さらに、そうした多くの人々に対するベルツの診察・診療行為がそれ自体が、至って親身であり、誠実であり、良心的であったということも大いに与って、その診察・診療行為における真摯にして安恕の精神に満ちた態度でないし姿勢が、自ずと該記事のあり様やその内容にも色濃く反映されていて、こうしたことが読者に或る種の犯し難い崇高さを感じさせ、あるいは安らかで穏やかな親近の情を抱かせて、印象鮮明にして興趣に富むものとならしめる一要因を為していると考えられるのである。そこで以下に、そうした記事そのものを掲記して参考の資としたい。紙幅の関係上、本文を適宜抜載するに止めておく（但し、ここには既引の人物、すなわち20ギン（前節のハナの為人を語り示す◎印記事）、³⁴人（本節）、⁵⁹ローゼン男爵・駐日露国公使（前節の伊藤公の為人を表わし示す◎印記事）の各事例は、除外してある。）。

〔1 アイシン家令息〕

○アイシン家では、たった一人の子供の命を大いに案じて、至急神戸への往診を求めている。ところが、一昨日来、再び軍隊輸送で、列車の数が極度に制限され、しかも十五時間のところが二十六時間もかかる！

37・4・12条

○アイシン家の年齢三カ月の赤ん坊の診察は、まったく国際的事件だった——すなわち、父がスイス人で、母はフランス人、医者としてはドイツ人たる自分のほかにイギリス人、アメリカ人、オランダ人、日本人がそれぞれ一名ずつ立会った。

37・4・16条

〔2 赤星（樺山伯爵義兄弟）〕

○午後、大磯に赴く。樺山伯爵から、心臓を患っている伯の義兄弟赤星の診察を求められたのだ。（中略）海軍大将樺山伯爵は、強く

て威のある薩摩男の好典型である。つねに伯爵とは、快く語り合う。

37・11・19条

〔3有栖川宮（威仁）〕

○アルコ伯が、有栖川宮夫妻をお招きして、盛大な晩餐会を催した。宮夫妻は、ドイツ皇太子の成婚式に列席のため、近くベルリンへ出発される。妃は各宮家の妃のうちでも、筆頭に位する方であり、同時にまたひととき優れた方でもある。以前ヨーロッパに滞在されたときは、わが国の皇帝の大変お気に入りだった。それを覚えておられるから、ベルリンへ行くのを非常にお喜びで、なお引続きロンドンも訪問されるが、同地では宮夫妻を盛大に歓迎することは必定だから、これもまた楽しみにしておられる。宮は昨年、渡米してセントルイスの博覧会を訪問されることになっていたが、当時その健康に不安な点のあることを自分が報告したために、渡米が取止めとなってしまったので、それからしばらくのあいだ、宮夫妻は自分をひどく恨んでおられた。しかし今では、宮もすっかり気分を直された——というのは、ヨーロッパ旅行の方がはるかに興味があるし、それに健康も今ではじゅうぶんに回復されたからである。妃は上機嫌で、自分が宮のためにいろいろと力を尽したことに對して感謝された。そして明後日、親しく宮家へ招待された。

38・3・25条

〔4板垣元参議・自由党総理（退助）〕

○本日、興味ある患者を往診——もと参議で、今は自由党総理の板垣である。かれはたしかに日本で最も人気のある人物だが、日本の真の知己たる人々はいずれも、アメリカの事情をそのまま日本に移し入れ、共和政体を樹立するなどというその計画を、ただただ深い憂慮の目でながめざるを得ない。日本の国民に幸福をもたらそうというこの一派の人たちはといえば、スチュアート・ミル、ジョン・ブライト、ハーバート・スペンサーを一手に引受け、それによって自国の将来を建設しようと思っているのである。奇妙な理論家たちだ！

15・10・12条

〔5井上伯爵・大蔵大輔・外務卿（馨）〕

○今日、井上外務卿のもとへ往診を求められた。卿はかなり前から、すなわち数カ月前から、記憶力衰弱症にかかり、そのため、日頃は非常に元気な人だったのが、まるで憂鬱症になってしまったのだ。井上卿は大いに才能があり、教養があつて、新日本の有為の人材の一人である。卿は、他の大部分の日本人に比べて、融通性にとみ、従つて外交官としてはいっそう適任である。卿は特異な経歴の持主である。長州人ながら、外人と多く交わり、英語を学ぶ目的を達した最初の日本人の一人である。かなり久しい間、イギリスで日本の代表者だった。およそ六年前に大蔵大輔となり、官を退いてから建白書で激しく政府を攻撃した。現在は、前述の通り外務卿で、前任者よりもはるかに手際よくその職責を果している。卿は生氣にみちた、理智的な面差しの小柄な人物で、ヨーロッパの文化や生活様式を完全に同化した日本人である。なお特筆すべきは、卿がその十七歳になる令嬢に、完全にヨーロッパ式の教育を受けさせていることである。井上卿はその体に、十八年前にうけた三カ所の、実にすばらしく大きい傷跡がある。一つは背部に、その二は後頭部に、いま一つは顔面にある。よくも生きておれたものだと、驚嘆せざるを得ない。

〔6 岩倉公爵・右大臣（具視）〕

○それは明治十六年の初めのことだったが、ある晩、ドイツ公使館で一人の貴公子然たる青年にあつた。あとでわかったが、それは岩倉公の令息だった。青年はわたしの方へ歩みよつて尋ねた。「お伺いたしますが、先生、ひどい嚙下困難を呈する場合は、危険な徴候でしょうか？」——「その方はお幾つです？」——「五十二歳ですが」——「すると、まあただ事ではありませんね」——「実は、わたしの父なのですが」——青年がさらになお二、三の症状を述べたとき、食道癌の疑いがあると、わたしは告げておいた。それから半年あまりは、別に何事も耳にしなかつた。するとある日、宮内省と文部省の役人から、至急面談したいとの知らせをうけた。二人の役人は勅命によりわたしに、次の船便で神戸へ立ち、京都で重い病気にかかっている日本の最も重要な政治家の岩倉右大臣を見舞い、できる限り東京へ連れ帰つてほしいと依頼した。すぐさまわたしは、助手を一人伴つて神戸へ出発したが、神戸ではもう、わたしを迎える手配がすっかりできていた。公はひどく衰弱し、かろうじて少量の栄養をとり得るにすぎないような有様だった。六月

の末、わたしたちは東京へ戻った。―その時、公はわたしから包み隠さず本当のことを聞きたいと要求した。「お気の毒ですが、ご容体は今のところ絶望です。こう申し上げるのも、実は公爵、あなたがそれをはっきり望んでおられるからであり、また、あなたには確実なことを知りたいわけがあることを存じていますし、あなたが死ぬことを気にされるような方でないことも承知しているからです。」「ありがとうございます。では、そのつもりで手配しよう。―ところで、今一つあなたにお願いがある。ご存じの通り、伊藤参議がベルリンにいます。新憲法をもって帰朝するはずだが、死ぬ前に是非とも遺言を伊藤に伝えておかねばならない。それで、できれば、すぐさま伊藤を召還し、次の汽船に乗りこむよう指令を出そう。しかし、その帰朝までには、まだ何週間もかかる。それまで、わしをもたさねばならないのだが、それができるでしょうね？」そして公は低い声でつけ加えた。「これは、決して自分一身の事がらではないのだ」と。「全力を尽しましょう。」だが、もうそれは不可能だった。病勢悪化の徴候は見るまに増大した。公はほとんど、飢え衰えるがままに任された形だった。永い、不安のいく週間かがすぎた。その時わたしは、臨終が間近なことを知った。わたしは公に、最後の時間が迫ったことを告げた。すると公は、井上参議を呼び寄せるように命じた。公は参議に、声がかれているから、側近くひざまずくように促した。その間わたしは反対側に、公から数歩はなれてうずくまり、いつでも注射のできる用意をしていた。そして終始、寸刻を死と争いながら、公は信頼する参議にその遺言を一語一語、耳うちし、ささやき、あえぎあえぎつ伝えるのであった。こうして、疑いもなく維新日本の最も重要な人物の一人であった岩倉公は死んだ。鋭くて線の強いその顔立ちにもはっきり現われていた通り、公の全身はただこれ鉄の意志であった。

16年条

★既述のように、当年条の記事は、ベルツの口述するところを、その令息たる編者トクが書き下ろしたものであり、他余の条の記事と異なって月・日記載がみられない。

〔78 大隈伯爵・外相（重信）・夫人〕

○池田から大隈のもとへ往診。大隈は新日本の最も重要な人物の一人で、日本の財政を建て直すという困難な職務を担っているが、

それはまるで孔だらけのにおけに水をくみ入れるようなものだ。大隈はできるだけのことをやったが、この任務はあまりにも大きい。天性快活な人物だが、この二、三年の間に急に老けてしまって今では少しせきが多い。四十歳代の前半という若さであり、大柄で、全然ひげがなく、ずるそうな眼をしているが、その態度には好感もてる。

14・6・21条

○センサーショナルなでき事——その場から、今帰宅したところだ。七時頃、イギリス公使館のナピアのもとへ車をかり、そこから、夕食によばれていたチェンバレンのところへ行くつもりだった。ところが、ナピア夫人は、熱に浮かされたように興奮していた。自分の顔をみるが早いか、有無をいわせず、お説教だ。最初は、何のことだか合点がいかなかった。そのうちに、ようやく事情が判ってきた——暗殺事件が起こったのである、それが大隈外務大臣に！ みんなが自分を探していたのだ。そこで、馬車に飛び乗り、外務省へ。どの門も、サーベルとピストルの警官で一杯だ。前庭には、数知れぬ馬車、人力車。自分の顔をみると、すぐ屋内へ通した。大隈は、自分がいつも夫妻を往診する時と同じ階下左側の部屋で、ソファの上に横たわっていた。意識は明瞭だ。仮繃帯を施した右脚の激しい痛みは、モルヒネで和らげてあった。人々は、なお橋本が来るのを待っていた。他のおもだった日本の医師たちは、もう集っていた。かれらはすべて、至極冷静に事を処理した。だが、このような場所ですら、先生がたはあのか笑いをやめることが出来なかった。右足内側のくるぶしの上方にある傷は、その個所で脛骨を完全に粉碎していた。その上方の第二の傷は、膝関節の内側下方にあって、この関節内への粉碎骨折を伴っていた。脛骨の中間部も同様に、全部粉碎されていた。下腿を動かすと、骨が、まるで袋にはいつているかのように、手の中でがた音を立てた。上腿切断手術よりほかに、施す手段がないことは明白だった。この手術を佐藤が行い、その際、橋本がある程度の指図をした。手術は順調にはかどった。治るの見込みは十分ある。凶行は、明らかにダイナマイト爆弾で行われた。犯人来島恒喜は、その場で頸部をかき切って自殺した。

22・10・18条

★当条によるかぎり、被害者大隈の診察・診療に当った医師連の中にベルツの名が見られぬが、この時、ベルツも診察・診療に当っていたことは、明治三十七年四月十七、十八日条に明証がある。後掲〔18北畠男爵（治房）令息夫人〕を参稽されたい。

〔9 10 11 大谷法主（光尊）・令息・令嬢〕

○まず西本願寺の大谷法主、その令息と美しい令嬢の治療。それから西本願寺の立派な寺院と、その門外不出の絵画の参観。

25・9・1条

○電報で京都へ、重体の西本願寺大谷法主のもとに呼ばれた。

33・2・17条

○駅では、若い紳士に大谷家の豪華な馬車で出迎えを受けた。その馬車がまた、京都では唯一のもの——というのは、街路があまりにもせまいため、実のところ、乗物が交通に危害を及ぼすからである。市街電車はすでに多数の犠牲者を出している。病人は、いわゆる「日本の仏教徒の法王」として、宗教上の階級制度から見ても非常に高い地位に置かれているだけでなく、別にまた、京都一の美男子であるとの評判をとっている。事実また、かれとその家族はいかなる点から見ても、全くずば抜けて気品のある人たちである。――重い尿毒症、だが予期したほど悪くはない。

33・2・20条

〔12 大谷伯爵（光瑞）〕

○午後三時には、ドクトル齋藤が自分のため、門徒宗の高僧である西本願寺の大谷伯爵のもとを訪問する取極めをしておいでくれた。自分は、伯とその協力者がガンダーラと東トルキスタンからも帰った、極めて興味ある仏教の古代遺物を詳しく観せてもらって、説明を聞きたかったのである。高僧はまだ青年で（「法王」の位は世襲である）、日本人にしては堂々たる風采の人物であり、すこぶる大柄で、頑丈な体格をし、顔立ちは精力的で、^{エネルギッシュ}あたかもナポレオンを想わせるものがあつた。伯は皇室と極めて近しい親類の関係にある。すなわち伯の夫人は、東宮妃とは姉妹であり、従って伯自身は、次代の天皇の義兄弟にあたるわけだ。自分の古い患者である伯は、快く自分の願いを容れ、西本願寺の仏教大学の総長で独・英両国語を話す蘭田博士の通訳で、その発掘物に関して詳しく説明し、手もとにあるだけの写真を自分に提供し、それ以外になお、自分の希望するものごとく写真に撮らせることを申出た。発掘物の一部は、ガンダーラから出た純ギリシヤ型の素晴らしい頭部数個、その他であったが、特筆すべきは東トルキスタンのクチャから

出た立像、顔面、壁画の類の蒐集で、それがアリアン系にいくぶん蒙古系の混った雑種族を表現していることだ（月氏？ トルコ族の先祖？）。これ等の発掘物は八世紀の作品だが、そのころは仏教の全盛期であった。それが十世紀の頃、回教徒の手で破壊されたのである。仏教と同時に、多数の景教徒もその地方に存在していたに相違ない。——自分は、これらの発掘物とその写真を、科学的に利用する許可を得た。東宮妃の姉妹にあたる大谷伯爵夫人は、かねがね評判の美人ときいていたが、美しい上品な婦人で、話振りにそつがない。

38・4・26条

〔13 大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥（巖）夫人〕

○今日、国民の中で第一流の女性の一人である、陸軍卿大山大将夫人の葬儀が行われた。産褥熱におかされて、二日前に永眠したとき、夫人は二十三歳だった。夫人は外人にも、同胞の親しい人たちにも、等しく好感をもたれていたが、後者の人たちには、夫人のやることに良い点を認めるのが全く困難であったことは確かだ！ 宴会などのおり、あのきれいな顔、無邪気でいたずらっぽい子供のような笑いが、自分の心を楽しませてくれたことも幾度だったか！ まだ元氣あふれる夫人を最後にみたのは天皇誕生日のことだったのに、一週間前、夫人の病床に呼ばれた時は、もう意識もなく、青白くやつれ果てていた。夫人を診察したのは発病後三週間目のことで、すでに絶望状態にあった。だが大山將軍は、夫人を毎日みてくれるようにとの希望だった。自分はその希望に従い、夫人が徐々にではあるが確実に、死の手におちてゆくのを見守ったのである。その時、医術の無力、人間の無能を、どれほど痛感したことか！

15・8・25条

〔14 岡部子爵（長職）令嬢〕

○午後、東京へ。名古屋までの関西線では、あまり軍隊輸送と接触することなく、まだ急行一列車が通っている。同車は岡部子爵と、まだ元氣なその母堂のみであった。二人は、昨年自分が、重体だった子爵の令嬢を治療したことを、いまだにひどく感謝していた。岡部子爵は、大和に近い国の旧大名である。子爵は、およそ大名の中で最も堂々とした、男性的外見の人物である。子爵の顔は、ナ

ポレオンを想わせるが、しかしナポレオンとは違ってほどよくつり合っており、普通日本では力士にのみ見受けるような胴体の上にある。車中岡部子爵は、大名の一行が江戸へ往来した昔の国道である並木道を、自分に指さしていった「あの街道を、まだ若い領主だったころ、両刀を差した三百人の侍を従え、槍持ちを先頭にして、通行したことがあります、一行が近づくと、旅人も住民も、みな土下座して、路上に突いた両手に額を擦りつけねばならなかったのです。こうして今、他の誰とも同じように、汽車の中からこの辺をながめると、当時のことが、まるで奇妙な夢のようです」と。「ほんとうに夢ですよ」と、母堂もつぶやいたが、この老婦人にとっては、このような変遷がいっそう奇異に感じられるに相違なかった。昔は江戸からここまで十五日かかったが、今では汽車なら、柔かい快適な座席で、風雨の気遣いもなく、十五時間の行程であるが、あるいはそれ以上かかるかも知れない、なにしろ昨今は軍隊輸送の折からとて、はるかに時間を要するから。

〔15 オズーフ大僧正〕

○今日、カトリック教のオズーフ大僧正のもと。師がひどい失神状態に陥ったので、診てほしいとのことだった。しかし自分が行ったときには、もうすっかり元気を取りもどしていた。七十六歳になるこの老人は、火の気のない、みすぼらしい部屋にすわって、聖書の上に屈みこんでいた。米、英、独を問わず新教の牧師のところでは、この大僧正のもとほど貧弱な住居を見たことがない。「僧正レシジョン」は古びた木造小屋である。階段は狭く、室内は冷く、しごくお粗末な色あせた古道具が備えてあるにすぎない。老師はすこぶる話好きだった。師は、自身が布教者として東洋で過ごした五十年にわたる生涯について、いろいろと語った。

〔16 桂伯爵・首相・將軍（太郎）〕

○赤十字病院へ桂將軍を見舞う、経過一段とよし。

〔17 川村伯爵・海軍中將（純義）〕

○川村伯爵と長話をする。伯は小柄の元気な人である——否、正しくは、大変元気な人であった、というべきだろう。今は六十八歳の

老人で、萎縮腎と喘息ぜんそくを患い、物を言うのが大儀であるから、たいていはあまりしゃべらないが、話が戦争のときだけは活気づく。そして最近、例の勝報の来たとき、非常に興奮してあまりしゃべりすぎたため、喘息の劇しい発作が起きたくらいである。伯のおおへからざる功績は、日本海軍の大部分を編成したことである。そしてこの日本海軍が伯のお自慢なのだが、もっともなことである。伯が日本海軍の称賛されるのを聴くときは、まるでラッパの響きに耳をそばだてる騎兵の老馬のようである。氣遣わしいのは、伯の余命がもはや長くないことだ。自分にとっても伯は、日本における最初の知己の一人にあたる。

37・2・12条

○昨日、重体の川村提督のもとに呼び寄せられた。自分が往ったときは、すでにほとんど脈を感じない状態にあった。その夜のうちに死去。

37・8・12条

〔18北白川宮(能久)王子〕

○この数日のあいだ、北白川宮の病気の王子をたびたび見舞った。王子は一歳半の、まれに見る美しい幼児である。母君は、有識の誉れ高い大名の一族伊達家の姫君である。天皇の叔父君にあたる当主の宮は、およそ四十歳で、ちょうど維新の当時一八六八年には上野の寺で院主だった。宮はわずか二十五歳あまりで、將軍派により天皇に対抗して擁立されたが、のちドイツに派遣され、そこで完全な軍隊教育をうけて、大尉にまで昇進した。口ひげのある、全く西洋人のような外見の、上品な紳士で、優しくてもの静かで、「昔型」のよい日本人だ。おそらく宮は、いくたび自問されたことだろう——もし自分が天皇になっていたら、いまごろは何をしているだろうか。だがもちろん、そうなれば、今日の宮ではなかったはずだ。洋行もされなかったろうし、プロシア士官の鉄の試練も経験されなかったはずだ。

21・12・15条

〔19北島男爵(治房)令息夫人〕

○十八日午後、汽車で法隆寺へ行く。人力車で、すでに寺の近くまで来たとき、宮殿のような門から、上品な風采の、端麗な一人の若紳士が出てきて、車を止めてきいた——「寺をお訪ねになる外人の方というのは、あなたでいらっしゃいますか?」——「仰せのと

おり、寺へ行くところですが、お待ち下さる方があろうとは意外です」——「では、私の家へ紹介されていらっしやる、フランスのお方ででしょうか？」——「いいえ、そうじゃありません」——そこで、おもむろに話が始まったのだが、自分が、単なる旅行者以上の興味を抱いており、日本の事情に精通していることに気づくと、紳士はその家に立寄るように勧めた——「わたしの祖父にお会いになりませんか？　祖父は寺院と宝物に最も通じている人間です」と。名刺を渡すと、非常に優雅な、純日本式の邸宅へ案内された。間もなく、雪白の長いひげを蓄えた、体格のよい端麗、温厚な老人が現れた。老人はすこぶる鄭重にあいさつし、一瞬自分を凝視した——「ずいぶん以前にもう、お目にかかったような気が致しますが、もしや、あなたは、明治二十二年に、大隈伯が刺客に襲われて重傷を負ったとき、イギリス公使の派遣で、伯を見舞われたお医者さんではございませんでしょうか？」——「いかにも、それはわたしでした」——「では、そのとき、あなたを部屋に案内して、あなたが伯を診察されたとき、伯を腕に支えていたのがわたしです。」かくて旧交は温められ、話題は尽きなかった。しかしながら、困ったことには、相手が誰であるかが、自分にはどうしてもわからないのだ。なにしろ主人側の二人は、明らかに、自分がその名前を知っているものと思っているらしく、従って名乗らないからである。老人は、自分が仏教の歴史と芸術を本当に理解していることに気づくと、さらにいっそう打解けてきた。かれは、自分を日本式に床の上に坐らせて気の毒だといった。ソファがあるそうだが、あいにくのこと、家の病人が使っていると。それから老人は、自分を大きな庭に案内した（中略）。自分たちが、再び家の縁側にもどったとき、部屋の中から、美しい声が出た——「ベルツさんがいらっしやったのですか？」と。老人は、そうだとこたえた。すると、静かに障子が開かれて、自分は中へはいるように促された。そして、ソファに半身を横たえて、自分に会釈する婦人を見たとき、自分は誰の家に居るのかが、やっと判った。それは、一度見た者の、決して忘れることのできない顔であったからである。およそ二十年以上も前のことであるが、一人の婦人が自分のところへ、嫁を診てもらったために連れてきた。自分が日本で見た、最も美しい、目に立つ女の一人であったその婦人が、すでに嫁のある身であり、否、それどころか、祖母でさえあるとは、ほとんど信じられなかった。しかし、事実はそうだった。その婦人は、四十歳を越えていたが、

まだあまりにも若々しくて美しく、しかも元氣潑刺として、美しいトビ色の眼は利口に輝やく有様で、その後、長年のあいだ、婦人の姿がしばしば自分の念頭によみがえったほどである。十五年前、自分は再びその婦人であった。当時、婦人は肺を患っていたが、いま語るところによると、その後全快するにいたらなかった由である。今し方も、医者が来ていたそうであるが、自分が、親しく診察して参考に供することを申し出ると、婦人は感動のあまり、眼に涙をうかべる有様だった——「今日はなんといいあわせな日でしょう、あなたを家にお導き下さって」と。この家はすなわち北畠氏の自宅であったのだが、この北畠老は、かつて維新当時に一役を演じ、その功勞で男爵を授けられた人である。その昔、氏はある位の高い官職に就いていたが、政府と衝突した後、氏の一族が数代にわたって住んでいた、この土地に引退した。氏は古い大和貴族のヤマトノキミ一門であり、従って（氏自身は勇敢な軍人であったにもかかわらず）武士貴族を輕視している。十年この方、氏は奈良の美化、史蹟の保存、仏教の宗教史と美術史一般、特に大和におけるその歴史の研究に没頭している。氏はこの方面の第一人者であり、従って、その氏が自分に、いろいろな寺院の案内を申出たときは、すくなくならずうれしかった。氏は、あらゆる僧侶や神官のあいだに非常な威信があり、その人たちを、まるで部下のように命令して、普通は門外不出のものまでもすべて、自分に拜観できるよう取計らった。法隆寺におけるこの日の午後と、他の寺院と宝物をことごとく北畠氏から案内してもらったその翌日とは、生れて以来、自分にとって最も有益な日であった。今までに不明であった多くのことが、今ではわかるようになった。普通なれば、決して観られなかったはずのものまでも、いろいろ観せてもらった。仏教に関する幾多の新しい事がらが、明らかとなった。この機会に賢僧、高僧の面識を得たし、また由緒ある尼寺法華寺の客にさえなった。（中略）一日中、自分と寺めぐりをやって、なんの疲れも見せない七十三歳の北畠老の、驚くべき元氣さにはあきれざるを得ない。氏はその昔、盛んに柔術をやった。この柔術は、およそ身体を鍛錬する方法の中で、最上のものである。氏の夫人は、現在六十七歳である。夫人は病身のため、すでに久しい以前からほとんど外出しない。しかし、その優れた才色と貞淑さは今なお、到るところで、あらゆる人の語り草となっている。人違いからこの家へ紛れこんで、こんな満足と利益を得たとは、なんといい珍らしい幸運にぶつかったものだろ

う。自分が世間に知られている人間であることは、自分にとって實際都合なものだ。今日、再び博物館へ行くと、役員の一人が自分に近づいてきて、二十年以上も前に自分の治療をうけたことの礼を述べた。かれはその後、すっかり健康であるとか。

37・4・17、18条

〔21小松宮（彰仁）〕

○一昨日、老小松宮を診察するため呼ばれた。宮は脳出血による絶望的な無意識状態だった。ところで、外人の間では、また一部では日本人の間でも、宮が本当はもう亡くなられたのであって、ただ公けに発表しないだけのことだという昔風の考え方が起こっている。以前は高貴の人たちの間では、その死去をすぐには発表しない習わしがあったことは事実である。最初この風習は、将帥の間で起こったということだ。そんな人たちの場合こそ、非常時にその死を秘することの有利な点は十分考えられる。この風習で最初に挙げられるのは、神功皇后の良人が亡くなられた時である。ところが、だんだんとこの風習は皇族にも伝えられるようになった。例えば、北白川宮は一八九五年（明治二十八年）台湾で死去されたが、表向きは、東京に帰ってから亡くなられたことになっていた。そんな次第で、この小松宮の場合も同じように思ったわけだ。だからおかしかったのは、宮がまだ生きておられるのを、この眼で見えてきたばかりの自分に向けて人々が、宮の亡くなられたことは絶対に確実だと断言したことだった。だが、いずれにせよ、ながく持ちこたえられることはなからう。

36・2・17条

★翌二月十八日条に、その薨逝のことが記されており、そしてそれが直ちに公表されるとともに、五日間の服喪も定められた。さらに同月二十五日条に、神道式の盛大な葬儀が執行されたことが所見される。

〔22コルシエルト〕

○コルシエルト——かれは日本政府に、酒を米からでなく、大麦から造るという特筆すべき提案をしてこれにより大量の米を輸出に向けられるようにし、日本の貿易の不利なバランス・シートを改善しようというのだが——は気管支カタルの疑いがある。熱海に転地さ

せた。

12・2・22条

〔23 西郷侯爵・元帥・内相（従道）〕

○夜、胃癌で最近めっきり衰弱した気の毒な西郷元帥を見舞う。今日、元帥はその農場から帰ってきたのだが、あまりにも弱り方がひどいので、車中で万一を氣遣われたほどだった。

35・6・1条

○夜、再び西郷家へ、容体は思わしくない。絶えず黒いものを吐いている。

35・6・2条

〔24 25 末川夫人・令息〕

○末川夫人とその子供四人を診察。

13・7・13条

〔26 スクリバ博士〕

○今日、スクリバを診る。容体思わしからず。咳嗽^{がいそ}多く、右肺は重態である。それなのにかれは、平然と仕事を続け、多数の手術を行なっている。

37・12・8条

○自分個人にとっては、この正月二日は、うれしくない日だった。臨終のスクリバに付添って完全に徹夜したのだから。

38・1・2条

★翌一月三日に逝去したこと、二十三年間、お互いに親友であり、同僚であったこと、優秀な外科医であったこと、西洋医学を日本に紹介する点で抜群の功績をたてたこと、尽きざる努力、うまざる勤勉の人であったこと、等が当条に記されている。そして同月六日条に、盛大な葬儀が執行されたことが所見される。

〔27 ストルーベ駐日露国公使令息〕

○昨晚、非常に憤慨した。ストルーベ露国公使の生後二カ月の赤ん坊が泣き叫んで、軽い臍脱腸を起こしたのである。母親は在住外人のうちで、最も美しい女性とまではいえないにしても、確かに最も利口な女性である。かの女は半ダースもの外交官を自在に操っている。それでいて優れた母親であり、恋愛に劣らぬ才能で子供たち——四人の女の子——を養育している。もちろん、一緒に連れて

きた四人のヨーロッパの婦人から大いに手伝ってもらってはいるが。ところで、かかりつけのシュルツェ医師が不在なので、自分が呼ばれた。自分は絆創膏をはったのだが、夫人はすぐそれを懸念しだした。二日の後に、自分はそれを取除かねばならなかった。包帯をしろというのである。自分はその通りにした。ところが、それでもお気に召さなかったのである。そこで、興奮した夫人とちょっと口論した。あとで夫人は謝罪した。さもないと、実際のところ、二度と再び往診はしなかっただろう。そもそも、冷静で、日頃は実に利口な女が、盲目的な母親愛に夢中のあまり、あらゆる理性を無視し、もはや常識あるものとは思われなくなった場合、はたしてこれを驚嘆すべきか、あるいは人間の先天的な動物性の発露と見なすべきか？ もともと自分はこれを、子供が危険とみるや全く反射的に——無意識に——興奮する本能にすぎないと考えている。雌のシシヤネコも、この点に変わりはなく、やさしいメンドリですら怒るし、人間はといえば——正気を失う。今夕、赤ん坊は元気だった。結局のところ、昨日再びはった絆創膏は、別にさしさわりなかったようだ。

〔28 ストレート〕

○昨夜、クラブで、上品な一青年紳士が、拙文「死者の栄誉表彰」のことで、自分に話しかけてきた。かれはその英文訳を、どこかで読んだそうだ。かれの風采たるや全く、一段と洗練された近代的アメリカ人の典型だった——背の高い、やせた体つき、整った、きりっとした顔立ち、細いかぎ鼻、薄い唇の口もと、がっしりとしたあご。しばらくして、微笑しながらかれのいわく「あなたはおそらく、わたしをご存じありません？」と。「存じません」と自分はいった。「しかしわたしは、あなたをよく存じておりますよ、なにしろ十五年前、この東京でチブスの治療をして戴いたのですから。わたしの名前はストレートです」と。そこで自分も、やっとかれを思い出した。そのころのかれは、南ドイツで「極道者」^{エクスツーム}と称する種類の人間だった。情ないことにかれは、教養の高い優れた婦人で、結核の亢進していたかれの母親が、息子に立派な教育をうけさせるだけのお金をもうけるため、どんなに血の汗を流していたかを、てんで気にとめなかった。それが今、ここに気品の備わった、真面目な人物となって現われたのだ。ああ、せめてこの様を、

あの善良な母親に見せてやりたかった。

37・11・22条

〔29 副島内相（種臣）令息〕

○午後、家庭悲劇の立会人となる。日本の最も優れた政治家兼学者の一人で、高潔な人格により一般に尊敬されている副島（種臣）から、その一人息子のために診察を求められた。かれは威厳のある高貴な面差しの人で、ほとんどシナ人型（シナ）に近く、しかもそれなりに美しい顔立ちである。だが、今では老人であり、それも早老の方で、長いまばらの白ひげがある。令息は全く絶望状態に陥っている。肺を病み、もはや余命いくばくもない有様だ。一年前に熱愛する母親を失ったが、それ以来この十九歳の美青年はしだいにやせ衰えていったすえ、今年の初めになって急激に発病したのであった。善良な旧い型の日本人である父親は、その並々ならぬ悲痛を超人のように抑えることを心得ていた。時々、苦しげにその口元がかすかにけいれんしてはいたが、しかし自己を抑制し、静かながらもしっかりとした調子で語っていた。どうか息子の命をせめて数日か数週間のばすようにしてほしい——といわれた時、自分は全く同情にたえない気がした。あとでかれはいった「昨年、妻をなくしまして、それ以来は、子供だけが頼りで生きていたのです」と。おそらくは、さらにこういいたかったのだろう——今では、それさえ失うのです。だが、その自尊心がこの言葉をのみこみ、あえて悲しみを訴えなかった！ 気の毒な、世にも気の毒な父親よ！ このような場合、すべてを任せきった盲目的な信仰は、なんと幸福だろう！ だが、副島はかかる信仰を持たないし、かれは来世を夢みない。かれは哲学者であり、思想家である。かれは運命に服従する！

14・5・12条

〔30 伊達侯（慶邦）令息〕

○午後、岡 玄卿と一緒に、旧仙台の大名の六歳の病児を往診。この子は、ほとんどすべての大名の子供がそうであるように、至極虚弱に発育し、きゃしゃで、りこうだが、かんが強く、これは極度に愚劣な甘やかしによるところが多い。十数人という男女の召使が、子供をなでたりさすったりするよりほかには何もせず、気管支カタルやマラリアにかかったかわいそうな子供にとって危険至極

というよりはかはないような騒ぎを演じている。これが、従来すべての大名の子供の教育であったのだ。いや、それどころか、もっとひどかったそうである。だから、大名の間に気力のある人物がほとんど出ないのも、別に不思議ではない。

〔31田中子爵・宮相（光顯）夫人〕

○今朝、重病の宮相田中子爵夫人を往診。平和に関する風説のことを、田中子爵に述べた。子爵のいわく「さよう、平和は結構でしょう。しかし、それが一体、可能だとお考えですか」と。自分はいったーロシアはこの戦争で、ひたすら敗北を重ねてきたから、おそらく、たやすくは和睦できないだろうと。すると子爵は笑って「もちろん、そうでしょう。だが、いかにわれわれが平和を望んでいるからといっても、ロシアのために、わざわざ負けてやるわけには参りませんからね」と。それから子爵は、ウィルヘルム皇帝より日本の天皇への親電の英訳を、自分に見せたが、その内容は、大体こうだった「乃木將軍とその軍隊は、旅順において抜群の勇猛果敢さを發揮せり。陛下よ、朕と朕の軍隊の名において、朕の授与し得る最高の陸軍勲章、すなわち朕の祖宗フリードリッヒ大帝の制定に係る勲功章を、朕の賛嘆の徴として、乃木將軍に授与することを御聴許ありたし。ステッセルにも、該勲章は授与せられたり」と。最後の一句に、田中子爵は笑いながらいった「貴国の皇帝は、大変如才ない方ですね」と。そして子爵は、体の前で両手を、天秤の皿のように上下させたのである。

〔32タノスケ〕

○バイルのもとで昼食。食後、三田へ馬で患者往診。そこからさらに馬で、山や谷を越えて、目黒にあるバイルの別荘へ。（中略）自分がそこで出遇った事件は、今日の日を忘れられないものにする事だろう。土地の管理人はしっかりした男で、われわれ全部のお気に入りだったが、自分が着くと馬屋の方へ馬を連れて行ってくれた。十五分ばかりたった頃、一人の男が駆けつけて、管理人が卒倒したから、来てくれというのである。われわれが大急ぎで行ってみると、かれは他の男に抱かれて地上によこたわっていた。かれは、気分が悪いと訴え、家で寝ることにするといったそうさ。ところがその途中で、へたばってしまったのである。自分が見たとき

は、まだかすかに意識があった。自分がそうするように命ずると、かれは両手を動かした。従って半身不随ではなかった。だが自分に不安を感じさせたのは、かれの目立って青白い顔色だった。しかもそれが急激にその度を加えると共に、意識が減退していったので、自分は直ちに内出血で、それも致命的のもの、おそらくは胃の出血であろうと診断した。あとで調べたところによると、かれはおよそ一年前から胃潰瘍の徴候を呈していたらしいことがわかった。一分後に、かれは死んだ。ところで、最も哀れを催し、まさしく胸をかきむしられるようであったのは、かれの母親の態度である。か弱い白髪の老婆であるこの母は、息子が気を失って倒れたとの知らせに、あわてふためいて駆けつけ、悲痛のあまりかれの上に身を投げかけたので、これを引留めねばならなかったほどである。だが老婆は、か弱い女の身でこれに逆つてもがき立て、のたうちまわって泣き叫び、いとしいタノスケのそばへどうか寄らせてくれと、わめき立てるのであった。その有様は恐ろしいほどだった。まさに、子を奪い取られようとする雌ジシそのままである。いまだかつて自分は母性愛の野性的な力が、こうまで不可抗力的な勢いで発現するのを見たことがない。しかも日本でこのようなことがあろうとは、全く予期しなかったところである。この善良な老婆がその息子に、もはやどんなことをしても大丈夫との見きわめがついてから、われわれは老婆を放してやった。すると、またもやそこに恐ろしい光景が始まった。老婆は大事な息子の死体を抱きかかえて、それを荒々しくゆさぶるのであったが、その荒々しさたるや、これが他の場合であれば乱暴といえるかもしれないが、ここでは何よりも強い崇高な本能の最高の表現なのである。そうしながらも老婆は、金切り声で死人の耳にその名を絶えず叫ぶ——というよりは、むしろどなるのであった。そしてそのあい間にひざまずき、合掌した手を高く上げて、ぶつぶつとお祈りをした。それから再び死人の上に身を投げかけたが、それは相変わらずまだ生きているものと思いきや、こんでいるからであった。その有様は、全く腹わたをえぐるようだった。だが「涙で死人はよみがえらない」のである。自分はなきがらを屋内に移させた。ところがそこで、とうとう身内の人々に真相がわかったとき、その嘆き、悲しみたるや言語に絶していた。まるで死人を無理にでも生き返らせようとするかのように、一同が激しい鋭い声で「タノスケサン!」「タノスケサン!」と叫ぶのが、いつまでも、いつまでも響いていた。

〔33 田村参謀次長（怡与造）〕

○夜、赤十字病院に呼び寄せられる。病床の田村参謀次長は危篤の状態にある。折も折、今この將軍を失うことは、日本にとって非常に不運だろう。

36・9・30条

〔35 团十郎（市川一）〕

○今日、团十郎の葬儀。かれの死により日本は最も卓越した俳優、おそらくは古今を通じて最も偉大な俳優の一人を失った。かれの芸術は言語の拘束を超越して、およそ人間性の奥底にまで到達していた。团十郎の芝居を観ることを、日光や宮ノ下（箱根）の見物と同様に日本観光日程中に加えていた幾多の外人旅行者が、かれの演技にいたく感動させられているのを、しばしば見受けたものだ。かれの役は、がいして悲劇的と史劇的のものであった。昔の日本風に、外面は自制するという社会のおきてのもとで内部の心の動きを、単に身振りの上の暗示によってのみ表わすことにかけては、かれに及ぶものはなかった。なお、この团十郎は日本の社会生活に一時期を画した人物である。かれの青年時代には（ちなみにかれは六十六の年齢を保ったのだが）俳優たちはまだ全くさげすまれ、ほとんど人間社会の外に置かれている有様だった。かれらは「つまはじき者」^{アットハジキ}だった。团十郎の父から出た言葉に「錦を着ても畳の上の乞食」というのがある。つまり「金欄を身にまわっていても、われわれは社会の乞食にすぎない」というのだ。それが今日の葬儀には、日本最高の政治家伊藤侯が親しく参列していた。その上、侯は弔辞を朗読して、故人を当代の最も卓越した人物の一人であると称讃した。团十郎は、その階級を世人の眼前で、従来夢想だにしなかった程度に向上させたことを誇って可なりだ。近代において日本の社会的変革が、これほど明白に現われたことは、他にほとんど例をみない。ちなみに团十郎（あるいは市川团十郎とも呼ばれていたが）なる名前は「芸名」^{ノンド・ジヤウミン}にすぎない。本名は堀越と称した。しかし团十郎としては、かれはこの俳優家系の九代目にあたっていた。もっとも、そういっても、芸能が九代を通じて世襲的であったとの意味ではない。むしろこれら九代のうち、大部分は養子縁組によるものであった。すなわち、团十郎の一人に特別優秀な弟子があった場合には、その弟子に团十郎を襲名させたのである。ここに極めて

興味ある社会学上の問題、すなわち血統の相伝ではなく、養子縁組による技能の相伝という問題が存在する。自分は個人的の交際でよく團十郎に会ったことがあるし、また重症のかれを治療もした。かれはかっぶくがよく、顔は面長であったが、おもな日本人の型タイプでよく見受けるように、惜しいことに下顎突出プロゲナチーが全体の印象を著しく醜いものにしていた。

〔36 デニソン夫人〕

○デニソン夫人を往診、夫人もやっと快方に向っている。

13・7・13条

〔37 東宮・皇太子（嘉仁）〕

○堀内で電報に接した——皇太子が重体なので、すぐ帰京せよというのだ。

28・8・11条

○自今、日に二回、皇太子を診察することになる。高輪におられるので、毎日往復だけで五十キロだが、これは、この頃のようなひどい暑さでは、いささかこたえる。当分の間、帝国ホテルへ移ることにしよう。

28・8・12条

○皇太子は、だんだん快方に向っておられる。

28・8・21条

○九時より二時まで病院。それから、皇太子のもとへ、非常によろしい。四日前から平熱。

28・9・23条

○宮内省の急用のため、昨日帰京。ところが、その急用たるや何事だ？ 東宮の体重減少の原因を知りたいというだけのことだった。しかも、毎週出す自分の報告には、万事詳しく述べてあるというのに。本当に腹が立った。怒ったことを隠しもしなかった。宮内省で今後、もっと自分のことに気を配ってくれない限りは、勤めをやめさせてもらおうと、いつかの機会にはっきり言うておこう。

33・1・5条

○本日、葉山御用邸で東宮に関して、すなわちその健康状態が五月の成婚にさしつかえないか、どうかの点について、重大な会議があった。橋本、岡の両医に同意を表して自分は、わずかの懸念はあったが、さしつかえなしと述べた。懸念とは、体重が昨年程度にどうしても達しないことである。しかし天皇への報告では、この点にはっきりと触れてはならないことになっている。それは、誰

よりも天皇が、まず東宮の体重の増すことを望んでおられるからである。ところが伊藤侯や、有栖川宮や、側近の人たちは、もはやこれ以上成婚を延ばすことはできないという意見なのだ。それというのも、あらゆる東洋の風習とは全然反対に、東宮が成婚前に他の女性に触れられないようにすることに決定をみたからである。そんな次第で自分も、一般の事情や特殊の事情から見て、早い成婚が東宮に良い影響をもたらさだろうと思う。

33・3・23条

○今朝、橋本・岡両医と、当地の東宮のもとへ。東宮は、体重が気がかりでないこともない程度に減ってきて居られるが、しかし局所的には別段異状を認めない。そこで宮内省も、自分が十七日に出発、帰国することを承知した。

33・8・4条

○今日、東宮を診察するため呼ばれた。ヨーロッパへ旅立って以来、すなわち一年有余以来、最初のことである。東宮は、二週間このかた、急に目立って体重が減ってこられた。だから、体内のどこかで潜在的に病勢が進んでいるかもしれない懸念があるわけだ。顔は少しやせられたが、胸や肩の筋肉は力士のようである。——自分はいささか苦しい立場にある。東宮家では、はっきりと二つの勢力が対立しているのだ。驚いたことに橋本・岡の両医が、以前は東宮家の生活に関して合理的で斬新な意見を貫徹するためのもっとも有力な支持者は有栖川宮であると称していたのに、今ではその有栖川宮の専横ぶりと勢力の大きすぎることをこぼしている。もともと東宮は、幼時のご病氣以来おちついて一つのことと専念するのを好まれない性質なのだが、近頃はこれが旅行好きの形をとって現われてきた。特に東京を嫌われるのであるが、実のところ、次代の天皇が一年のうち少しの期間ぐらいいは首都ですごされるのは、なんととっても当然の話と思う。しかも今が、東京ですごされるのには至極好適の氣候なのだ。それなのに、東宮はどうしても葉山へ行きたいといわれるし、医師の側としては、このようなわがままなご希望を容れると、将来かれらはなんの権威もなくなってしまうだろうというわけである。ところで、有栖川宮はといえば、やはり葉山行きに賛成しておられるらしい——というのは、もう二十一歳の東宮に対して（自分の意見もそうだが）あまりにも堅苦しい医師の監督の束縛を、有栖川宮は断ち切ろうと思っておられるからだ。

事実、東宮が葉山へ行かれてはいけない医学上の理由はなんら存在しないのである——おそらく政策の上でのみ、東宮が東京に居られ

る方が賢明だというにすぎないのだろう——そんな次第で、いま自分は両派の間に立って困っているわけだ。 34・10・4条

○今日、東宮からお呼び出しを受けた——今回は単独で。理由はよくわかっていた。自分を動かして、葉山へ行かれるようにしようというお考えだ。介添えに有栖川宮も見えていた。そこで、次の月曜日にいま一度（あらかじめ体重を計った後に）橋本・岡西医と対診を行い、その際、もしよければ、葉山行きを承認するという事で妥協した。 34・10・5条

○三日前、葉山の東宮のもと、目方が再びふえてこられた。そこから宮ノ下へ。 34・10・28条

○フランス領インドシナの首都ハノイで、フランス政府が東洋学術会議に関連して、十一月十六日から二月十六日まで東洋博覧会を開催することになっている。（中略）しかし、しばらくの間は、この旅行もだめになりそうな様子だった。（中略）生母（二位局——引用者補）の病気がよくなるが早いかな、今度は東宮の不例が再び始まった。そして自分は、東宮が病気になる場合、いつでも奉仕することを約束してあるのだ。しかし今度は、運命の神も手心を知っていた。東宮の容体は快方に向ったのである。そんな次第で自分は（中略）十一月十五日ロイド汽船のゲラ号に乗船した。 35・11・15条

○夕刻、東京から電報——二十四日朝、東宮のもとで対診せよと。奈良の名残りはつきない。 37・4・20条

○朝八時、宮中で東宮対診。しごく良好。 37・4・24条

○午前、東宮のもと。ご機嫌すこぶるよし。かつてない元気で、明後日は沼津へ行かれる。六週間すれば、再び父になれるが、五年間にこれで四度目だ。 37・12・2条

○今朝、東宮のもとで対診。またもや頸部リンパ腺が腫れているのだが、その全治にはいつも数カ月かかる。確かに結核性のものだ。もし悪化すれば、マニラ訪問を、これで三度目のこと、延期せねばなるまい。 38・1・22条

○沼津に近い静浦に滞留中の東宮のもとへ。（中略）東宮は、冬の一部をここで過ごされる。この二、三週間前から東宮は、ご気分があまりよくなかった。またもや頸部リンパ腺が腫れているのだが、これは確かに以前の結核が、いまだに幾分か体内に潜んでいる証

抛だ。それで自分も、予定のマニラ訪問の旅を延期することになっていた。ところが、今では再び快方に向われたので、東宮大夫中山侯も岡侍医も共々に、もう旅に出て差支えないとの意向だった。

38・2・3条

○朝、東宮のもとで対診、容体はしごくよろしい。東宮は、一番末の皇子を天皇・皇后に初めてお見せになるため、沼津から上京されたのだ。皇子はこの東京におられたのだが、誕生後百日目にならないと、天皇・皇后はその皇孫に対面されないのである。いやはや、結構な風習だ！^{エチケット} それにしても東宮夫妻が、今では皇子たちを手もとにとどめておかれることができるようになったのは、なんといっても幸いだ。こうして、あの無意味な別居の風習も、とうとうなくなってしまった。東宮は、考古学に関する自分の研究に、すこぶる興味をいだかれ、長時間にわたり、いろいろと自分に質問された。

38・3・19条

○アルコ伯が、有栖川宮夫妻をお招きして、盛大な晩餐会を催した。宮夫妻は、ドイツ皇太子の成婚式に列席のため、近くベルリンへ出発される。(中略)晩餐会の最中に沼津から、東宮が高熱との電報に接した。わずか一週間前に、元気で丈夫な様子を拝見して喜んだばかりの自分にとって、この報道は全く寝耳に水だった。

38・3・25条

○六時の汽車で、橋本と沼津へ。奉天からロシアの捕虜が着くことになっている。それに、天気の良い日曜の朝なので、子供という子供は全部と、無数の大人が各停車場にたちならんでいた。(中略)沼津では、ちょうど捕虜を載せた一列車が停車しているのを見た。およそ八百人もおったと思うが、たいていは頑丈で栄養佳良の、好人物らしい、しかも決して愚鈍とは見えない連中で、奇妙に雑多な服装をしていた。(中略)沼津では、宮内省の馬車に迎えられ、二十分で静岡の御用邸に着いた。東宮は軽微なインフルエンザにかかっておられたが、元気で上機嫌だった。宮家の人々はほとんど全部、これにかかっている。昨夜は熱が高かったので、岡侍医が電報で、自分と橋本を呼び寄せたのである。しかし今日は、もう容体がよいので、自分も晩には再び東京へもどれる。沼津の町は、華やかな色彩の祝賀装飾に眼もくらむばかりであった。町では今日、その近傍一帯と共に、奉天の戦勝を祝っていた。

38・3・26条

○東宮御所へ。東宮は、先般の感冒の症状から、徐々に回復してこられた。側近の人々は、自分の出発まで、余すところわずか四週

間にすぎないのに、いささか驚いていたようだが、この日取りは、もう数カ月前にきめたものなのである。

38・5・13条

〔38 徳大寺侯爵・内大臣（実則）〕

○天皇のご依頼により、内大臣徳大寺侯爵を診察する。侯は引退を望んでいるが、お許しが出ないのだ。老侯は最近、ひどいインフルエンザ性肺炎にかかり、病気はもうなおったのだが、まだ衰弱が残っている。三十五年にわたるご奉公の後、侯が隠退したいのも無理はないことと思う。

37・4・24条

〔39 40 41 42 鍋島侯（直大）眷族（侯爵・侯爵夫人・侯爵令息・侯爵令弟夫人）〕

○夕刻、肥前の鍋島侯のもと。侯は夫人や今年六歳の令息と共に長らくロンドンに居った。皆よく英語を話す。比較的寒い気候の土地に相当ながら滞在した日本人はたいがいそうだが、侯もひどいせきに苦しめられていたが、今ではかなりよくなった。夫人の方にもっとひどかった。令息は可愛らしい元気な子供だが、このような両親の間に生れた子としての宿命的な性質を持っている。最近ひどい百日ぜきにかかったが、無事にきりぬけたので、ほんとうにうれしい。家族は自分にすこぶる感謝している。そこで今日、食事招かれたわけである。かつては最も有力な、そして今でもなお最も裕福な大名のうちの一人である鍋島家の邸宅は、東京で一番上流の住宅街である永田町にある。すばらしい陸や海のながめに恵まれ、和洋折衷の建て方で、調度類は非常に凝っている。堂々たるグラランド・ピアノまでが、手抜きなくサロンに備えつけてあるが、このピアノは、豪華な暮らしぶりであったロンドン時代から伝来のものである。侯はまだ若くて、三十二歳くらい、中背、やせ形、まばらな黒い総ひげのある柔和な顔付の人である。いまだかつて自分は、洋服姿いがいの侯を見たことがないほどで、その身のこなしたるや、大多数の日本人とは異り、全く板について、なんのあぶなげもない。しかもその上、大名としてはめずらしいことだが、粹である。侯には、小鍋島といわれている瓜二つの令弟があるが、その夫人を自分は永らく治療した。鍋島夫人は、今日は、ヨーロッパ風の夜会の盛装をしていた。いつも和服姿の夫人を見なれていたので、変った服装と髪飾りの夫人に、最初は全く気がつかなかった。外国の衣服をつけた夫人の姿は、日本の女性のす

べてと同様に、まるで人形のように固苦しく、ひ弱い感じがしたが、まんざら悪くもなかった。自分は夫人の相手役になって食卓に導き、英語でとても愉快に語り合った。侯夫妻は非常に洗練された社交振りを示し、しかもすこぶる感じのよい会話の才をみせていた、鍋島侯が鋭い観察眼をもっていることは、侯のヨーロッパに関するいろいろな話や批判からすぐわかった。侯は、とても多くの旅行をし、ほとんどドイツ全国をも知りつくしている。

12・7・9条

○鍋島侯の二人の子供（父侯爵の渡欧不在中、その健康を管理することになっている）を永田町に見舞う。子供たちを海水浴にやる。もし片瀬で暑すぎたら、日光へやるつもり。

13・7・13条

〔43二位局（中山慶子）〕

○午後二時、橋本より対診依頼。天皇の生母二位局を、胃病のため診察。天皇は局の実子である。しかし天皇の母皇太后——通例コウダイ・コウゴウといわれる——は前の天皇の後であるから、この皇太后に対し、天皇は子としての義務を尽さねばならないのである。

天皇は、年に数回、皇太后を儀礼的に訪問される。しかしながら、実母の家の敷居をまたがれることは、決してない。なぜなれば、実母は臣下であるから。もっとも、実母の方からは、あらかじめ許可を願い出て、許可を得たときは、天皇のもとに伺候することができる。奇妙な礼式エチケットの精華だ！

26・11・28条

○ここ数日、天皇の生母二位の局の病気で多忙。この天皇の母親は、もう永いあいだ気腫と萎縮腎を病んだすえ、今度は四日前から重い流感にかかっている。六十五の老体で、重体だ。まだ、完全にあきらめてはいないのは、自分だけである。

33・1・17条

○天皇の老母の病気で、自分は好運だった。肺炎に高熱で最悪の状態にあった時、自分は、病人があと二日もてば、いくらか希望があると、宮内大臣に答えておいた。ところが、これが天皇に誤って伝えられたらしい。二日の後、岡博士が報告のため参内すると、時計を手にした天皇は、すぐさま博士をさえぎって「よいよい、わかっているよ、局は助かったのだ」といわれた。あっけにとられて岡博士は、なんのことかわけがわからなかった。そこで、幾分もち直した模様ではございますが——と申しあげた。しかし天皇は

「あと四十八時間生き永らえれば、局は大丈夫だと、ベルツがいったのだ。ベルツには、それがわかっているのだよ！」といわれるのだ。岡博士は、そんなことをベルツはいっこうに申しませんでしたといった。しかし天皇は、どうしても自説を曲げられなかったところが、本当にそのとおり、容体がよくなったのである。

33・1・20条

○思いがけない喜び——三日前には天皇から、生母の病氣全快のお礼のしるしとして、一对の美しい銀の花器を贈られた。昨日は九条公と、未来の東宮妃である公の令妹から、しゃれた銀のタバコ・セットが届けられた。そして今日は勲一等瑞宝章と、予期以上に多額の賜金を受けた。この金は、学術上の目的の旅行資金にあてる考えだ。

33・5・9条

○数日京城に滞在して、北韓への研究旅行に出発する準備にとりかかったばかりのところへ、天皇からの電報で呼びもどされた。生母二位局にいのつばねが重体で、天皇は、全幅の信頼を自分ひとりにかけておられるというのだ。そこで、何もかも放っておいて、とりあえず、もよりの日本船をみつけ（仁川浦からの帰航船だが、全くひどい船だった）、十月三日下関に到着、汽車に乗り換えて、十月四日朝東京に着いた。宮内省の一役人が停車場で自分を出迎えて、天皇の名儀で早急の帰京に謝意を表した。ところが、生母の病氣がよくなるが早いか、今度は東宮の不例が再び始まった。

35・11・15条

〔44野津將軍・元帥（道貫）〕

○ドイツに留学し、今では著名な外科医であるドクトル橋本の来訪をうけた。野津將軍の対診を請われる。「もう肺空洞があるのです」と。すると自分はおそらく、死の宣告を確認できるだけのことである。

13・6・22条

○橋本と野津邸へ。左上部に急激な崩潰を伴う乾酪性肺炎を認める。本人は、体格強壯で、まだ良好な筋肉組織を保っている。ダボスならば助かるかもしれない。だがこの東京では、運命に任せるよりほかはなかるう。この国には高地の氣候療養所がまだない——自分は今以前から、それを設置させようとして大いに尽力したのではあるが——。箱根、草津、伊香保でもよいのだが、しかし医者が居ない。

13・6・23条

〔45 46 ハリス博士・元医師（ラザフォード）・令息〕

○今日、ハリス氏が、一時間半の道程の小涌谷から訪ねて来て、病氣の子供を診てほしいとのこと。断わりきれない。とにかく今日の予定は、湖水を通り、姥子湯うばこゆからさらに大地獄へ行くのだから、そこから小涌へ下ればよいわけだ。 37・8・22条

○興味ある患者に接する、イギリス人のドクター・ラザフォード・ハリスだ。かれはかつては医師だったが、ほとんど二十年この方、医術と縁を絶っている。現在は国会議員であり、百万長者を束にした大富豪であり、スタンダード石油会社その他多数の世界的大会社においてセシル・ローズの共同経営者である。かれは、英・米両国が次期公債の担保として、何を要求すれば一番よいかを探るため、目下当地に滞在がましい。少くとも、かれが自分に質問する事からは、すべてこの方面に向けられている。どうも自分は、多くの連中から、日本に関する情報屋のように思われているらしい。 37・11・25条

〔47 フェノロサ夫人〕

○今日八時、フェノロサ夫人往診。

13・7・13条

〔48 ブーグアン退役陸軍大尉〕

○市ガ谷監獄を訪れ、ブーグアン大尉に面会。かれのために、診断書を作ってほしいと、その細君が希望しているのだ。当局はこれを許可した。かれは久しい以前から、本当に肺病なのだが、最近は少し良いようで、肥えてもいる。獄中生活がかれの健康上危険であることは、自分も公明正大に証明することができる。 38・5・13条

〔49 古河（市兵衛）令息〕

○二日間、箱根におった。自分の治療で意外に経過のよい古河氏の令息が、帰京して差しつかえないかどうかを診断するため、湯本から呼び迎えられたのである。今日、令息およびその兄陸奥伯と一緒に帰京した。 37・9・10条

〔51 前田侯（利嗣）〕

○本来なら今日は、宮ノ下へ行つて静かに勉強するつもりだったが、旧加賀の大名前田侯が重体で、鍋島家の娘である侯の夫人と、侯の姉妹にあたる有栖川宮妃から、行かないように頼まれている。だが残念ながら、病人はごく望み薄である。

33・6・12条

★同月十四日条に、当日前田侯が薨逝したこと、この実兄を喪つた有栖川宮妃が傷心状態にあつたこと、そしてそれをベルツが痛く氣遣つていたこと、等が記されている。

〔52 松田東京府知事（道之）〕

○松田東京府知事死去。かれは胃癌と肝臓癌を病み、一カ月前に自分が初めて診察した時は、もはや絶望である旨、その近親や友人に宣告せねばならなかつた。小柄できゃしゃな体つきの、快活な美男子で一般に好感をもたれ、府知事という面倒な役にはうってつけだった。夫人はこの国で最もインテリな女性の一人だ。夫人は心から夫を愛していたが、あれほどの愛情をその夫に寄せている日本の婦人も珍しい。先日、夫人をみた時は痛ましかった。苦惱にうちひしがればかりの有様で、眼には一杯の涙をうかべていたが、なおかつ取乱さないで、品位を保つことを忘れなかつた。それどころか、夫君が見ている間は、涙でその運命を案じさせないために、微笑をすらすらたえていたのである！ われわれヨーロッパの婦人も、どうかこの点で日本婦人をお手本にし、泣きはらした眼とか、いわんや、すすり泣きなどにより、重体の身内のものにその運命をはっきり悟らせるようなことのないように願いたいものだ！

15・7・6条

〔53 陸奥伯爵・外相（宗光）〕

○外相陸奥伯のところへ。注意しておいたにもかかわらず、伯は大磯から帰京したので、再び発熱し、あらたに肺と腸に症候がある。

28・9・23条

〔54 毛利先公（敬親）未亡人〕

○今日、毛利公（長州の前領主）の家庭で、先公未亡人の「床上げ」（全快祝い）という非常に興味のあるお祝いに列席した。七十五歳

になる才色兼備で名高いこの未亡人は、昨年の暮、中風・眼炎その他の病気に加かった。予後を比較的有利に診断したのは自分ひとりだった。幸いにも、それが正しかったので、自分はこの家では人気がある。日本では、床（フトン）を上げる時、すなわち病人がもはや床に就いている必要がなくなった時、知人を招いて盛大なお祝いをする。今の場合もそれなのであった。西洋人である自分がこれに招待されたのは、特別な光栄と思わねばならないわけだ。毛利家の全員列席で、かなり多人数だ。これは現公の数人の弟がそれぞれ妻帯しているためである。その他なお、近親以外に伊藤侯、井上伯爵、杉子爵、池田男爵、野村子爵などすべて旧長州の人々及び家族の親しい友人たちが出席していた。（中略）宴は四時から十時まで続いた。帰途についてから、今夜は日本で過ごした最も楽しい夜の一つであったことが、はっきりわかった。

33・5・26条

〔55 山県伯爵・首相・元帥（有朋）〕

○夕方、汽車から直接に、ほど遠く離れた首相山県伯の別荘へ。首相が発熱中にもかかわらず、天皇による議院閉院式に出席してもさしつかえないか、どうかを決めねばならないのだ。出席をとりやめるように勧めた。

24・3・7条

○今日、山県元帥を対診した。もう久しいあいだ病気で、今度の戦争には、ただ助言する程度で関与しているにすぎない。元帥は伊藤侯、松方伯、井上伯と共に生き残り組の「元老」、すなわち「老人の顧問」を構成している。

37・2・13条

〔56 山田伯爵・司法相（顕義）〕

○午後、山田伯の全快祝いに出席。伯は重い肺壊疽はいえそから、驚くほど見事に回復した。以前よりも血色がよく、肥えており、自身ではすっかり健康だと思っているが、もちろん、まだそうまではなっていない。伯は今日、芸者入りの盛大な宴を張ったのだが、この宴で自分は花形だった。最後に、出席者は自分を胴上げした。

25・3・25条

〔57 大和子爵（山尾庸三）〕

○午後、大和（山尾？）老子爵を診察。自分の家の近所にある多数の貴族の大邸宅がことごとくそうであるように、子爵邸も兵士で一

杯だ。

37・12・13条

○病気の山尾伯爵（山尾子爵？）のもとで、旧伊予の大名の子息である広沢若伯爵にあう。伯は今年の七月のこと、旅順がその月中に陥落するかどうかは疑問であると、自分がいったので、すんでのことに立腹するところであったことを思い出した。

37・12・18条

〔58 李容翊〕

○今日、興味ある対診。李容翊は韓国で最も勢力のある人物だが、それだけに敵も多い。（中略）かれは再び韓王のもとで最も勢力ある人物となっていた。しかしながら、もしロシア側で、かれによって何よりも強固な足場を得たと信じていたのなら、それは当て違いだ。翊は日本側と結びついたのである。ところでひと月前、ドクトル・ブンシュが自分と一緒に金剛山に出かけていた間に、翊はひどい丹毒におかされたが、ブンシュが間に合わないので、日本の和田海軍軍医の病院に運ばれた。そこでまだ危険状態を脱しなかったとき、かれを病院もろとも爆破しようと企てたものがあつた。この暗殺計画は失敗におわつたが、翊はそこで自宅に移された。しかし容体は相変わらずよくないので、ドクトル和田は、自分に診断を求めたのである。李容翊は王宮の近くの横町に住んでいる。（中略）本人は床に敷いたふとんの上に寝ていた。かれは、とても頑丈な体格の男である。以前はすこぶる太っていたそうだが、今は重い病気でやせ衰えている。顔は長くて細く、かなり品があり、ほとんどヨーロッパ人みたいだが、これは特に、鼻が高く細く、白髪まじりのひげが顔一面にかなり多いせいだ。手は目立って美しく、細くて白く、全く貴族的な感じがする。かれがかつて苦力であつたという説を、信ずる気にはなれないくらいだ。かれの容体は安心できないが、しかし、大勢いる敵のうちで、かれの食べ物にまんまと一服盛るものでも現われて来ない限り、大丈夫だと思ふ。

36・6・24条

四

『日記』は明治九年より同三十八年までの約三十年間に亘る記録である。年度別の記載条数と所用行数との双方において、ともに最も卓越する年次は明治三十七年であり、これに次ぐのが同三十八年である。これは主として明治三十七年に勃発し、翌三十八年に終熄する日露戦役時における我国内外の政治・経済・社会・文化等に関わる諸般の動向・情勢・情況等を巨細に伝える記述を多有することに拠るのである。この意味において『日記』、中に就き、その明治三十七・三十八両年次の記事は、一在留（お雇い）外人の観た日露戦役裏面史と評しうるだけの充分な内実を具備しており、量質両々相俟って全く他の追随を許さぬ極めて貴重な記録史料といえるのである。こうした『日記』について、その内容と性格とをより能く理解するための一助とすべく、『日記』に記載する諸種の記事のうち、とくに固有名をもつ某人物についての(1)「発言・言説記事」と、(2)「診察・診療記事」とを精査討究して、(1)につき、㊶、より多くの所見条数を有する人物はクロパトキン陸相・総司令官であり、以下、伊藤参議・伯爵・侯爵（博文）↓ウィルヘルム二世独国皇帝・ハナ（ベルツ令妻・荒井花子）の順に続くこと。㊷、多くの所見条数を有する諸人物中、とくに「対ベルツ発言・言説記事」の所見条数を最も多く有するのは伊藤参議・伯爵・侯爵（博文）であり、これに次ぐのがハナ（ベルツ令妻・荒井花子）であること。つぎに(2)につき、㊸、より多くの所見条数を有する人物は東宮・皇太子（嘉仁）であり、これに次ぐのが二位局（中山慶子）であること。これら両者は共に皇族であること。そしてこうした(1)(2)両記事にあつて、多くの所見条数を有するのは、㊹いわゆる時局の人として令名を馳せた人物か、あるいは、㊺記主ベルツと特に深い関わり合いを有した人物か、はたまた、これら㊹㊺双方の内容と性格とを併せ持った人物か、の孰れかであり、その孰れであるにしても、それら諸人物中、クロパトキン陸相・総司令官、ウィルヘルム二世独国皇帝の両者を除けば、他はすべてベルツが親しく面謁ないし面談した人物ばかりである。実は、こうした人々との邂逅により、初めて在留外人ベルツ

が榮達することを得たのであった。すなわち彼の永い在日期间中における最大の支援者・協力者として、外にあって陰に陽に激励し、助力することを惜しまなかった為政者伊藤博文があり、内において献身的に内助の功を竭した令妻ハナがあったのである。そしてベルツをして皇室——とくに東宮・皇太子（嘉仁）、二位局（中山慶子）等への拜診——に深く関わらしめたのは岩佐 純と橋本綱常であった。すなわち岩佐 純は、明治二年に医学校取調御用掛を拜命するや、相良知安と共にドイツ医学の採用を主張し、明治五年以降、天皇の侍医を勤め、ベルツを推薦して医学上の講義を宮中で行なわしめた。これがその後におけるベルツと皇室との深い結びつきの始めであった。次いで皇太子嘉仁の健康状態を憂えた侍医橋本綱常の進言によってベルツの意見が採用され、それが効果を上げて、ベルツは天皇はじめ宮中の人々の深い信任を博することとなったのである（石橋長英・小川鼎西氏 お雇い外国人——医学一二五頁）。

ところで上記の岩佐 純は、ベルツより十三才年長であるが、【自分が指導している岩佐 純侍医から、日本式の大宴会に招かれた。】（『日記』¹³ 3・19条）とあるように、彼はベルツに教えを受けたこともある。一方、橋本綱常は、ベルツより四才年長であり、明治十一年より東京大学教授となり、爾後、宮中顧問官・皇太后宮拜診御用等を歴任し、ベルツに

【おそらく日本人のうちで、自分にとって最も忠実な知己】（『ベルツの日記』¹³ 下巻 四一四頁）と評された人物である。こうした経緯によってベルツは、東宮・皇太子（嘉仁）及び二位局（中山慶子）を拜診するようになり、爾後、これら両者への診察・診療行為を通じて天皇の絶大な信用・信頼を勝ち取るに至ったのである。明治三十三年五月九日には勲一等瑞宝章を授与され、さらに同三十八年六月九日には将に帰国の途に上らんとするを以て、謁を宮中鳳凰の間に賜い、とくに「卿我が国に在ること多年、独り我が医学に裨益する所尠からざりしのみならず、又毎に侍医の高議に与かりて大に力を竭し、は、朕の深く感謝する所なり。」（『明治天皇紀』当該条 第十一—一六八頁）との優渥なる勅語を賜わっている程である。

かくしてベルツは、上記のような人々と邂逅し、その知遇を得て博大な支援・後援・引立・協力を受けることになり、

そしてこれによって己が身の栄達を遂げ、盛名を馳せることとなったのである。

ところで、彼をしてそうせしめたのは、彼自身が、医師として類稀な資質を有するとともに、学究者として倦まざる探究心、教育家として撓まず求める向学心・向上心・自戒心、そして何はさておき、人間として接した人に好感を持たれ信用され信頼される誠実な為人、等々といった多種多様の美質に恵まれた高邁な人物であったことのほかに、とくに【今日、帝国ホテルへ引越す。自分の帰国が知れわたると、東京は医者にとって、素晴らしく有望な所だと空想して後任志願者がどっと押しよせて来た。それというのも、従来は、スクリバと自分とマクドナルドがおったのに、今では三人とも全部いなくなったからと、思っているのである。だがしかし、この胸算用は間違っている。スクリバと自分は、市内で開業していなかった。しかもわれわれが診察の方をやっていたのは、われわれの大学における地位、長いあいだ日本に在留している点などから起こったことであって、一方完全に開業していたマクドナルドはといえば、それだけでは、ほとんど生計を立てかねる有様だった。】【日記^{38:2,25条}】とあるように、彼が日本に永年在留し（明治九年の渡日より同三十八年の離日までの通算約二十九年間、但し、その間に、明治九年より同三十五年までの通算約二十六年に同十七・二十五・三十三の各年にそれぞれ約年間ずつの賜暇帰国期間あり。）、その期間の大部分（明治九年より同三十五年までの通算約二十六年に同十七・二十五・三十三の各年にそれぞれ約年間ずつの賜暇帰国期間あり。）を東京医学校、改組改称されて東京大学医学部に勤務し、そこでそれ相当の地位を保持し来たったことに、その因由が求められるべきであろう。そして彼は、己の栄誉栄達を齎らす上に大きく関わった、その診察・診療行為を通じて医師として、また人間として自らをより一層大きく成長発展させていくことが出来たのであった。この意味において、『日記』に所見される発言・言説、診察・診療記事のうち、とりわけ後者の「診察・診療記事」を以て、記主たる彼が医師として、また人間として、より一層大きく成長発展していく姿の一齣一齣を如実に語り示す証跡と判釈することも可能であろう。

以上、『日記』の内容と性格とをより能く理解するための一助とすべく、『日記』に類見される発言・言説、診察・

診療向記事を精査討究して、新たに知りえた私見を若干開陳してみたのである。(了)

『ベルツの日記』（岩波文庫本）所載人名索引

ア

- ○ アイシン家令息 37.4.12, 37.4.16
- ◎○ アイゼンデッヘル独国代理公使 9.6.26
- ☆ ◎○ 青木周蔵子爵・駐独国公使・外務次官・外相
9.1.3, 22.3.2, 24.5.29, 33.4.20, 36.4.27,
☆ 37.9.26, 37.11.12, 37.11.20, 37.12.4
- ☆ ◎○ 青木周蔵子爵・駐独国公使・外務次官・外相令嬢（ハナ）
☆ 37.11.12, 37.12.15, 37.12.19, 38.1.22
- ○ 赤星（樺山伯爵義兄弟）
秋元子爵（興朝） 22.5.6
秋山 『二六新聞』 主筆（定輔） 37.4.1
- 足立 寛博士 25.8.28
アーチバルド 37.11.5
- ◎○ アッダ侯爵夫人 37.11.6
アッチラ 38.5.12
- ◎○ 淳宮（雍仁） 37.2.12, 37.6.18, 37.10.9, 38.3.26,
38.3.31
- ★ ○ アネタン外交団主席 37.10.28
アマリエ 12.6.29
有栖川宮（熾仁） 10.2.26
- ☆ ● ◎ ○ 有栖川宮（威仁） 33.2.8, 33.3.23, 33.5.9, 34.9.16, 34.10.4,
34.10.5, 38.3.25, 38.3.28, 38.3.29,
☆ 38.7.19
- ☆ ◎ ○ 有栖川宮妃（慰子） 33.6.12, 33.6.14, 34.9.16, 38.3.25,
☆ 38.3.29, 38.7.19
アルコ伯爵・駐日独国公使 → ヴァレー伯爵・駐日独国公使
- ☆ ◎ ○ アルマン駐日仏国公使 28.11.18, 37.2.5, 37.2.23, 37.12.19,
☆ 38.1.11

◎	アレキサンダー二世露帝	13.2.23
★ ◎	アレキシェフ極東総督	36.9.30, 37.1.6, 37.2.5, 37.2.10, ★ 37.2.11, ★ 37.2.13, <u>37.2.19</u> , 37.2.27, 37.4.24, <u>37.5.7</u> , 37.5.10, 37.7.20, ★ 37.9.29, 37.10.3
◎	アレクサンデル公	37.1.19
◎◎	アレン駐韓米国公使	36.4.30
◎◎	アレン駐韓米国公使夫人	36.4.30
	アーレンス	9.11.30
	阿波侯爵 (蜂須賀茂韶)	12.7.12
	アントニオ写真師	35.12.30
★ ◎◎	アントン親王	37.9.26, 37.9.27, <u>37.10.9</u> , <u>38.4.28</u>
イ		
○	飯塚アリス	38.1.22
	井伊直弼	35.4.12
	家康 (徳川 一)	38.4.26
	イーガン通信員	37.7.3
☆ ○	池田男爵・医学部長 (謙齋)	10.5.14, 10.10.5, 14.6.21, <u>33.5.26</u> , 35.4.2
	石井 (房州勝山魚屋)	35.3.1
☆ ○	石黒男爵・軍医官 (忠憲)	35.4.2, <u>38.5.30</u> , <u>38.6.7</u>
☆ ○	石本將軍・陸軍次官 (新六)	★ 37.3.24, ★ 37.6.7, 37.11.29
☆ ◎◎	イスヴォルスキー駐日露国公使	★ 33.6.6, <u>34.10.28</u> , <u>35.1.1</u> , 35.1.30, <u>36.2.1</u> , <u>37.2.7</u> ,
☆ ◎◎	イスヴォルスキー駐日露国公使夫人	★ 33.6.6, <u>36.2.1</u>
●◎◎	板垣元参議・自由党総理 (退助)	<u>15.10.12</u>
○	一井 (草津一有力者)	37.9.22
◎◎	伊東提督 (祐亨)	34.10.28, <u>38.1.5</u> , <u>38.6.5</u>
☆ ◎◎	伊藤参議・伯爵・侯爵 (博文)	16, <u>22.4.15</u> , <u>22.10.18</u> , 22.10.27,

- 24.5.18, 24.6.2, 33.2.8, 33.3.23, 33.5.9,
33.5.26, 33.6.6, 33.8.15, 34.9.8, 34.9.15,
35.2.17, 35.2.21, 36.9.20, 36.10.12,
36.12.12, 37.1.1, 37.2.5, 37.2.13, 37.3.6,
37.3.16, 37.3.18, 37.4.6, 37.9.27,
37.10.13, 37.11.19, 37.12.8, 37.12.17,
38.1.25, 38.2.5, 38.3.17, 38.6.9,
- 伊藤参議・伯爵・侯爵（博文）令母（琴子）
36.10.12
- 伊藤参議・伯爵・侯爵（博文）令尊（十蔵）
25.8.28
- ☆ ○ 伊東巳代治男爵 37.1.19
- ☆ ○ 伊藤勇吉（博文養嗣子・博邦） 37.6.27
- ◎○ 井上伯爵・大蔵大輔・外務卿（馨） 12.11.3, 14.5.19, 16, 22.6.25, 22.10.18,
22.10.27, 24.6.6, 25.3.12, 33.5.26,
33.8.15, 34.9.8, 34.9.16, 35.4.2, 37.2.5,
37.2.13, 37.5.27, 37.12.8, 37.5.27
- 井上角五郎代議士 33.6.5
- ◎○ 井上子爵・文相（毅） 26.11.27, 27.3.19, 38.3.17
- ◎ 井上子爵・文相（毅）未亡人 38.3.17
井上子爵・文相（毅）令嬢 38.3.17
- 入沢達吉教授 38.2.7
- ★ ◎○ イリス 37.11.6, 38.4.13, 38.4.15
- ★ ◎○ イリス夫人 37.11.6, 38.4.15
- ☆●◎○ 岩倉公爵・右大臣（具視） 16
- ☆ ○ 岩倉公爵・右大臣（具視）令息 16
- ☆ ○ 岩倉公爵（具定） 38.3.28
- 岩佐 純侍医 13.3.19
- 岩崎男爵（久弥） 37.10.29, 38.3.11
- ◎ 岩崎男爵（久弥）令尊（弥太郎） 37.10.29

インゲノール 35.4.18

ウ

ウィッテ 38.2.4

ウィットゲフト提督・旅順艦隊指令長官
37.8.14

ウィットボーイ 37.10.23

○ ウィルソン米国公使館一等書記官 37.8.2, 37.10.31

★ ◎ ウィルヘルム二世独国皇帝 33.6.18, 33.7.10, 33.7.14, 33.8.1,
33.8.20, 33.9.5, 36.1.27, 37.1.19,
37.2.20, 37.5.12, 37.5.26, 37.6.2,
37.7.15, 37.7.17, 37.7.20, 37.9.11,
37.9.29, 37.11.15, 37.12.11, 38.1.11,
38.1.24, 38.1.27, 38.2.11, 38.2.16,
38.2.26, 38.3.25, 38.3.27, 38.3.29,
38.5.12, 38.7.19

ウィルヘルム二世独国皇帝皇太子 38.3.25, 38.6.5

★ ◎ ウェーデル伯爵・駐日独国公使 33.6.6

ウェーデル伯爵・駐日独国公使子息 38.3.10

ウェーベル駐韓露国公使 36.4.27, 36.6.24, 36.7.4, 36.9.18

ウェーベル駐韓露国公使夫人 36.4.27

★ ○ ウェルニツヒ博士 9.6.9, 9.11.15, 9.11.25

ウォルター 36.5.12

ウォルフスケール伯爵 37.7.18

◎◎ ウタ (ベルツ令嬢) 26.8.17, 26.8.21, 26.12.24, 26.12.25,
26.12.29, 27.7.25, 27.9.8, 28.12.24,
29.2.28, 29.3.1, 29.3.2

★ ◎ ウチトムスキー公爵 37.7.3

◎ ウラジミル大公 37.10.1

◎ ウルズリー卿 37.9.19

ウンゲル造園師 37.7.15, 37.11.15

エ

- 衛満 36.6.10
- エッケルト楽長 13.6.2
- ◎◎ エッケルト男爵 36.3.16, 37.10.16
- ◎ エッツェル少佐・独国公使館付武官 37.3.2
- エドモントン卿 37.5.26
- ◎◎ エドモントン卿夫人 37.5.26
- ◎ エドワード七世英国皇帝 37.5.26, 37.6.9, 37.6.29, 37.7.17,
37.11.10, 38.3.29
- エドワード七世英国皇帝皇后 38.3.29
- ◎◎ 榎本子爵・外相（武揚） 24.5.18, 24.5.29, 25.3.16
- 榎本子爵・外相（武揚）令嬢 25.3.16
- ◎◎ エヴァンス提督 35.5.2
- ◎◎ エフラール 37.1.18
- 江馬賤男博士 22.7.12~18, 25.8.28
- ◎ エンクイスト提督 38.6.23
- 袁世凱 37.11.16

オ

- 大木文相（喬任） 24.6.2
- ★●◎◎ 大隈伯爵・外相（重信） 14.6.21, 21.12.15, 22.4.27, 22.10.18,
22.10.27, 36.12.17, 37.3.16, 37.4.1,
37.4.6, 37.4.17~18, 37.10.9, 38.2.16,
38.3.27
- ○ 大隈伯爵・外相（重信）夫人 22.10.18
- 大倉（喜八郎） 37.6.16
- ◎◎ 大谷法主（光尊） 25.9.1, 33.2.17, 33.2.20
- ○ 大谷法主（光尊）令息 25.9.1

- ◎○ 大谷法主（光尊）令嬢 25.9.1
- ◎○ 大谷伯爵（光瑞） 38.4.26
- ◎○ 大谷伯爵（光瑞）夫人 38.4.26
- ★ ◎○ 大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥（巖）
15.8.25, 33.2.8, 37.2.5, 37.6.25,
37.8.8, 37.8.13, 37.8.19, [★]37.9.4,
37.9.25, 37.12.2, [★]38.3.12
- ◎○ 大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥（巖）夫人
15.8.25
- 大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥（巖）夫人
33.8.3
- ☆ ○ 岡 玄卿博士・侍医
12.4.2, [★]33.1.20, 33.2.8, 33.3.23,
33.8.4, 34.10.4, 34.10.5, 37.2.12,
37.12.2, 38.2.3, 38.3.25, 38.3.26,
[★]38.5.28, 38.6.3, 38.6.6, 38.6.9
- 岡沢陸軍大将（精） 37.6.7
- ◎○ 小鹿島夫人 22.3.2
- 緒方正規教授 34.11.22
- ☆ ◎○ 岡部子爵（長職） 37.4.22
- ☆ ◎○ 岡部子爵（長職）令母 37.4.22
- ○ 岡部子爵（長職）令嬢 37.4.22
奥陸軍大将（保鞏） 37.6.20, 37.7.10, 37.9.5
- ◎ オステン 12.3.1
- オストワルト牧師 38.1.22
- オストワルト牧師夫人 38.1.22
- ☆●◎○ オズーフ大僧正 36.2.1, 37.1.18, [★]38.2.14
巖女官 36.4.27
オルガ大公妃 38.2.8
- ☆ ◎○ オルコット師 22.3.7

カ

- ◎ カイザー 38.2.26
- カウルバース 38.1.20
- ☆ ◎○ ガガルニ駐長崎露国領事 36.9.26
- ◎○ 香川子爵・皇后大夫（敬三） 38.6.9
- カーウッド英国公使館員 33.4.20
- 笠原光興京都医科大学教授 38.4.13
- ★ カーゾン卿・印度総督 37.10.12, [★]37.10.23
- ★ カタリーナ独国女帝 [★]38.1.28
- ☆●◎○ 桂伯爵・首相・将軍（太郎） 28.9.23, 34.9.16, 35.2.13, 36.3.16,
36.9.15, [★]36.12.24, 37.1.27, 37.2.6,
[★]37.9.27, 37.11.20, [★]37.12.15, [★]38.1.5,
[★]38.3.12
- ◎ 加藤清正 38.4.26
- 加藤前駐英国公使（高明） 33.4.20
- 金岡（巨勢 一） 38.4.26
- 金子男爵・前法相（堅太郎） 34.9.8, 37.2.9
- 嘉納（治五郎） 36.12.12
- ◎○ 樺山伯爵・海軍大将（資紀） 22.10.27, 37.11.19
- ◎ カピュー農林部長 35.12.18, 35.12.30
- ガビンズ英国公使館書記官 37.5.24, 37.10.16, 37.10.31, 37.11.5
- ◎○ カプルタラ印度大王 36.11.13, 36.11.26, 36.12.27
- ◎○ カプルタラ印度大王妃 36.11.13, 36.11.26
- ガポール司祭 38.1.24
- ◎ 上村提督（彦之丞） 37.6.27, 37.6.30, 37.7.3, 37.8.14,
37.8.15, 38.1.5
- ◎○ カール米国女流画家 37.8.2
- 川上（音二郎） 36.12.17
- 川上貞奴（小熊 貞） 36.12.17
- ◎ 川上将軍（操六） 37.10.13

川口師・仏教僧	37.10.1
○ 川端玉章	38.5.27
●◎○ 川村伯爵・海軍中将（純義）	34.9.16, 34.9.28, <u>37.2.12</u> , 37.6.18 <u>37.8.12</u> , 37.10.9
◎ 川村伯爵・海軍中将（純義）夫人	<u>37.2.12</u>
○ 川村伯爵・海軍中将（純義）令息	37.6.18
◎ 川村伯爵・海軍中将（純義）令嬢	<u>37.2.12</u>
◎ 河鍋暁斎	12.10.20, <u>22.4.26</u>
閑院宮（載仁）	36.1.2, 38.6.5
閑院宮（載仁）妃	38.6.5
◎ 韓国皇帝（光武）	33.6.6, <u>36.4.27</u> , 36.5.5, 36.6.24, 36.7.4, 36.9.18, 37.1.6, 37.1.8, 37.1.19, <u>37.2.9</u>
◎ 韓国皇帝（光武）王子	<u>36.4.27</u>
◎ カンボン仏国公使館一等書記官 桓武天皇	<u>37.12.19</u> 38.4.15

キ

◎ 菊五郎（尾上 一）	<u>12.3.1</u>
○ 菊池文相（大麓）	34.11.22, 35.7.10
北里柴三郎	35.4.2
◎○ 北白川宮（能久）	<u>21.12.15</u> , 36.2.17
○ 北白川宮（能久）妃	21.12.15
●◎○ 北白川宮（能久）王子	<u>21.12.15</u>
北白川宮（成久）	38.6.5
☆ ◎○ 北畠男爵（治房）	[☆] <u>37.4.17~18</u>
☆ ◎○ 北畠男爵（治房）夫人	[☆] <u>37.4.17~18</u>
● ○ 北畠男爵（治房）令息夫人	<u>37.4.17~18</u>
☆ ◎○ 北畠男爵（治房）令孫	[☆] <u>37.4.17~18</u>
◎ 吉永洙	<u>37.3.8</u>

	木戸侯爵（孝正）	37.10.9
	木戸孝允	38.4.15
	キューネ中尉	33.6.22
○	ギンテル経理官	36.11.13
○	ギンテル経理官夫人	36.11.13
	桐野（利秋）	10.10.4
◎○	ギールケ解剖学教師	12.4.2, 12.10.26, <u>13.6.22</u>
	キルヒホーフ提督	34.10.28
○	金 通訳	36.6.10
● ○	ギン	<u>33.4.17</u>

ク

	九条公爵（道実）	33.5.9
☆ ◎○	九条姫・東宮妃（節子）	33.2.11, <u>33.5.9</u> , 33.5.10, <u>34.9.15</u> , 34.9.16, <u>37.1.1</u> , 37.2.12, 37.10.9, 38.3.19, 38.4.26, <u>38.6.6</u>
☆ ◎○	クナッペ博士・駐上海独国総領事	<u>36.1.22</u>
☆ ◎○	クラウゼ博士	<u>34.9.20</u>
	グラックス兄弟	29.3.2
	グラント将軍	12.7.6, 12.7.8, 12.7.12, 12.8.4
☆ ○	グリスコング駐日米国公使	38.5.27, <u>37.7.29</u>
◎○	グリスコング駐日米国公使夫人令母	<u>37.11.5</u>
	グリッペンベルグ司令官	37.9.28, 37.10.1, 38.1.20
	栗野前駐露国公使（慎一郎）	37.1.19, 37.12.17
○	クリューガー馬尼拉領事	33.8.4
○	クリューガー馬尼拉領事夫人	33.8.4
	クリューゲル大統領	37.2.20, 37.5.12
○	クリーン	13.6.22
	来島恒喜	22.10.18
☆ ◎○	クルーゼン博士・青島判事長	36.7.15~27, <u>37.5.21</u>

- ★ グルリット 37.5.26
- 黒川将軍・東宮武官長（通軌） 29.2.28
- 黒木陸軍大将（為楨） 37.5.27, 37.5.26, 37.6.7, 37.6.20,
37.7.3, 37.7.10, 37.7.24, 37.7.29,
37.8.4, 37.8.30, 37.9.5, 37.10.13,
38.3.1, 38.3.8, 38.3.9
- ◎◎ 黒田首相（清隆） 21.12.15, 22.2.11, 22.10.27
- ◎◎ クロッケ『フランクフルター・ツアイツンク』紙通信員
37.9.29
- ☆ ◎◎ グローヴァー 37.1.6, 37.10.29, 37.12.12,
- ★ ◎ クロパトキン陸相・総司令官 36.7.4, 37.4.6, 37.4.28, 37.5.7, 37.6.2,
37.6.4, 37.6.5, 37.6.7, 37.6.10,
37.6.20, 37.6.26, 37.6.27, 37.7.3,
37.7.10, 37.7.20, 37.7.28, 37.8.4,
37.8.8, 37.8.26, 37.8.30, 37.9.1,
37.9.2, 37.9.3, 37.9.4, 37.9.5, 37.9.10,
37.9.11, 37.9.12, 37.9.19, 37.9.27,
37.9.29, 37.10.1, 37.10.5, 37.10.12,
37.10.13, 37.10.16, 38.1.5, 38.1.6,
38.1.20, 38.1.25, 38.1.29, 38.2.5,
38.2.11, 38.3.12, 38.3.18
- グン従者 36.5.9, 36.6.3, 36.6.6
- ★ ◎◎ グン前緬甸王 36.1.2,
- ☆ ◎◎ グンドラッハ大尉・戦時通信員 37.9.14
- ケ
- ケイ夫人 37.8.2
- ★ ゲエドケ大佐 38.3.1
- ケーゲル 36.5.12
- ケスラー 33.4.8, 37.8.19

- ケスラー夫人 33.4.8
- ★ ○ ゲッツェン伯爵・提督 [★]38.1.31
- ケットレル男爵・駐北京独国公使 33.6.18, 33.7.6
- ケーニッヒ軍医中佐 36.7.15~27
- ◎ ケーベル哲学教授 38.3.19
- ケルレル將軍 37.7.18, 37.7.20, 37.8.4
- ケンプフェル 9.6.26
- コ
- ◎○ コアット伯爵 27.11.30
- ☆ ○ 高駐日韓国公使（永喜）令息 [★]36.9.18
- ☆ ◎○ 皇后（美子） 22.2.11, 22.4.27, 24.5.18, 24.6.6,
29.2.28, 33.3.24, 33.5.10, 33.7.14,
33.8.15, 34.9.16, 36.11.13, 37.1.1,
38.3.19, [★]38.4.15, [★]38.6.9
- ◎○ 皇子（宣仁） 38.3.19, 38.3.26, 38.3.31, 38.6.6
- 洪將軍 37.1.19
- ◎ 幸田（延子） 38.3.19
- ◎ 幸田（幸子） 38.3.19
- ◎ 河野広中進歩黨員 36.12.12
- 弘法大師 38.4.26
- 児玉男爵・陸軍大将（源太郎） 37.6.7, 37.6.25
- ★ ○ コッツェ夫人（ビスマルク姪） [★]37.3.14
- ★ ◎○ ゴットベルグ通信員 37.1.31, 37.5.23, 37.5.24, [★]37.5.27
- ◎ 後藤（象二郎）大党派大同団結首領 22.3.19, 22.6.25
- 近衛公爵（篤麿）姫 37.4.17~18
- ◎ 小堀遠州 38.4.26
- ○ 小松宮（彰仁） 35.4.2, 36.2.17, 36.2.18, 36.2.25
- ☆ ◎○ 小村男爵・外相（寿太郎） [★]37.1.8, 37.2.7, [★]37.11.12, 37.11.20,
[★]38.2.16, 38.3.10, 38.4.28, 38.6.1,

		38.6.9
	ゴリキー	38.3.19
●	○ コルシェルト	<u>12.2.22</u> , 12.8.4
	ゴルチャコフ将軍	38.2.8
	コルネリア	29.3.2
	○ コルヴィザール甲騎兵大佐	35.11.15, 37.3.26, 37.7.3, 38.2.16
☆	○ コルヴィザール甲騎兵大佐夫人	[☆] 37.7.3, [☆] 38.2.16
	コンダー	37.5.21
☆	○ コンダー夫人	[☆] 37.6.13
	○ 近藤	23.10.15
サ		
	○ 西園寺侯爵（公望）	37.3.16, 38.6.5
●	○ 西郷侯爵・元帥・内相（従道）	24.5.29, 24.6.2, <u>35.6.1</u> , <u>35.6.2</u>
	○ 西郷侯爵・元帥・内相（従道）夫人	33.8.3
	◎ 西郷陸軍大将（隆盛）	10.2.23, <u>10.10.4</u>
	○ 斎藤博士	38.4.26
	◎○ ザイブルク総領事	<u>38.5.27</u>
	◎○ ザイブルク総領事夫人	<u>38.5.27</u> , 38.6.1
	嵯峨天皇	38.4.26
★	坂本竜馬	[★] 38.4.15
★	◎ サキ（？）独国公使館通訳	[★] <u>33.7.10</u>
	○ 桜井助手	10.10.5
	◎ 左団次（市川 一）	<u>12.3.1</u>
	佐藤（進）	22.10.18
★	◎○ サトー駐北京英国公使	33.4.20, <u>34.11.22</u> , [★] 37.12.17
	○ 実吉男爵・海軍医監（安純）	38.3.4
	◎○ 三宮男爵・式部長（義胤）	<u>33.1.8</u> , 33.1.30
	○ 三宮男爵・式部長（義胤）夫人	28.11.18
	三条公爵・首相（実美）	22.2.11, 22.4.27, 22.10.18, 22.10.27,

☆	○	三条子爵(?)	[☆] 22.8.12
	◎◎	サンチス大佐夫人	<u>38.1.11</u>
シ			
☆	○	シェファー駐日奥国公使	9.11.30, 38.1.22, [☆] 38.1.31, 38.2.26
		ジェームス通信員	37.7.3
★		志賀重昂代議士	[★] 37.12.17
		シタイヘン主任司祭	37.12.19
		シタインベルガー	38.1.22
		シッドモーア	33.8.22~23
		品川内相(弥二郎)	24.6.2, 25.3.12
	◎	柴田嬢	<u>38.3.19</u>
		渋沢男爵(栄一)	38.3.11
	◎◎	シーボルト(アレキサンダー)	<u>12.3.1</u> , 22.4.27, 24.3.7
		シーボルト(フランツ)	9.6.26
		島津侯爵(忠義)	22.2.11
		島津三郎(久光)	10.2.23
		シーモーア提督	33.6.17, 33.6.18, 33.6.22, 33.8.22~23
	◎◎	下条(美術学校教授)	<u>37.5.27</u> , <u>37.10.17</u>
		蛇足(曾我 一)	38.4.26
☆	◎◎	ジャーディン海軍大尉	[☆] <u>37.1.2</u>
		暹羅国皇太子	36.12.27
		周文	38.4.26
	◎	シュタイヘル牧師	<u>36.2.1</u>
		シュタイン駐韓露国代理公使	36.6.24
	○	シュティルフリート紙幣局雇員	12.4.29
	○	シュナイダー	13.7.13
	○	ジュームーラン画伯	28.11.18
	◎◎	シュルツェ博士	<u>9.6.9</u> , 9.6.26, 9.10.25, 12.4.2, 12.6.1, 12.10.26, 13.2.9, 13.6.22, 13.11.29,

	37.7.5
醇親王	34.9.5
聖徳太子	37.4.17~18
清国皇帝 (徳宗)	33.7.22, 33.8.22~23
○ シンツィンガー	33.8.4
○ シンツィンガー夫人	33.8.4
☆ ○ シンツィンゲル	37.8.2, 37.9.29, [★] 37.10.20, [★] 37.11.29
○ シンツィンゲル夫人	37. 8.2, 38.1.22, 38.2.26
神武天皇	33.2.8, 35.2.11, 37.2.11
ス	
● ○ 末川夫人	<u>13.7.13</u>
● ○ 末川令息	<u>13.7.13</u>
末松男爵・前内相 (謙澄)	37.2.9
○ 杉子爵 (孫七郎)	33.5.26
☆ ○ 杉子爵 (孫七郎) 令息	[★] 37.5.7
★ スクリードロフ旅順司令官	37.4.24, 37.6.2, [★] 37.6.15, 37.6.16, [★] 37.6.18, 37.6.20, 37.7.10
●○○ スクリバ博士	24.5.18, 26.8.17, <u>37.12.8</u> , <u>37.12.25</u> , <u>38.1.2</u> , <u>38.1.3</u> , 38.1.6, 38.1.10, 38.2.25
★ スタケルベルク	[★] 37.6.20
スタルク提督・旅順司令長官	37.2.19
★ ステッセル中将	37.5.24, 37.8.8, 37.8.19, 37.9.2, 37.9.4, [★] 37.10.16, 37.11.15, 37.12.2, [★] 37.12.17, [★] 37.12.18, [★] 38.1.2, [★] 38.1.6, 38.1.11, 38.1.14, [★] 38.1.16, 38.1.28, 38.4.14
ステッセル中将夫人	38.1.14
○ ステッテン少佐	37.7.18

◎◎	ステーヴンス韓国外交顧問	37.9.5, <u>37.10.31</u>
◎◎	ストランジ青年	<u>38.5.10</u>
◎◎	ストルーベ駐日露国公使夫人	<u>13.2.9</u>
● ○	ストルーベ駐日露国公使令息	<u>13.2.9</u>
☆●◎◎	ストレート	<u>[☆]37.11.22</u>
○	ストーン	37.10.31
	スペンサー	15.10.12
	スマイルノフ	38.4.14
セ		
	西太后	33.8.22
	セルギウス大公	38.1.20, 38.2.18
ソ		
☆ ◎◎	副島内相（種臣）	<u>[☆]14.5.12, 25.3.12</u>
● ○	副島内相（種臣）令息	<u>14.5.12</u>
◎◎	蘭田博士・仏教大学総長（宗恵）	<u>38.4.26, 38.5.13</u>
◎◎	ゾンターク女史	<u>36.4.27</u>
タ		
○	タイラー	36.6.10
	ダーウィン	34.11.22
○	高木画家	36.5.9, 36.6.3, 36.6.6, 36.6.10, 36.6.23
○	高木兼寛男爵	38.3.4, 38.5.27
	高島（小金治）	34.9.3
◎	高島（鞆之助）	<u>22.10.27</u>
○	高田慎蔵	22.4.20~22, 36.12.23, 37.6.16, 38.1.22
○	高田（慎蔵）令息	38.1.22
○	高橋順太郎教授	34.11.22

◎◎	高義 駿式部官	36.5.5 <u>~~~~~</u>
○	滝	37.6.20
○	滝夫人	37.6.20
◎◎	滝令息	37.6.5, <u>37.6.20</u> , 37.12.12
	田口和美教授	35.4.2, 37.2.9
◎	伊達家姫君 (富子)	21.12.15 <u>~~~~~</u>
●◎◎	伊達侯 (慶邦) 令息	<u>12.4.2</u>
	田中司法相 (不二麿)	24.6.2
☆ ○	田中子爵・宮相 (光顕)	33.1.20, 33.2.8, 37.2.11, 37.3.2, 37.3.3, 37.3.10, 37.3.14, 38.1.10, ☆ 38.1.11, 38.6.9
●◎◎	田中子爵・宮相 (光顕) 夫人	37.2.11, <u>37.3.14</u> , <u>38.1.11</u>
○	ダネタン	33.8.4
○	ダネタン夫人	33.8.4
●◎◎	タノスケ	<u>13.3.20</u>
◎◎	タノスケ令母	<u>13.3.20</u>
★ ◎◎	タフト将軍・前菲律賓総督	37.1.4, <u>38.6.23</u> ☆
●◎◎	田村参謀次長 (怡与造)	34.9.16, <u>36.9.30</u> , 37.9.5, <u>37.10.13</u>
	田村参謀次長 (怡与造) 令息	37.9.5
☆● ○	ダンカン『ホンコン・テレグラフ』元主筆次席	☆ <u>38.6.23</u>
●◎◎	団十郎 (市川 一)	<u>12.3.1</u> , <u>36.9.20</u>
★	団十郎 (市川 一) 令尊	☆ 36.9.20

子

◎◎	チェンバレン	22.10.18, 35.1.1, <u>35.1.2</u>
○	チートハム	33.4.20
○	駐日清国公使 (裕庚)	28.11.18
◎◎	駐日清国公使 (裕庚) 夫人	28.11.18 <u>~~~~~</u>
◎◎	駐日清国公使 (裕庚) 令嬢	28.11.18 <u>~~~~~</u>

	兆殿司	38.4.26
◎○	珍田次官 (捨巳)	<u>37.3.14</u>
◎○	珍田次官 (捨巳) 夫人	<u>37.3.14</u>
ツ		
◎	ツェルニビー大佐	<u>36.12.27</u>
○	都築 (聲六)	34.9.8
	坪井教授 (正五郎)	37.6.5
テ		
○	ティーゲル生理学教師	12.4.2, 12.10.26
○	ディースバッハ伯爵・仏国公使館員	12.6.29
◎○	ティール公使館付武官	33.8.4, 36.11.13, 37.7.18, 38.1.22, <u>38.6.7</u>
○	ティール公使館付武官夫人	33.8.4, 36.11.13, 38.6.7
◎	ティルピッツ提督	<u>37.2.19</u>
	デッデルライン深海研究者	37.11.29
	デートリンク税関監督官	27.11.30
☆ ◎○	デニソン	<u>37.5.8</u> , <u>37.9.1</u> , [★] 37.9.12, 37.10.31, <u>38.2.1</u> , <u>38.3.9</u>
● ○	デニソン夫人	<u>13.7.13</u>
◎○	デュバイユ駐日仏国公使	<u>35.7.4</u>
◎	デュムティエール教育部長	<u>35.12.18</u> , 36.1.2
☆ ○	寺内陸相 (正毅)	[★] 37.4.9, [★] 37.6.7, 37.9.5, 37.10.20, [★] 37.12.8, [★] 38.3.4, [★] 38.3.9, 38.3.23
	寺内陸相 (正毅) 令息	37.9.5
○	寺島伯爵 (誠一郎)	38.5.28
◎○	寺島伯爵 (誠一郎) 夫人	<u>38.5.28</u>
◎○	寺田文部参事官	<u>37.4.22</u>
☆ ◎○	天皇 (睦仁)	9.11.3, 10.2.23, 12.7.10, 12.5.6,

21.12.15, 22.1.12, 22.2.11, 22.4.15,
22.6.25, 23.11.29, 24.3.7, 24.5.18,
24.6.6, 26.11.28, 33.1.17, [★]33.1.20,
33.3.23, 33.3.24, 33.5.9, 33.5.10,
33.7.14, 33.7.22, 33.8.15, 34.9.16,
35.4.2, 35.7.11, 35.11.15, 37.1.1,
37.2.11, 37.2.12, 37.3.2, 37.4.12,
37.4.24, 37.8.13, 37.8.19, 37.11.3,
38.1.2, [★]38.1.5, 38.1.6, 38.1.11,
38.1.24, 38.2.7, 38.2.16, 38.3.19,
38.3.29, 38.4.3, 38.6.3, [★]38.6.9

ト

★ ◎ 東郷提督・海軍大将 (平八郎)

37.2.11, 37.4.9, [★]37.4.24, 37.5.5,
[★]37.5.12, 37.6.7, 37.6.27, 37.6.29,
[★]37.7.3, 37.7.10, [★]37.8.14, 37.12.25,
37.12.30, 38.1.5, 38.6.3

☆●◎○ 東宮・皇太子 (嘉仁)

28.8.11, 28.8.12, 28.8.21, 28.9.23,
29.2.28, 33.1.2, 33.1.5, 33.2.8,
33.2.11, 33.3.23, 33.5.9, 33.5.10,
33.5.11, 33.5.12, 33.8.4, 34.9.15,
34.9.16, 34.9.28, 34.10.4, 34.10.5
34.10.28, 35.3.6, 35.11.15, 37.1.1,
37.2.12, 37.4.20, 37.4.24, 37.5.6,
37.6.18, 37.10.9, 37.11.3, 37.12.2,
38.1.22, 38.2.3, 38.3.19, 38.3.25,
38.3.26, 38.3.31, 38.4.26, 38.5.13,
[★]38.6.6

★ ◎○ トク (ベルツ令息)

25.8.27, 25.9.10, 26.8.17, 26.8.21,
26.12.24, 27.7.25, 27.9.8, [★]29.2.28,

		29.3.2, 33.4.6, <u>33.4.7</u> , <u>33.4.8</u> , 33.4.17, 34.11.2, 36.5.23, 37.5.5, 37.9.11, 37.10.11, 38.7.19, 38.7.22
	○ トーク大尉	37.11.5
	徳川亀之助	22.2.11
●	○ 徳大寺侯爵・内大臣（実則）	33.1.2, 34.9.16, <u>37.4.24</u>
	土佐侯（山内豊範）	12.7.12
	土肥慶蔵教授	38.1.6
	ドフライン博士	37.11.29
	戸水教授（寛人）	37.8.26
	○ 富田師範（常次郎）	36.12.12
☆	○ 戸山教授（正一）	[★] 34.9.7
	ドライヴァー	37.6.18
★	◎ ドラゴミロフ総司令官	<u>37.10.1</u> , [★] 37.10.16
	トル伯爵	36.2.1
	○ トルッペル総督	36.7.15~27, 36.11.13, 37.5.21
★	トロウブリッチ大尉・公使館付海軍武官	[★] 37.3.26
	○ トロムラー公使館付武官	36.11.13
ナ		
	◎○ ナウマン日本地質調査部長官	<u>9.6.26</u> , 9.11.30, 12.6.1, 12.7.6, <u>12.8.4</u>
	長井長義	35.4.2
	○ 長崎式部官（省吾）	37.3.2, 37.3.3
	◎ 長崎特派員	<u>38.1.28</u>
	○ 長島医師	37.9.16, 37.9.22, 37.11.2
	○ 中西亀太郎教授	38.4.11, 38.4.13
☆	○ 中村小田原郡長	[★] 22.8.12
★	中村将軍（覚）	[★] 37.12.24
	長森某（藤吉郎）	37.7.26

○	中山侯爵・東宮大夫（孝麿）	38.2.3, 38.6.6
○	長与又郎博士	38.3.16
◎○	長与又郎博士令妹	38.3.16
○	ナピーア英国公使館員	22.10.18
○	ナピーア英国公使館員夫人	22.10.18
●◎○	鍋島侯爵（直大）	<u>12.7.9</u> , 34.11.25
☆●◎○	鍋島侯爵（直大）夫人	<u>12.7.9</u> , <u>33.8.3</u> , <u>37.11.16</u> [★]
●○	鍋島侯爵（直大）令息	<u>12.7.9</u> , <u>13.7.13</u>
◎○	鍋島侯爵（直大）令弟	<u>12.7.9</u>
●○	鍋島侯爵（直大）令弟夫人	<u>12.7.9</u>
○	鍋島侯爵（直大）令嬢	33.6.12
★	鍋島青年	[★] 38.3.8
	ナポレオン	37.4.22, 38.4.26, 38.5.12
二		
●○	二位局（中山慶子）	<u>26.11.28</u> , <u>33.1.17</u> , <u>33.1.20</u> , <u>33.5.9</u> , <u>35.11.15</u>
	ニコライ大公	37.10.3
★	ニコラス二世露国皇帝	24.5.11, 24.5.18, 36.12.23, [★] 37.1.19, 37.2.13, [★] 37.9.28, 37.10.7, 37.10.16, 37.11.15, 38.1.6, 38.1.14, 38.1.25, 38.2.4, 38.2.5, 38.2.7, 38.2.26, 38.3.8, 38.3.29
	ニコラス二世露国皇帝令息	37.8.26
	ニコラス僧正	37.3.6
☆◎○	ニコルソン将軍	[★] <u>37.5.24</u> , 37.7.23, [★] <u>37.9.29</u> , 37.11.5
	西陸軍大将（寛二郎）	37.6.7
◎	西野（文太郎）	<u>22.2.16</u> , 22.3.19

ネ

- ◎○ ネットー 9.6.26, 12.6.1, 12.7.6, 12.8.4, 13.3.20,
13.6.22, 37.12.25, 38.8.29
- ネボガトフ提督 38.6.23
- 根本 正代議士 33.6.5
- ネルソン提督 37.2.19

ノ

- ★ ◎ 乃木将軍・陸軍大将（希典）[★]37.6.2, [★]37.6.4, 37.6.7, 37.9.4,
[★]37.12.18, 38.1.2, 38.1.5, 38.1.6,
38.1.11, 38.1.16, [★]38.2.28, 38.3.11,
38.6.3
- 乃木将軍・陸軍大将（希典）令息 37.6.2, 37.6.4, 38.1.6
- ◎○ 野津将軍・元帥（道貫）13.6.22, 13.6.23, 37.6.2, 37.6.7,
37.9.4, 37.9.5
- 野村子爵（靖） 33.5.26
- ノルマン仏国新聞報道員 21.12.19

ハ（ヴァ）

- ヴァルデルゼー総指揮官 33.8.20
- ☆ ◎○ ヴァレー伯爵・駐日独国公使 34.9.7, 34.12.14, 35.5.2, 36.1.27,
36.2.1, 36.12.17, 37.1.1, 37.1.6,
37.1.19, 37.2.5, 37.5.21, 37.7.10,
37.7.18, 37.9.4, 37.9.5, 37.9.23, [★]37.10.1,
37.11.6, 37.11.16, 37.12.8, 37.12.15,
38.1.6, 38.1.27, 38.2.16, 38.2.26,
38.2.28, 38.3.4, 38.3.12, [★]38.3.19,
38.3.25, 38.5.28, 38.6.1, 38.6.5, 38.6.7
- ハイゼ造船技師 9.11.30
- ★ ◎○ バイル 9.6.26, 10.3.17, 11.3.17, 12.3.1, 12.6.1

12.6.6, 12.7.6, 12.7.12, 12.7.27, 12.8.4,
12.10.20, 13.3.20, 13.7.13, 13.11.18,
37.12.25

バイル令嬢 → 原田男爵（一道）未亡人

- ◎◎ ハイน์リッヒ親王 12.6.1, 12.6.6, 12.11.16~23,
33.8.22~23
- バウエル 33.8.4, 36.5.12
- バウマン 36.5.9, 36.5.19
- パウル 36.5.12
- パウルス独国商人 35.12.31
- パウルセン教授 38.1.11
- ◎ パウロフ駐韓露国弁理公使 37.1.3, 37.2.9
- ☆ ◎◎ バークレー英国公使館一等書記官 37.7.23, 37.8.2, 37.12.4, 38.2.1
- ◎◎ バークレー英国公使館一等書記官夫人
37.12.4
- ◎ 白礼雲 37.3.8
- ◎◎ バジエ 27.11.30
- ☆ ◎◎ 橋本男爵（綱常）
13.6.22, 13.6.23, 22.10.18, 25.8.28,
26.11.28, 33.2.8, 33.3.23, 33.8.4,
34.10.4, 34.10.5, 35.4.2, 37.3.2, 37.3.6,
37.5.26, 37.11.12, 37.12.2, 37.12.12,
38.1.22, 38.3.4, 38.3.26, 38.5.19,
38.6.9
- ハース牧師 38.1.22, 38.6.3
- ハース牧師夫人 38.1.22
- パストール 34.11.22
- 長谷川陸軍大将（好道） 37.6.7
- ハッチンソン海軍大佐 37.11.5
- ハッツフェルト伯爵 36.11.13, 37.11.12., 37.11.20, 37.12.4,
37.12.15, 37.12.19, 38.1.6, 38.1.22,

- ハッツフェルト伯爵夫人 38.2.16
- ☆ ◎○ ハナ（ベルツ令妻・荒井花子） 38.2.16
 22.5.23, 22.6.24, 25.8.27, 25.9.10,
 26.8.17, 26.8.21, 26.12.24, 27.7.25,
 27.9.8, 28.8.23, 29.2.28, 29.3.1, 29.3.2,
33.4.6, 33.4.7, 33.4.17, 33.8.15, 34.9.3,
 34.11.2, 34.11.29, 36.12.27, 37.4.20,
 37.5.5, 37.5.21, 37.8.19, 37.10.17,
 37.10.23, 37.10.28, 38.1.1, 38.1.5,
 38.1.22, 38.2.3, 38.4.12, 38.4.15,
 38.5.27, 38.6.1, 38.6.3, 38.6.5, 38.6.6,
38.6.9, 38.7.19, 38.7.22
- ◎○ バナーマン卿 37.1.2
- バーネット将軍 38.4.11
- ◎ バプロザボフ 37.1.19
- ハーベレル教授 37.7.18, 37.11.29
- ★ ○ ハミルトン将軍 37.3.26, 37.10.17
- ★ ○ 林駐英国公使（董） 33.4.20, 37.10.20, 37.11.15, 37.11.29
- 原田男爵（一道）未亡人 37.12.25
- ハリス（初代駐日総領事・タウンSEND）
 37.1.18
- ☆●◎○ ハリス博士・元医師（ラザフォード）
37.11.25
- ○ ハリス博士・元医師（ラザフォード）令息
37.8.22
- バルストウ大尉 36.6.6, 36.6.8
- ☆ ◎○ バーレー従軍記者 37.1.8, 37.7.3
- ハワード 37.10.31
- ★ ○ ハーン間門ホテル主人 37.10.5, 37.11.12
- ハント 36.5.4

ヒ

	土方伯爵（久元）	33.2.8
★	ビスマルク独国宰相	[★] 12.9.12, 37.3.14, [★] 38.2.8
◎○	ビーティ艦長	33.8.22~23
	ヒデ	29.2.28
	秀吉（豊臣一）	36.10.12, 37.6.7, 38.4.15, 38.4.26
	秀吉（豊臣一）夫人	38.4.15
	秀頼（豊臣一）	38.4.26
	ピタゴラス	34.11.22
	ヒポクラテス	34.11.22
◎	ヒューバー	35.12.12
☆ ◎○	ヒューブナー伯爵・元帥	[★] 38.5.28
	○ ヒューム大佐・公使館付武官	37.1.2
	ヒューム大尉	37.11.16
★	○ ヒューム大尉夫人	[★] 37.11.16
★	ビューロー独国宰相	37.6.22, [★] 37.12.1, [★] 37.12.13, [★] 38.1.11, [★] 38.1.18, 38.1.31, [★] 38.3.19, 38.3.21
	○ 平井軍医正	37.10.20
	○ 平井毓太郎京都医科大学教授	25.8.28, 38.4.13
★	○ ヒルゲンドルフ博士	9.6.26, [★] 9.11.25
☆ ◎○	広沢若伯爵（金次郎カ）	37.12.18, [★] 38.1.16
	○ 広沢若伯爵（金次郎カ）岳父	38.1.16
	広重（安藤一）	37.8.22
◎	広瀬中佐（武夫）	37.4.12
◎	関泳煥将軍	36.5.5
	関泳翊	36.4.30
	関妃	36.4.27, 36.5.9
	○ ビング（バイル義弟）	13.7.13
◎○	関丙爽将軍	36.5.5

フ (ヴ)

- ★ ○ ファーガソン米国公使館書記官 [★] 37.3.24, 37.10.16
 ファラデー 34.11.22
 フィービッヒ 38.2.5
 フィルヒョウ 12.9.21, 34.11.22
- ★ ◎○ ヴィンチ伯爵・駐日伊国公使 [★] 37.11.16
 ☆ ○ ヴグニー [★] 37.6.18
- ◎○ フェ伯爵・駐日伊国公使 9.11.15
 フェスカ教授 34.11.22
 ○ フェノロサ 22.3.7
 ● ○ フェノロサ夫人 13.7.13
- ☆ ◎○ フェルスター中佐 37.4.28, [★] 37.6.2, 37.7.18
 ○ フォイクト 37.7.18
- ★ フォック大佐 [★] 37.11.15, [★] 37.12.17
- ☆ ○ フォッサリエール駐神戸仏国領事 [★] 38.4.14
 フォルマー 38.1.18
- ★●◎○ ブーグァン退役陸軍大尉 [★] 38.5.10, 38.5.13
 ◎○ ブーグァン退役陸軍大尉夫人 38.5.13
 ◎ 福島将軍 (安正) 37.2.24, 37.9.5
 福島将軍 (安正) 令息 37.9.5
- ☆ 福原 (丑之助) [★] 37.6.20
 伏見宮 (貞愛) 37.11.26
 ブーフハイスター 33.8.4
 ブライト 15.10.12
 ブライヤー英国漫画家 37.3.14
- ◎○ ブラウン韓国総務司 36.4.27
 ブラバッキー女史 22.3.7
- ◎ ブラント清国駐在独国公使 37.11.26
 フリードリッヒ普国大帝 38.1.11
 ○ ブリンクレー 33.1.12, 34.9.3, 37.1.31, 37.10.31

- ○ 古河（市兵衛）令息 37.9.10
- ブルグスドルフ地方長官 37.10.23
- プールタレー伯爵・海軍提督 28.11.18
- プールタレー伯爵・海軍提督夫人 28.11.18
- プールタレー伯爵・海軍提督令嬢 28.11.18
- ☆ ◎○ フレイク帝国ホテル支配人 38.2.26, [☆]38.2.28, [☆]38.3.10
- ☆ ○ フレイトス駐日葡国公使 [☆]37.3.2, 37.5.8, 37.8.2, 37.11.28,
38.3.10
- ☆ ○ フレーザー元駐日英国公使令息 [☆]37.10.14
- プレーメ露国内相 37.8.1
- ブロックハウス 38.2.8
- フロレンツ教授 35.3.26, 35.11.15, 35.12.31, 38.1.22
- フロレンツ教授夫人 38.1.22
- フンケ海軍大佐 36.7.15～27
- ◎○ ブンシュ博士 36.4.27, 36.5.1, 36.5.9, 36.6.24, 37.3.8,
38.3.2
- へ
- ヘーゲル 35.12.31
- ベーゼ軍医 36.11.13
- 別府（晋介） 10.10.4
- ◎ ヘーネル 12.9.12
- ★ ベーベル独国社会民主党党首 [☆]37.5.12, 37.6.22
- ペリー 37.4.1, 38.2.8
- ★ ペルタン前海相 [☆]38.3.28
- ★ ◎○ ペルニッツ船長 [☆]38.6.23
- ☆ ◎○ 波斯国前宰相（アタバケ・アザム） 36.12.27, [☆]37.1.4
- 波斯国前宰相（アタバケ・アザム）令息
37.1.4
- ◎○ ベルボラニ伯爵・駐日伊国公使夫人 11.3.26

- ヘルマン (ベルツ舎弟) 29.3.2, 38.2.26
- ヘルムホルツ 34.11.22
- 弁慶 12.3.1, 12.11.16~23
- ヘンネッケン 37.9.14

ホ

- ◎○ ボアス通信員 37.3.14
- ◎○ ホィットニー 12.9.22
- ◎○ 細川中央衛生局長 (潤次郎) 13.6.22
- ◎ 細川侯 (護久) 令息 22.4.27
- ポッシュェール 35.12.12
- ホッホベルク伯爵 37.5.27
- ポーテン中尉 37.7.18
- ボニファチウス 37.4.17~18
- ホフマン軍医少尉 9.6.26
- ホフマン艦長 36.7.29
- ★ ホベレフ 37.10.15
- ホーラー 36.12.12, 37.3.26
- 堀越 → 団十郎 (市川一)
- ボリス大公 37.5.10
- ◎ ホルレーベン駐日独国公使 22.3.7
- ホワイトヘッド英国公使館員 33.4.20, 33.6.6

マ

- ◎○ マイエット 9.6.26, 12.2.22, 13.2.25, 37.7.5,
- ○ 前田侯 (利嗣) 33.6.12, 33.6.14
- 前田侯 (利嗣) 夫人 33.6.12
- ◎○ 前田 (香雪) 37.10.17
- ◎○ マカロフ旅順司令長官 37.2.19, 37.3.16, 37.3.30, 37.4.12,
- 37.4.24, 37.5.12

	マクドナルド医師	38.2.25
☆	○ マクドナルド駐日英国公使	33.8.22~23, 36.9.30, 36.10.4, 36.12.17, ☆ 37.2.5, ☆ 37.3.26, 37.5.26, 37.7.23, 37.7.29, 37.8.2, ☆ 37.8.12, ☆ 38.3.29, 38.6.2
☆	○ マクドナルド駐日英国公使夫人	☆ 36.11.13, 37.8.2
	◎◎ 益田 (孝)	37.5.27 ~~~~~
	松方伯爵・首相 (正義)	24.6.2, 37.2.5, 37.2.13, 37.10.29
	◎◎ 松方伯爵・首相 (正義) 令息	37.10.29 ~~~~~
	マッキンレー米国大統領	34.9.9
●◎◎	松田東京府知事 (道之)	<u>15.7.6</u>
◎◎	松田東京府知事 (道之) 夫人	<u>15.7.6</u> ~~~~~
	松平	22.4.27
	○ 松平	38.1.14
	松本 順博士	38.3.4
◎◎	マティニヨン博士	<u>38.1.11</u> ~~~~~
	○ マテオリウス博士	36.11.13, 38.5.19
★ ◎	マハン提督	☆ <u>37.10.16</u> ~~~~~
☆	○ マルチノ駐日伊国公使	22.1.12, ☆ 22.2.28, 22.7.24
	マルチン博士	9.11.30
◎◎	マレガリ駐日伊国公使	<u>37.3.24</u> ~~~~~
◎◎	マレガリ駐日伊国公使夫人	<u>37.3.24</u> ~~~~~
	○ マンロー博士	37.3.24, 37.5.8

ミ

☆	○ 三浦教授 (謹之助)	☆ 34.9.7, 37.7.2, 38.2.7
	○ 三井男爵 (八郎右衛門)	34.9.3, 37.4.9, 38.5.27, 38.6.4
◎◎	迪宮 (裕仁)	34.9.16, <u>37.2.12</u> , 37.6.18, <u>37.10.9</u> , 38.3.26, <u>38.3.31</u> ~~~~~
	ミッドフォード	9.11.7
◎◎	ミュガブユール僧正	35.6.22, <u>36.2.1</u> , 37.1.18, 37.6.30 ~~~~~

◎◎	ミュテール僧正	36.4.27, <u>36.4.28</u> , 36.5.1
	ミューラ軍医少佐	9.6.26
◎◎	ミラー駐牛荘米国総領事	<u>37.11.16</u>
	ミル	15.10.12
◎◎	ミント加国総督夫人	<u>36.10.4</u>
◎◎	ミント加国総督令嬢	<u>36.10.4</u>

ム

● ○	陸奥伯爵・外相（宗光）	<u>28.9.23</u>
○	陸奥伯爵（広吉）	37.9.10, 38.5.27
○	村松（考古学者）	37.3.24, 37.5.8, 38.2.10

メ

☆ ◎◎	メイシュ中佐・米国公使館付武官	<u>37.8.15</u>
	目賀田（種太郎）	37.9.5
○	メクレンブルク	37.7.18
★ ◎◎	メーズウェ北鎮雲山鉦山支配人	<u>36.6.8</u> , <u>36.6.10</u>
◎◎	メーズウェ北鎮雲山鉦山支配人夫人	<u>36.6.8</u>
○	メッツゲル鉦山技師	12.3.1
○	メッテルニッヒ伯爵	37.7.18, 38.1.6
★ ◎◎	メール大尉	35.12.12, 35.12.31, <u>36.1.2</u>

モ

○	毛利公（元昭）	33.5.26, 38.6.4
◎◎	毛利公（元昭）夫人	<u>33.5.26</u> , 33.8.3
◎◎	毛利公（元昭）令嬢	<u>33.5.26</u>
●◎◎	毛利先公（敬親）未亡人	<u>33.5.26</u>
◎	モーズレ	<u>38.2.28</u>
◎	森文相（有礼）	22.2.11, <u>22.2.16</u> , 22.3.19
◎	モリソン『タイムス』通信員	<u>37.7.3</u>

守田勘弥 (築地島原大劇場主) 12.3.1

◎ モール夫人式部官 22.2.11

ヤ

●◎○ 山県伯爵・首相・元帥 (有朋) 22.10.18, 22.10.27, 24.3.7, 33.4.20,
37.2.5, 37.2.13, 37.2.24, 37.6.25

◎○ 山階宮 (菊麿王) 33.7.14, 38.6.5, 38.6.9

●◎○ 山田伯爵・司法相 (顕義) 24.6.2, 25.3.25

山田旅団長 (保永) 37.10.18

● ○ 大和子爵 (山尾庸三カ) 37.12.13, 37.12.18

★ ○ 山本海相 (権兵衛) 34.10.28, 35.4.18, 37.2.24, 37.3.30
37.6.7, [★]37.6.20

★ ◎○ ヤンソン 35.7.3, 35.7.10, 35.7.11, [★]37.5.26
ヤンソン夫人 37.5.26

ユ

☆ ◎○ 雄大佐・雲山郡長 [★]36.6.10

◎○ 雄大佐・雲山郡長令息 36.6.10

◎ ユンケル指揮者 38.3.19

ヨ

☆ ○ 吉井宮内次官 (友実) [★]22.8.9

芳川文相 (顕正) 22.3.19, 24.6.2

○ 吉田博士 38.4.26

義経 (源一) 12.3.1, 12.11.16~23

◎ 淀君 38.4.26

◎ 頼朝 (源一) 12.3.1, 13.11.8

ラ

◎○ ライデン伯爵・駐日独国公使 33.5.24

	ライン・ボン大学教授	34.11.22
	ラウテラー	37.4.22
	ラートゲン前東大教授	34.11.22
◎○	ラベ探検家	35.1.30 <u>~~~~~</u>
○	ランガルト薬物教師	12.4.2, 12.10.26
★	○ ランズダウン卿	★ 37.9.28
	○ ランツ艦長	33.6.22, 33.7.14

リ

☆ ◎○	李駐日清国公使・李鴻章養子（徑方）	★ <u>24.3.8, 33.4.18</u>
○	李駐日清国公使（盛鐸）	33.4.18
○	李通訳	36.5.9, 36.6.3, 36.6.6, 36.6.10
	李鴻章	24.3.8, 27.11.30
	李址鎔	37.3.8
◎	李相沢	37.1.8 <u>~~~~~</u>
●◎○	李容翊	<u>36.2.8, 36.6.24, 37.3.8</u>
	利休（千一）	38.4.26
◎	利休令嬢	38.4.26 <u>~~~~~</u>
◎○	リース教授	35.7.3, 35.7.10, <u>35.7.11</u>
	リース	37.9.14
○	リスター卿	37.8.2
○	リッター男爵・独国公使館付武官	35.1.30, 35.11.15
☆ ◎○	リニユール師	★ <u>38.2.14</u>
	リーネウィッチ総司令官	38.1.20, 38.3.18
◎	リヒター	12.9.12 <u>~~~~~</u>

ル

	ルシー → フォッサリエール駐神戸仏国領事	
★ ◎	ルーズヴェルト	★ 37.5.12, <u>37.11.15, 37.11.26, 37.12.10,</u>

★38.1.29, 38.6.23, 38.8.27

レ

- ◎ レオ十三世法王 11.2.25
◎◎ レーマン 38.1.6, 38.6.7
レントゲン 34.11.22
☆ ◎◎ レーンホルム教授 33.4.20, 35.3.1, [★]37.3.2, 38.1.27, 38.6.1

ロ

露国皇太子 → ニコラス二世露国皇帝

露国皇帝 (アレクサンドル三世) 24.5.18

露国皇后 (フェドロヴナ) 24.5.18

- ★ ◎ ロゼストウェンスキー中将・バルチック艦隊司令長官
★[★] 37.10.30, 38.1.6, 38.1.25, 38.5.5,
38.5.19, 38.5.29, 38.6.23
☆ ● ◎◎ ローゼン男爵・駐日露国公使 36.9.30, 36.10.6, [★]36.12.14, 36.12.27,
37.2.7, [★]37.2.10, 37.2.11, 37.3.6
☆ ◎◎ ローゼン男爵・駐日露国公使夫人 37.2.7, [★]37.2.10
ロバーツ (フレデリック・スレイ元帥)
33.2.17
☆ ○ ローベルト (ベルツ舎弟) 37.5.26, [★]37.6.18, 37.11.15
★ ローマ法王 (ピウス十世) [★]37.6.30
◎ ロンドン米国作家 37.5.24, 37.7.3

ワ

- ワイペルト駐京城独国領事 36.5.5
ワグナー 38.3.19
ワグネル 12.8.4
○ 和田 (維四郎) 33.1.2
◎◎ 和田 37.10.29

- 和田博士・海軍軍医 36.6.24
- 渡部（小使） 35.11.15
- ワルトハウゼン 24.3.7

〔備考〕 これは、『日記』に固有名を以て登場する人名を五十音順に列記したものである。人名の頭部に付した●印は、『日記』の記主たるベルツの対診者、◎印は、当該人物の為人が記されている者、○印は、ベルツの面謁者・面談者、もしくはそう考えられる者を各々示す。各人名の末尾に記す数字は、各々の人名が所見される年・月・日条である。そしてこの年・月・日条のうち、実線付記のそれは、当該者がベルツの対診者である場合、波線付記のそれは、当該者の為人記されている場合、★印付記のそれは、当該者の肉声による発言・言説、もしくは書簡・新聞・電報、その他の文書記録類による言明・声明が記されている場合を各々示し、このうち特にベルツ本人に対するものについては、☆印を付記してある。また、同一人に実線・波線の双方が付記されるべき事例については、印刷の都合上、これを二重実線で示してある。そして、各人名に付した栄爵・称号・官職・地位等は、全体の統一的な体裁を考慮して、必ずしも該年・月・日当時のものに限定せず、『日記』の全叙述対象範囲内の年次におけるものを適宜に按配して記載してある。さらに各人名の末尾（ ）内は、索引としてより精確なものならしめるべく、稿者の調査しえた範囲内で補記したものである。不備・過誤の個所のあることを惧れるのであるが、それらについては、諸家の御叱正を得て他日、補足・修訂したいと考えている。なお、件の『日記』における明治29年より同32年までのブランク部分を補填するために供用されている後日の手記「明治時代」中の一文（上巻185頁～同189頁）と、明治36年7月29日条の次に、同年9月15日条への導入部として配置されているところの、明治39年に脱稿され、独国の新聞『ケルニッシュェ・ツァイツク』紙に寄稿された「日本における反独感情とその誘因」なる一文（上巻318頁～同330頁）とに各々所見される人名については、当索引には載録していない。